第６章　アメリカ軍以外から見た湾岸戦争

本章ではアメリカ軍以外の多国籍軍の状況について時系列的に俯瞰する。まず「砂漠の盾」作戦（Operation Desert Shield）時の状況、続いて「砂漠の嵐」作戦（Operation Desert Storm）時の航空作戦および地上作戦について主として述べる。陸・海・空作戦の全体像の把握は、他章（第２～４章）の記述を参照されたい。

１　「砂漠の盾」作戦時の状況

（１）　関連各国の対応

イラクのクウェート侵攻は、国際社会から非常に強い非難を浴び、国連でも安全保障理事会で矢継ぎ早にイラクに関する決議が採択されていった。しかし、イラクがクウェート併合で満足するという保証は全くなく、イラクが更にサウジアラビアへと侵攻することが危惧された。第１章で既述したようにイラクの貧弱な兵站能力では、イラクが大規模なサウジアラビア侵攻を実施するのは、ほとんど不可能に近いものだった。しかしイラクによるクウェート侵攻の実施直後、アメリカもサウジアラビアもそのようには考えていなかった。それはイラクがクウェートの占領を目的とするにしては多すぎる兵力を８月６日までにクウェート領域に送り込んでいたからだった。アメリカの情報機関は東部サウジアラビア侵攻を中心としたイラク軍の進撃経路をいくつか予想していた。最も野心的な進撃路としては、一挙に首都リヤドを突くシナリオさえ、想定されていた[1]。

ア　中東諸国の足並み

イラクに対してアラブ諸国の足並みは完全に一致したわけではなく、イラク寄りの国や機関もあった。1990 年８月のアラブ連盟主催の緊急アラブ諸国首脳会議でもイラクを非難する立場を表明したのは、加盟国 21 か国のうち 12 か国にすぎなかった。もちろん棄権や保留を示した中間的立場を示す国家も少なくなかったが、パレスチナ解放機構（Palestine Liberation Organization: PLO）のアラファト（Yasser Arafat）議長はイラク寄りの姿勢をとっており、世界各国から非難を招き、孤立を深めた。また同様に、その姿勢を親イラクと見られたヨルダンは、湾岸のアラブ各国から猛反発を受けた。多くの湾岸諸国にはヨルダン人の労働者がいたが、複数の国でこれらのヨルダン人労働者の追放も発生した[2]。現にヨルダンは密かにイラクへ物資を供給するための抜け穴となった[3]。ヨルダンのフセイン

---

[1] United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War: Final Report to Congress* (Washington, D.C.: U.S.Government Printing Office, April 1992), pp. 31-32.
[2] 鳥井順『軍事分析・湾岸戦争』（第三書館、1994 年）228-235 頁。
[3] ノーマン・フリードマン『湾岸戦争――砂漠の勝利』高井三郎訳（大日本絵画、1993 年）184-185 頁

（Hussein bin Talal）国王は、自国の港からイラクへの陸路による物資輸送を認めていたからである。そのため海上封鎖作戦の対象としてヨルダンのアカバ港へ入港する船舶も該当することとなった[4]。

湾岸危機発生直後、アメリカのチェイニー（Richard Bruce Cheney）国防長官、シュワルツコフ（H. Norman Schwarzkopf Jr.）大将ら高官がサウジアラビアを訪れ、国王たちに状況を説明した。アメリカとしては、イラクへの対処のためにはサウジアラビアへのアメリカ軍派遣が必須であったが、サウジアラビアのファハド（Fahd bin Abdulaziz Al Saud）国王も深慮しなければならなかった。イラクの大軍が国境地帯に布陣しているため、国防のためにはすぐにでもアメリカ軍を来援させたかったが、アメリカ軍の駐留を認めることは、イラクをはじめとしたアラブ諸国の指導者たちに、サウジアラビア国王は、西側に媚びへつらったとの烙印を押されかねなかったからである。アメリカ側の説明の後、サウジアラビア王家の討議が引き続き実施された。多くの王子たちはアメリカの駐留に対して慎重論を唱えていたが、ファハド国王は、迅速な決断を下さなかったクウェートの末路を引き合いに出し、8 月 6 日、即座のアメリカ軍の受け入れを決断した。これによりイラクをクウェートから駆逐する軍事行動を行うための最低限の条件が整い始めていた。

サウジアラビアのアメリカ軍受け入れ決断の翌日には、チェイニーとシュワルツコフはエジプトに行き、ムバラク（Muhammad Hosni El Sayed Mubarak）大統領に対しても説明を実施し、部隊展開に必要なエジプト側への支援（空港使用等）要請にムバラクは同意した。それでもさすがにエジプト国内への爆撃機駐留については、ムバラクは即答を避けた。一方で彼はアメリカ空母のスエズ運河通過を許可した。さらにチェイニーたちはモロッコへも飛び、必要なアラブ諸国への調整を矢継ぎ早に実施した[5]。

しかし湾岸危機への西側介入を回避したかったアラブ諸国の中で、イラクを強く説得しようとしたヨルダンのフセイン国王は、8 月 3 日に直接バクダッドへおもむき、イラクのフセイン（Saddam Husayn Abd al-Majid al-Tikrit）大統領と会談した。フセイン大統領は、フセイン国王が提案する関係 5 か国の首脳会議の開催には合意した。国王は西側の介入を回避するため、イラク軍のクウェート撤退を進言した。しかしイラクはクウェート民衆の支持を受けたクウェート暫定政府（実際はイラクの傀儡）が確立された後に、撤兵を始めるとしたが、アラブ諸国でもそれを率直に信じる者はなかった。そしてその日のうちにアラブ各国からも非難のコメント、特にエジプトやサウジアラビアが声明を発したため、フセイン国王の提唱した首脳会議の開催の可能性も絶望的になった[6]。

の間に掲載されている写真の 1 つには、多国籍軍が後にクウェートを解放した際、押収した物資の中にヨルダン軍からの大量の弾薬の存在を見ることができる。

[4] Edward J. Marolda and Robert Jr. Schneller Jr., *Shield and Sword: The United States Navy and the Persian Gulf War* (Washington, D.C.: Naval Historical Center, Department of the Navy, 1998), p. 87.

[5] H･シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録――少年時代・ヴェトナム最前線・湾岸戦争』沼澤洽治訳（新潮社、1994 年）318-324 頁。モハメド・ヘイカル『アラブから見た湾岸戦争』和波雅子訳（時事通信社、1994 年）258 頁。

[6] ヘイカル『アラブから見た湾岸戦争』240-248 頁。

イ　サウジアラビアの多国籍軍受け入れ

8月6日、ファハド国王がアメリカ軍の自国への駐留を認めた日、ファハド国王はアブドラ王子からシリアへの軍隊派遣依頼を出すことを勧められた。直ちに国王はシリアのアサド（Hafez al-Assad）大統領へ電話した。国王の依頼に対してアサドは即座に快諾した。シリアはアラブ諸国ではいまだにイスラエルとは一線を引いた関係（いわゆる敵対関係）であったため、シリアのサウジアラビアへの来援受諾はアラブ世界に好ましい影響を及ぼすと考えられた。サウジアラビアは他のイスラム諸国へも軍隊派遣を要請した。パキスタン、マレーシアが承諾したがインドネシアは気乗り薄であった。またエジプトは、8月7日にアメリカのブッシュ大統領から電話を受けて、ムバラク大統領はエジプト軍のサウジアラビア派遣に同意した[7]。

サウジアラビアは、イラクおよびクウェートと隣接しているため、必然的に多国籍軍を最も多く受け入れなければならなかった。幸いなことにサウジアラビアは、莫大な石油収入を基にして大軍を受け入れるのが可能な港を整備していた。ダンマーム（Dammam）およびジュベイル（Al-Jubayl）の両港は最新式の施設を持った港であった。またダーラン（Dhahran）は空港として規模が大きく近代的であった[8]。しかしこのように港湾設備、空港設備は整っていたものの、問題がなかったわけではなかった。特にジェット燃料を現地で調達できないという問題があった。世界有数の産油国であるにもかかわらず、サウジアラビアにはジェット燃料の精製設備が無いという欠点があった。そのため燃料はシンガポールからタンカーで運ばれた。このことは、アメリカの中東戦域軍への補給追送品で液体が最大の量を占めていたことの原因ともなった[9]。

ウ　多国籍軍に加わったアラブ諸国の姿勢

多国籍軍に参加したアラブの主要国、すなわちエジプト、サウジアラビア、シリアはクウェートからイラク軍を放逐することには同意していたが、イラク領域への進攻は全く希望していなかった。そのためイラクがクウェートから撤兵するならば、多国籍軍内のアラブ主要国は進軍は思いとどまるつもりであった。ブッシュ大統領もイラク軍がクウェートから撤兵すれば、作戦を打ち切ることを多国籍軍に派兵するアラブ各国と約した[10]。

一方でイラクはクウェート占領後、急速にイランへ融和の態度を示し始めた。フセイン大統領は8月になると、たびたびイランのラフサンジャニ（Akbar Hashemi Rafsanjani）大

---

[7] ヘイカル『アラブから見た湾岸戦争』256-258頁。
[8] フランク・N・シューベルト、テレーザ・L・クラウス編『湾岸戦争――砂漠の嵐作戦』滝川義人訳（東洋書林、1998年）81頁。
[9] フリードマン『湾岸戦争』93頁。
[10] 同上、57頁。

統領へ書簡を送っている。8 月 14 日の書簡でフセイン大統領は、イラン・イラク戦争終了後も拘束されている多くの捕虜の交換を積極的に行うことを表明した。さらに 8 月 17 日にフセイン大統領は、イラン・イラク戦争の結果、イラク軍が占領しているイラン領土から撤兵することを約束した[11]。このようなイラクのイランとの融和の結果は、イランとの対峙で使用していたイラク軍兵力を他方面へ転用することを可能にした。この結果、イラクは 8 個師団を抽出し、5 個師団をクウェートへ、3 個師団をシリア、トルコ方面へ転用した。この動きに対してシリアは、イラクとの国境へ 5 万人の部隊を集結させた。またトルコとイラク国境に配置されたイラク軍 5 個師団が、10 月初めにはイラン方面から転用された兵力により増強され、さらにトルコ領内のインジルリク（Incirlik）基地（アメリカ軍使用予定）を射程に収めるスカッドミサイルもイラク北部へ移動させた。そのためトルコは NATO 加盟国に対し、トルコ国内の基地防空対策の実施を要請した[12]。

イスラム諸国は多くの国が、サウジアラビアへの派兵に応じた。エジプトおよびシリアは有力な陸軍部隊を派兵することとなった。その他、カタール、自由クウェート軍、バングラディシュ、バーレーン、モロッコ、ニジェール、パキスタン、セネガルも派兵に応じた。またアフガニスタンのゲリラであるムジャヒディンも参加した[13]。

エ　西側諸国の状況

多国籍軍はアラブ諸国を除けば、NATO 諸国が大部分を占めた。そのなかでイギリスは、イラクの行動に対し極めて敏感に反応した。イギリスのサッチャー（Margaret Hilda Thatcher）首相は、8 月 2 日の湾岸危機発生時、即座にペルシャ湾に近い場所（ケニア、マレーシア）に所在していた海軍艦艇をペルシャ湾へ向かわせた。翌日には彼女はブッシュ（George Herbert Walker Bush）大統領と会談し、このイラクの侵略行動に対し、速やかに行動すべきとの意見を伝えた。さらにサッチャーは、サウジアラビアのファハド国王との電話会談の中で、イギリス軍のサウジアラビアへの駐屯を要請された。最初の航空機部隊のサウジアラビアへの派遣は、8 月 9 日にイギリス国防相から発表されるという素早い対応を実施し、アメリカへの支持は極めて目立っていた[14]。さらにイギリスは、湾岸危機発生直後にイラクとクウェートの全資産を凍結していた[15]。

フランスも当初の行動は迅速であった。8 月 6 日にはペルシャ湾にいたフランス軍艦艇 2 隻の増援としてフリゲート艦 1 隻を派遣した。さらにフランス大統領は 8 月 9 日にはサウ

---

[11] Kevin M.Woods, *The Mother of All Battles: Saddam Hussein's Strategic Plan for the Persian Gulf War* (Annapolis: Naval Institute Press, 2008), pp. 105-106.
[12] フリードマン『湾岸戦争』120-121 頁。
[13] 同上、100-101 頁。
[14] マーガレット・サッチャー『サッチャー回顧録――ダウニング街の日々（下）』石塚英彦訳（日本経済新聞社、1993 年）447-448 頁。
[15] United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 21.

ジアラビアへの地上部隊と顧問団の派遣を発表した[16]。またフランスは湾岸へ 3 番目の規模となる航空部隊を派遣することになる。しかしフランスは、「砂漠の嵐」作戦発動直前までイラクへの攻撃に参加するかどうか未決定だった[17]。このようにフランスのイラクへの軍事力行使は、イギリスと比較し、消極的な部分があった。これは以前よりフランスは、イラクへ武器輸出を実施していたという事情があったからである[18]。さらに多くのフランス政府高官は、イラクのバース党政権と密接な繋がりがあった。特に当時のフランス国防大臣ジャン＝ピエール・シュヴェーヌマン（Jean-Pierre Chevènement）は、イラクの強い支持者であり、軍事介入に反対であった[19]。

8 月 10 日には、カナダが駆逐艦 2 隻および補給艦 1 隻のペルシャ湾派遣を発表した。他の NATO 諸国もイタリア、スペイン、ドイツ（正確にはこの時点では西ドイツ）、ギリシャが、自国内の海空軍基地をアメリカ軍が中東へ展開するために使用することを認めた。一方でソ連や東欧は、NATO 諸国ほど積極的な軍事行動には参加しなかったが、冷戦期のようなアメリカに対する反対もなかった[20]。それどころかチェコスロバキアは化学除染部隊を、ポーランドは病院船やサルベージ船を派遣した[21]。また「砂漠の嵐」作戦までにオーストラリアは 40 名の医療チームを派遣した。カナダも同様に医療チームをアメリカ海軍病院船マーシー（*Mercy*）に派遣した[22]。

（２）　指揮統制系統

アメリカ軍をはじめとした多国籍軍が、サウジアラビアに派遣され始めると、すぐに各国軍の指揮関係の問題が表面化しはじめた。湾岸危機発生当初は、サウジアラビアが多国籍軍の受け入れを受諾はしたが、指揮系統等について調整は全くなされていなかったからである。早くも 8 月にアメリカ陸空軍の現地司令官からは、中東からアメリカに戻ってきていたシュワルツコフ大将に対して、サウジアラビア軍関係者が、同国に駐留するアメリカ軍はサウジアラビアの指揮下に入るべきであるとの態度を取るようになった、という連絡が来ていた。この問題に対し、シュワルツコフは現地のアメリカ陸空軍司令官と話し、アメリカ兵はアメリカ人指揮官の指揮を受けるというように、各国軍は自国の指揮官の指揮を受け、各国の最高司令官同士で調整を図る方式を採用する形で意見がまとまった。シュワルツコフはワシントンと、現地のアメリカ陸空軍指揮官はサウジアラビア側と調整し、数日で合意を得た。しかしシュワルツコフは、多国籍軍参加各国に対しては、この指揮官問題は当分触

---

16 *Ibid.*, p. 21.
17 Eliot A. Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey* Vol. V*, A Statistical Compendium and Chronology,* Pt I (Washington, D.C.: GPO, 1993), p. 42.
18 フリードマン『湾岸戦争』51 頁。
19 Anthony H.Cordesman and Abraham R.Wagner,*The Lessons of Modern War,* Vol. IV(Boulder: Westview Press, 1996), p. 167.
20 United States Department of Defense,*Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 21-22.
21 フリードマン『湾岸戦争』101 頁。
22 Marolda and Schneller Jr., *Shield and Sword*, p. 130.

れずにおくこととした[23]。

当初、サウジアラビアでのアメリカ陸軍および空軍司令官のヨソック（John J. Yeosock）中将とホーナー（Charles A. Horner）中将は、サウジアラビア軍との調整にとまどっていた。彼らの調整先であるサウジアラビア軍側のカウンターパートが、予算関係の権限を持っていないため、調整が何一つまとまらなかったからである。そのためアメリカ側の両中将が、サウジアラビアの国防大臣に訴えることによって、大臣の長男でサウジアラビア防空軍司令官であったハリード・ビン・スルタン（Khalid bin Sultan）王子が、サウジアラビア側の総司令官となった。彼は結果的にはアラブ側の総司令官としてアメリカ側の中東での総司令官であるシュワルツコフと多国籍軍内では並列の関係となり、調整をすることとなった。彼は王族というだけでなく、イギリス陸軍士官学校、アメリカ空軍大学校を卒業しており、アメリカ側からサウジアラビア側への調整は円滑に推進できるようになった[24]。しかしサウジアラビアの王族たちは、アメリカの軍事力が自国の防衛に必要とは認識していたものの、クウェートを侵略したイラクといえどもアラブの国を相手に武力行使をすることに対しては、終始後悔にも似た念を持ち続けるというジレンマも抱えていたというのが実情であった[25]。

多国籍軍は大きくアメリカの率いる西側諸国の軍隊と、サウジアラビアが率いるアラブ諸国の軍に二分された。アメリカの中央軍司令官（Commander-in-Chief U.S. Central Command: CINCCENT）が、イギリスをはじめとする西側諸国の軍を戦術統制下においた。さらに現場のイギリス空軍の派遣航空部隊は、アメリカの中央空軍（United States Air Force Central Command: CENTAF）司令官が、多国籍軍の統合航空構成部隊司令官（Joint Force Air Component Commander: JFFAC）となりイギリス空軍部隊の作戦統制を実施した。しかし西側諸国の各国軍は、指揮権はあくまで母国にあった。またイギリス軍地上部隊は当初、アメリカの中央軍海兵隊司令官の戦術統制を受けていたものの、「砂漠の盾」作戦中、後にアメリカ中央陸軍司令官の戦術統制下に入った。一方でフランス軍は、「砂漠の盾」作戦当初はサウジアラビア軍との作戦調整を実施しながらも、フランス軍は自国の指揮系統でのみ作戦を実施することとしていた（すなわち自国外のどこの統制下にも入らない）。しかし、イラクへの攻撃計画が進捗する中で、結局フランス軍も 12 月中旬には地上軍が、アメリカ中央陸軍の戦術統制下に、航空部隊がアメリカ中央空軍の戦術統制下におかれることとなった[26]。

アラブ諸国は、自国軍への作戦統制権をサウジアラビアに付与することを認めた。アラブ

---

[23] シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』328 頁。

[24] 同上、344-345 頁。

[25] Khaled Bin Sultan and Patrick Seale, *Desert Warrior: A Personal View of the Gulf War by the Joint Forces Commander* (New York: Harper Collins Publishers, 1995), pp. 189-190.

[26] United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 493, 555-556. アメリカ議会報告書（*Conduct of the Persian Gulf War*）の記述ではイギリス地上軍は、アメリカ軍の作戦統制下に入っていることとなっているが、アメリカ陸軍の記録、Stephen A. Bourque, *Jayhawk! The VII Corps in the Persian Gulf War* (Leavenworth: U.S. Army Command and General Staff College Press, 1994) によれば戦術統制とされている。ここでは後者の表現を使用した。

の統合軍は、地上ではその戦域に応じて東部合同軍（Joint Forces Command-East: JFC-E）と北部合同軍（Joint Forces Command-North: JFC-N）の 2 つに分けられ、配置された部隊は各合同軍の作戦統制下に置かれた。東部合同軍にはサウジアラビア軍および湾岸協力会議（Gulf Cooperation Council: GCC）の所属国の軍が主に配置され、北部合同軍にはサウジアラビア軍とサウジアラビアへ派遣された他のアラブ諸国の主力のほとんどが配置されることとなる[27]。

（3） 海上封鎖

イラクのクウェート侵攻 4 日後、イラクへの海上封鎖を取り決めた安保理決議第 661 条が採択された。これはイラクおよびクウェート地域からの輸出入を禁止するものであった（ただし例外として、医療品や食糧の輸入は認められた）。ペルシャ湾の海上封鎖をはじめとした多国籍軍の海上作戦行動は、多くの国が参加することとなった。陸上および航空におけるアメリカとその他の多国籍軍を対比した場合、アメリカが質、量ともに圧倒していたが、海上部隊はアメリカ海軍と他の多国籍海軍のレベルは地上軍と比較すれば、より釣り合いがとれたものであった（それでもアメリカ海軍は他国と比較して頭抜けてはいたが）[28]。

また 1980 年代のイラン・イラク戦争におけるペルシャ湾での両国によるタンカー攻撃（いわゆるタンカー戦争）によって、イギリスやフランスは、この地域に艦艇を 1980 年代から派遣しており、アメリカと他国との連合作戦という観点では、陸や空の作戦と比較して、やりやすい環境があったといえる[29]。

さらに陸軍や空軍と比較し、海軍は多くの国でドクトリンや運用手順、器材、ロジスティックシステムに共有している部分が多かった。特に第二次世界大戦後、西側諸国の海軍では対ソ連でアメリカ、イギリスの間を中心に運用手順が定められていった。そして海軍の連合作戦に関する手順は、朝鮮戦争を契機に、参戦したアメリカとその同盟国の間で推進されていった[30]。

西側諸国の海軍では、緊密な国々とは弾薬の共通化、NATO の部品番号の共通化等が推進され、共に作戦する部隊が相互に予備部品を供給することができるようになっていた。1960 年代以降は、アメリカ海軍の戦術データリンクが NATO の標準となり、通信における相互運用性（インターオペラビリティ）が図られた。また共産圏以外の国では、同盟国内の戦術命令・手順である APT-1 が標準的に使用されるようになった。60 年にイギリスのポートランドにイギリス海軍によって公式な海上訓練組織が作られ、それ以降数十年にわたってイギリスだけでなく、NATO の海軍、特にオランダ、西ドイツは定期的に主要水上艦艇

---

[27] United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 493.
[28] James Goldrick, “The Maritime Element in the 1990-91 Gulf Crisis,” Bruce A. Elleman and S.C.M. Paine, eds., *Naval Coalition Warfare* (New York: Routledge, 2008), p. 158.
[29] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, p. 45.
[30] Goldrick, “The Maritime Element in the 1990-91 Gulf Crisis,” pp. 158-159.

をイギリスへ派遣し、訓練を受けて、海軍の運用規定の共有化が図られた[31]。このように海軍は特に西側諸国では、連合作戦に関する障壁は低かった。

湾岸危機発生直後、イギリスとフランスが海上部隊の派遣を申し出るが、その他にオーストラリアも 8 月 10 日には 3 隻からなる任務グループの派遣を約束し、すぐに他の 9 か国、アルゼンチン、ベルギー、カナダ、デンマーク、ギリシャ、イタリア、オランダ、ノルウェー、スペインが続くこととなった[32]。結果的に NATO 加盟の多数の国家の艦艇がペルシャ湾に集結したが、これらはあくまで国連の制裁活動に参加するためのものであり、ヨーロッパ諸国の海軍部隊間と調整の手続きは、西欧同盟（WEU）によって定められた[33]。

一方でイラクに対する海上封鎖を円滑に実施するため、アメリカ中央海軍部隊司令官は 9 月 9 日および 10 日に、バーレーンで関係国参加の会議を実施した。会議ではアメリカ中央海軍部隊が主導するが、空地部隊とは異なり、海上封鎖作戦に関しては、ゆるやかに組織されることとなった。その後各国の部隊の作戦区域が決められた。たとえば 9 月 27 日にはアメリカ以外は、10 か国 42 隻の艦艇が海上封鎖に参加した。その作戦区域は、オマーン湾（オーストラリア、ベルギー、カナダ、デンマーク、オランダ、スペイン、イギリス）、ジプチ（フランス）、ペルシャ湾（フランス、イタリア、オランダ、イギリス）、紅海（フランス、ギリシャ、スペイン）、アラビア海（イタリア）、ホルムズ海峡（スペイン）となっていた。この封鎖作戦は 12 月 15 日には、アルゼンチンおよびノルウェーも加わり、アメリカ以外の参加は 12 か国 50 隻にも達した[34]。

既述したように、西側諸国の中ではイギリスの対応が早かった。「砂漠の盾」作戦が発動された初日である 8 月 7 日、ペルシャ湾中央部ではイギリスの駆逐艦「ヨーク（*York*）」とアルミラパトロール（Armilla Patrol）[35]から派遣された給油艦「オレンジリーフ（*Orangeleaf*）」が、アメリカ海軍の巡洋艦、駆逐艦、フリゲート艦等と合同してペルシャ湾中央部における最初の防衛ラインを形成した。また背後の沿岸諸国（サウジアラビア、バーレーン、カタール、アラブ首長国連邦、オマーン）は小規模ではあったが、その海軍艦艇が沿岸で待機していた[36]。

---

[31] Ibid., pp. 160-161.
[32] Marolda and Schneller Jr., *Shield and Sword*, p. 61.
[33] 英国・国際戦略研究所編『ミリタリー・バランス 1990-1991』防衛庁防衛局調査第二課監訳（メイナード出版、1991 年）75 頁。
[34] United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 501-503.
[35] サッチャー『サッチャー回顧録（下）』208 頁。アルミラパトロールとは、イラン・イラク戦争が 1980 年に発生した後、ペルシャ湾のシーレーンが閉ざされることのないようイギリスが 3 隻の艦隊を派遣したものを指している。イラン・イラク戦争終結後もこの派遣は継続されていた。
[36] Marolda and Schneller Jr., *Shield and Sword*, p. 61.

（4）　「砂漠の盾」作戦初期の状況

ア　サウジアラビアにおけるアメリカ軍以外の多国籍軍の防御態勢

湾岸危機直後のサウジアラビアの防衛計画は、兵力が過少であるため不十分なものであった。何よりも当初アメリカ側が重視したのは、ペルシャ湾に面したジュベイル（Al-Jubayl）とダーラン（Dhahran）であった。これらは今後、多国籍軍の中核を占めるアメリカ軍の増派を受け入れるには不可欠な場所だったからである。しかしサウジアラビアは、当初のペルシャ湾岸 2 か所の拠点の防御を重視する案には難色を示していた。国境沿いや防衛拠点以外の都市をイラク軍に明け渡すことを危惧したからであった[37]。

8 月下旬、中東のアメリカ軍がサウジアラビア軍と作成した初期の防衛計画では、兵力の問題もあったが、当面派遣が約束されている部隊を踏まえても、二方面のみでの重層的な防衛態勢を考えていた。すなわち最もアメリカ軍が重視していた海岸沿い方面ではジュベイルとダーランの 2 拠点とその内陸方向にはアメリカ海兵隊、アメリカ陸軍部隊およびイギリス陸軍部隊が防御にあたることとした。そしてその拠点からクウェート方向への海岸沿いにサウジアラビア国家警備隊（Saudi Arabian National Guard: SANG）およびサウジアラビア陸軍が重層的に配置につく予定だった。もう 1 つの防御方面は、クウェート西部からキング・ハリド軍事都市（King Khalid Military City）方向へ続く地域であった。ここも国境近くはサウジアラビア国家警備隊とサウジアラビア陸軍が布陣し、その後方にシリア陸軍、エジプト陸軍、クウェート陸軍およびフランス陸軍部隊が布陣する予定としていた。シュワルツコフは 8 月初旬にリヤドに着いた際、「砂漠の盾」作戦の司令部となるサウジアラビア国防省を訪れて作戦室を見学し、この 2 方面での防衛計画の図を初めて見た。彼はその場では口には出さなかったが、この防衛計画では海岸部とクウェート西部の間の国境地帯には防御ラインが無かったために不信感を持ったという[38]。シュワルツコフの頭にはリヤド到着前に、エジプトが脱走者から入手したというイラクのサウジアラビア侵攻計画の情報があったからであった。彼はその情報をリヤドへ伝えたはずであった[39]。彼からすればクウェート中央部から一直線に 280NM 前方のリヤドへイラク軍が突進する場合の対策が全く講じられていないように見えたからだった。実際にはそのシュワルツコフの心配は全く杞憂であった。フセイン大統領はサウジアラビアへの本格的侵攻の考えはなかったからである[40]。

湾岸危機発生後の当初の防御戦略として、サウジアラビアは可能な限り自国領土を守るために陣地防御を主張したが、アメリカは機動防御を主張した。結果的に当面の防御戦略は、

---

[37] United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 33-34.
[38] シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』347-349 頁。
[39] 同上、329 頁。
[40] アンドリュー・コバーン、パトリック・コバーン『灰の中から――サダム・フセインのイラク』神尾賢二訳（緑風出版、2008 年）20 頁。

2 国の主張の折衷案となった。すなわち多国籍軍のエア・パワーを大規模に使用して、ジュベイル北方でイラクの攻撃を阻止することにより可能な限り前方で、イラクの攻撃を遅延させるというコンセプトとなった。そのため湾岸海岸沿いのアメリカ海兵隊の第 1 海兵遠征軍（ＩMEF）をイギリス陸軍が支援することとなった。フランス軍、エジプト軍、シリア軍は、クウェート市から南へ延びるラインの西側に布陣するサウジアラビア軍を支援することとなった。フランス軍は柔軟な防御予備部隊としてハフル・アル・バティン（Hafr al-Batin）の西部に位置し、9 月半ばから 10 月半ばまでの間に、派遣軍の到着により当初の防御戦略を遂行することが可能となった[41]。

最初にサウジアラビアに到着したアラブ軍の中には、エジプトとシリアの特殊部隊が含まれていたが、アラブ諸国のその他の重装備の軍をサウジアラビアに展開するには、時間が必要だった。シュワルツコフが、当初 8 月段階では重大な間隙があるとして不満を持っていたサウジアラビア防衛計画を変更しようにも、間隙を埋める兵力が不足しているのが現状だった。実際にシュワルツコフが満足できるようなサウジアラビア防衛のための「砂漠の盾」作戦の最終的な共同防衛計画は 11 月末を待たねばならなかった。アメリカ軍以外の重装備の地上軍が展開を完了したのは、エジプト第 3 機械化師団が 10 月 6 日、同国の第 4 機甲師団が翌年の 1 月 7 日、イギリス第 7 機甲旅団は 11 月 20 日、シリア第 9 機甲師団は 12 月 18 日という状況だった[42]。

早期に実施されるはずであったエジプトやシリアの重装備部隊の展開が遅れたのは、サウジアラビア側がアメリカ軍の受け入れで手いっぱいで、他国の受け入れができない状況であったためである。具体的には糧食、飲料水、燃料、港から部隊の集結地までの輸送等のもろもろの支援ができないということだった[43]。

イ　派遣当初の軋轢

アメリカ軍を主力とする非イスラム国の軍隊のサウジアラビア派遣をめぐっては、懸念される事項があった。宗教、文化の相違による軋轢の問題である。アメリカ軍は酒、女性（雑誌を含め）に関する事項について、事前に教育を実施したが、シュワルツコフがサウジアラビアへ到着して感じたのは、サウジアラビア側が、アメリカ軍等の非イスラム国家から持ち込まれる文化的摩擦を心配しているということであった。しかしシュワルツコフがサウジアラビアに到着後も、しばらくは様々な問題、たとえば女性兵士が、T シャツで業務を実施していたとか、ダーランでアメリカ民間人女性がアメリカ軍兵士のためにショーをやったことが CNN の報道でサウジアラビア側へ知られたことなどが発生した。シュワルツコフはアラブ軍司令官のハリド中将と毎日粘り強く話し合い、対策を講じ、次第に現地での文化的

[41] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 67.
[42] United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 491-492.
[43] *Ibid.*, p. 504.

摩擦による危険性は低減していった[44]。

このようなアラブとの文化的摩擦を避けるためとはいえ、アメリカはサウジアラビア国土に大々的に娯楽施設を作るわけにもいかず、客船をバーレーンに派遣することで対処するなどしていた[45]。一方でイギリス空軍などは、早期に派遣した部隊について、適宜人員の交替をするなどして、対処していたようである[46]。

（５）　西側諸国の多国籍軍への参加

ア　イギリス軍

イギリス陸軍の作戦基本部隊は、数個大隊からの集成旅団である（ただしドイツ駐留軍は、恒久編成の 4 個師団からなっていた）。旅団は指揮下部隊を適宜、複数の戦闘群に編成し、戦闘を遂行する。湾岸戦争では師団から派遣された機甲旅団が終始一体となり、戦闘単位として役割を果たした。湾岸派兵のための第 1 機甲師団は、ドイツ駐留の各師団から抽出した 2 個旅団、第 7 機甲旅団および第 4 機甲旅団（一部他旅団からの部隊を含む）が中核だった。第 7 機甲旅団は 2 個戦車連隊、1 個機械化歩兵大隊、1 個野砲連隊からなっていた。一方第 4 機甲旅団を中心とする部隊は 1 個戦車連隊、2 個機械化歩兵大隊、1 個野砲連隊からなっていた。保有する主力戦車はチャレンジャーで、機甲師団はそのほかにスコーピオン軽戦車、シミター装甲車、ストライカー自走対戦車ミサイル発射機（ATM）からなる 1 個偵察連隊、自走砲装備の 1 個重砲連隊、MLRS 装備の 1 個重砲連隊、リンクスおよびガゼルのヘリコプター装備の 1 個航空連隊をも持っていた[47]。

イギリス空軍は通常、3 個飛行隊からなる航空団を持っていた。湾岸へは部隊の多くが混成飛行隊として派遣された。「砂漠の嵐」作戦直前の湾岸への派遣部隊は、第 15 混成飛行隊（トーネード GR1：ムハラク（Al-Muharraq））、第 20 混成飛行隊（トーネード GR1：タブク（Tabuk））、第 31 混成飛行隊（トーネード GR1：ダーラン）、第 2 飛行隊（トーネード GR1A 偵察機：ダーラン）、第 43 混成飛行隊（トーネード F3 要撃戦闘機：ダーラン）、第 6 混成飛行隊（ジュギュア：ムハラク）、オマーンにはニムロッド哨戒機を派遣した。また空中給油機をムハラクとリヤドに派遣した[48]。

イギリスは比較的直近の 1982 年、フォークランド紛争において軍事力の遠方への展開を即興で実施した経験があった[49]。しかしペルシャ湾岸への戦力展開に関しては、異なる問題

---

44 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』347-354 頁。
45 United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 490.
46 「グランビー作戦のタイムライン」、イギリス空軍、〈http://www.raf.mod.uk/history/Timeline of Operation Granby.cfm〉2015 年 11 月 10 日アクセス。
47 フリードマン『湾岸戦争』299-301 頁。
48 同上、335-336 頁。
49 フォークランド紛争の詳細は、防衛研究所戦史研究センター編『フォークランド戦争史』（防衛研究所、2014 年）を参照。

に直面した。湾岸戦争ではアメリカ軍ほどではないが、大規模なイギリス陸軍の機甲部隊だけではなく、高い能力を持つと思われたイラクの防空網に対処可能なエアパワーの派遣が必要だったからである。イギリスは戦略輸送能力が極めて不足していたが、人員はほとんどが空輸で展開することができた。イギリス空軍は湾岸地域へ総計 2 万 5 千名を空輸した。空軍だけでは輸送能力不足のため、他国の航空機や民間のチャーター機を活用し、別に 2 万 1 千名を空輸した[50]。イギリスはこの湾岸への兵力展開を「グランビー作戦（Operation Granby）」と呼称した。

一方で器材や補給物品は、空路だけでなく海路に頼らざるをえなかった。イギリスの主力戦車の展開は 180 両だったが、合計では 2,611 両の装甲車両と 12,069 両の後方車両を展開しなければならなかった。最終的には器材や補給物品は、湾岸戦争終了までに海路で 35 万 5 千トン、空路では 4 万 5 千トンを輸送した。海路では 1991 年 4 月 1 日までに 146 便以上を必要とした。イギリスは補給用揚陸艦を 2 隻使用したが、当然これでは全く不足するため、11 隻のイギリス国籍チャーター船と 133 隻もの外国チャーター船を主として使用した。空輸ではイギリス空軍は、トライスターが若干の重量物を運搬できたが、全く空輸能力が不足するため、アメリカの C-5 輸送機の他にイギリスの民間航空機を利用した。その他、ベルギー、ポルトガル、スペイン各空軍の C-130 の利用は当然のこと、これらの国の民間機もチャーターした。このことは大規模な戦略輸送能力を欠いている国家が、遠隔地へ大規模な軍を展開する際に直面する問題を示している。しかしそれでもイギリスが、何とか軍を湾岸地域へ展開し、作戦可能状態にし、維持できたのには「砂漠の盾」作戦の期間を長期間確保できたことが大きい。そのため、たとえば重装備の陸軍第 1 機甲師団も展開、増強、訓練を実施できた。また冷戦の終結は、ワルシャワ条約機構加盟国からの輸送機さえも利用可能となり、長距離空輸を実施する際の追い風となった。さらにイギリスは重装備軍（機甲師団）を投入したヨーロッパ唯一の国だった。これが可能だったのは、ヨーロッパの他国と比較すると展開するうえで、技術、準備、政治的自由度を併せ持っていたからだった[51]。結果的に「グランビー」作戦で部隊を展開するために 18 か国（バーレーン、ベルギー、カナダ、デンマーク、フランス、ドイツ、クウェート、オランダ、ニュージーランド、ノルウェー、オマーン、ポルトガル、ルーマニア、サウジアラビア、シンガポール、スペイン、スウェーデン、UAE）にもおよぶ支援を受けた[52]。

財政面での制約から、イギリス軍の各種資源は、アメリカ軍と比較すると、はるかに制約されていた。イギリス軍は電子戦や指揮統制システム、海外における兵站や支援関連では、アメリカに大きく依存した[53]。

イギリス陸軍の戦車を中心とする重装備の湾岸地域への展開が、概ね完了するのは、11

---

[50] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 156-157.
[51] *Ibid.*, p. 157.
[52] Secretary of State for Defence, Cm1559-I, *Statement on the Defence Estimates 1991,* Volume 1 (London: HMSO, 1991), p. 13. 支援内容として弾薬提供、航空輸送、医療、化学戦用装備提供、宿泊、投錨地の提供等多岐にわたった。
[53] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 158.

月初旬になってからである。イギリス陸軍は部隊の派遣にあたって、既存装備の改良、弾薬の取得の加速はもちろん、他国からの装備等の緊急取得も実施した。たとえばアメリカからは M548 装軌貨物輸送車、ドイツからはフンメル装甲 VHF 妨害車両、フクス NBC 偵察車両、スコーピオン地雷散布車、NATO から VSC501 衛星ターミナル、ベルギーからは緊急処理器材、駐屯地用ベッドを調達、弾薬の調達先も複数国にまたがった。

イギリス陸軍の派遣は、10 月 15 日、ドイツからの第 7 機甲旅団、第二次世界大戦で有名な、「デザート・ラット（砂漠のネズミ）」の愛称で知られる部隊の展開から始まった。この旅団は湾岸地域へ展開後、11 月 15 日には作戦可能と表明された。しかし実際には、装甲車両の砂漠戦用への様々な改良が必要であった。たとえば砂の吸い込み防止の処置や装甲のグレードアップも必要であったが、翌年の 1 月になっても完全には終わっていなかった。また旧式の装甲車両をウォーリアに更新しなければならなかった。砂漠戦用として水関連の浄化装置、ヘリコプターの砂フィルター、GPS ナビゲーション、地雷除去器材、水タンクも追加装備として確保しなければならなかった[54]。

第 7 機甲旅団は当初、アメリカ第 1 海兵隊遠征軍の作戦統制に入る地域に布陣した。11 月になりイギリス陸軍は追加部隊の派遣を決意、11 月 22 日に第 4 機甲旅団を中心とする部隊の派遣を表明した。この部隊の展開は 12 月 5 日に開始された。第 4 機甲旅団は、先に派遣された第 7 機甲旅団と合流し、イギリス第 1 機甲師団となった。この師団の人員総数はイギリス陸軍の総兵力の 20%を占めるほどであった。この増強は表向きは、アメリカの攻撃計画に沿うものとされたが、実際にはイギリス中東派遣軍司令官の意向であった。彼は部隊増強により機甲師団の配置替えが実施されると予想した。これにより機甲師団はアメリカ陸軍の作戦統制下に入ると考えた。彼にはイギリス陸軍部隊をアメリカ海兵隊の指揮下に入れたくないという考えが根底にあった。イギリス機甲部隊は当然ながら機動戦に長けていたが、アメリカ海兵隊の指揮下ではクウェートへの正面攻撃に使用され、持ち味を発揮できぬまま損害を重ねるのではないかとイギリス中東派遣軍司令官は考えたのであった。第 1 機甲師団へ合流する最後の部隊は、12 月 10 日には到着したが、装備等の合流は翌年 1 月末まで続いた。そのため新たに到着した部隊はあまり準備に時間がなかった。12 月中旬には、チャレンジャー戦車やウォーリア歩兵戦闘車の追加装甲を取り付ける改修を実施した。この装甲は、砂の吸い込みを減少させる効果もあった[55]。

イギリスの機甲師団の派遣部隊の半分以上は、ヨーロッパ大陸に派遣していたイギリスライン軍団（British Army of the Rhine）から移動させたものであった[56]。冷戦の終了により長年主戦場と予想されていたヨーロッパ大陸から兵力の引き抜きが可能となったのである。

湾岸地域に展開後の訓練中のイギリス陸軍器材の損失、損傷は 4 両のウォーリア歩兵戦

---

[54] *Ibid.*, pp. 159-160.
[55] *Ibid.*, pp. 160-161.
[56] 英国・国際戦略研究所編『ミリタリー・バランス 1990-1991』75 頁。

闘車、3 両のセンチュリオン戦闘工兵車、2 両の M109 自走榴弾砲、2 両の M-548 輸送車、リンクス・ヘリコプターおよびガゼル・ヘリコプター各 1 機だった[57]。

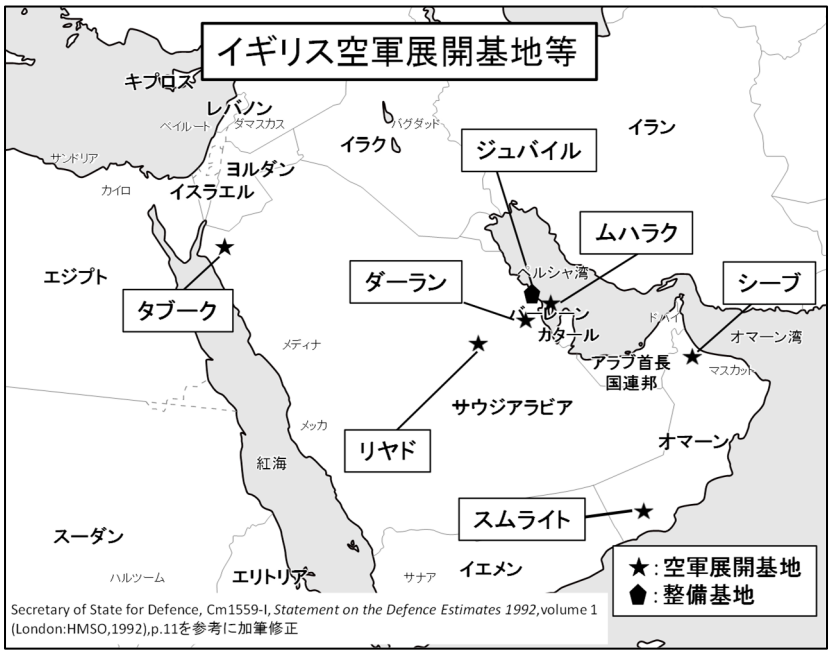
イギリス第 1 機甲師団が完全に展開しても、イラク軍の重装備師団と比較すると比較的軽装備師団のように見えた。イギリス第 1 機甲師団の主力 2 個機甲旅団のうち、第 7 機甲旅団は 2 個機甲連隊からなっていたが、第 4 機甲旅団は 1 個機甲連隊しかない状況であった[58]。

イギリス空軍は、長年にわたってサウジアラビア空軍とアメリカ空軍双方と密接な関係を保ってきた。サウジアラビアは大規模なトーネード部隊（イギリスはトーネード開発国の 1 つ）を建設中だった。このことはイギリス空軍の急速な派遣部隊増強と、相互運用性の確保を比較的容易にした。早くも 8 月 11 日には 12 機のジャギュアがオマーンに到着、11 機のトーネード F3 要撃戦闘機は同日、ダーランへ送られ、3 機のニムロッド哨戒機は 8 月 12 日から 15 日の間、オマーンのシーブ（Seeb）へ展開した[59]。イラクに対峙するサウジアラビアにまず要撃戦闘機型のトーネード F3 が派遣されたのは、地上攻撃能力のない防御的な航空機を派遣することで、イラクに不必要な刺激を与えず、アメリカや湾岸諸国には早期に軍事的支援の姿勢を見せるという計算がイギリスにあった。またジャギュアは攻撃機ではあったが、後に派遣するトーネード GR1 と比較すると搭載量は半分にすぎず、攻撃力は小さかった。当初サウジアラビアではなくオマーンへ展開したのは、イギリスと従来緊密な関係にあったオマーンを安心させることを意図していた。後に軍事的要求に応えるためにジャギュアはバーレーンへ移動することとなる[60]。さらに攻撃力強化のため攻撃機型であるトーネード GR1 が 8 月 26 日バーレーンに 12 機、9 月 27 日には 6 機が、さらに 6 機が続いた。またトーネード F3 要撃戦闘機 6 機が、9 月 16 日に追加で展開してきた。トーネードはサウジアラビア北西部のダーランとタブクに大部分が集中した。ジャギュアは全機バーレーンへと移動した。年明けの 1 月 2 日から 3 日にかけ、さらに 18 機のトーネード GR1 が増強された。なおイギリス空軍は「砂漠の嵐」作戦開始前までには、トーネード GR1 とジャギュア各 1 機ずつを喪失している[61]。

派遣されたイギリス空軍機の中心となったのは、攻撃機であるトーネード GR1 とジャギュア、要撃機であるトーネード F3、偵察機のトーネード GR1A である。特に期待されたのはトーネード GR1 攻撃機である。この攻撃機は元来がヨーロッパでワルシャワ条約機構軍の阻止と飛行場の破壊を任務としていた。トーネード F3 が最初に中東へ派遣された後、イギリスの中東派遣軍司令官とアメリカ空軍のホーナー中将（統合航空構成部隊指揮官）の会談が実施された。この会談の中でイギリス側からトーネード GR1 の派遣が提議された[62]。

---

[57] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 158.
[58] *Ibid.*, p. 162.
[59] *Ibid.*, pp. 162-163.
[60] Sebastian Cox and Peter Gray, *Air Power History: Turning Points from Kitty Hawk to Kosovo* (London: Frank Cass, 2002), pp. 290-291.
[61] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 162-163.
[62] Cox and Gray, *Air Power History*, pp. 292-295.



Secretary of State for Defence, Cm1559-I, *Statement on the Defence Estimates 1992*,volume 1 (London:HMSO,1992),p.11を参考に加筆修正

この攻撃機の搭載する滑走路破壊用クラスター爆弾 JP233 に大きな期待がかかった[63]。またそのほかに空中発射対レーダーミサイル（ALARM）も搭載可能であった[64]。アメリカ側は航空戦力としては他国と比較して圧倒していたが、イラク軍が多くの大規模な飛行場から作戦するものと考え、それを封殺するには敵飛行場攻撃用航空機は不足すると考えていた。そのため、ホーナー中将はイギリスの攻撃機、特にトーネード GR1 の派遣を歓迎したのである[65]。

湾岸に展開したイギリス空軍機は、9 月 22 日に他国、主にアメリカ空軍との訓練を開始した。このような共同訓練は、アメリカ軍中央空軍（United States Air Force Central Command: CENTAF（実質は多国籍軍統合航空部隊））が計画した。これらの多くはパッケージトレーニングとして、9 月から翌年の「砂漠の嵐」作戦開始まで続けられた。特にアメリカ軍との訓練では、ストライクパッケージによる敵飛行場破壊などの攻撃訓練が実施された[66]。

イギリス海軍は、「砂漠の盾」作戦と「砂漠の嵐」作戦において重要な役割を果たした。イギリスはペルシャ湾で、イラン・イラク戦争中からアルミラパトロールを長らく実施していたが、湾岸危機発生時には駆逐艦 1 隻、フリゲート艦 2 隻、支援艦船 1 隻が、その任に就いていた。イギリス海軍は、「砂漠の盾」作戦および「砂漠の嵐」作戦で国連のイラクへの禁輸措置実行にあたって 36 回の臨検の他、3,171 回もの禁輸措置関連の行動を実施した。イギリス海軍は、両作戦を通じて総計で、フリゲート艦および駆逐艦 11 隻、潜水艦 2 隻、掃海艇 10 隻、小型船 3 隻、3 個海上ヘリコプター中隊、1 個海兵派遣隊を派遣した。イギ

---

63 トマス・ニューディック『ヴィジュアル大全航空機搭載兵器』毒島刀也訳（原書房、2014 年）183 頁によれば JP233 は、イギリスのハンティング社によって開発された滑走路破壊用のクラスター爆弾である。この爆弾は、内部が 2 つに分かれ、1 つには、215 個の小型の多目的地雷が、もう 1 つには、30 個の成形炸薬滑走路貫通弾が収納されていた。これにより滑走路の復旧使用の時間を長引かせることを期待した。

64 同上、99-100 頁。

65 Sebastian Ritchie, “The Royal Air Force and the First Gulf War, 1990-91: A Case Study in the Identification and Implementation of Air Power Lessons,” *Air Power Review*, Vol. 17, No.1 (Spring 2014), p. 40.

66 Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, pp. 173-187.

リス海軍およびアメリカ海軍は、NATO と戦力投射行動に関して長らく協力していた。そのためイギリス海軍にとって、連合作戦への参加への順応に関する障壁は他国ほど高くはなかった[67]。また 1 月には空母「アークロイヤル（*Ark Royal*）」が地中海へ向かった。名目上は訓練であったが、実際には平時に、地中海で行動するアメリカ空母が紅海へ向かったその穴埋めであった[68]。このように湾岸危機以降、イギリスは積極的に湾岸へ関与した。イギリスは結果的に湾岸における多国籍軍に関わる全ての種類の活動に参加したが、そのような国は、アメリカ以外にはイギリスのみであった[69]。

イ　フランス軍

フランス軍の師団は規模が小さく、人員数はアメリカ陸軍の旅団程度であった、この規模の小ささは長期間の戦闘ではなく、あくまでヨーロッパ戦域において突発的な紛争に対し迅速に対処するための部隊であるということに起因していた[70]。フランスは兵員を徴兵に頼ってはいたが、志願兵を除く兵員のフランス領域外での任務を法令で禁止していたため、湾岸派兵に関しては、既述したやや消極的な軍事介入姿勢の問題だけではない制約があった。また緊急展開用部隊もその派遣先は、中部ヨーロッパへの近距離を想定していた。湾岸への陸上部隊の派遣は、第 6 軽機甲師団司令部の下に外人部隊等各部隊を集めた。そのため湾岸派遣の第 6 軽機甲師団は、名称は同じだが、元来の第 6 軽機甲師団とはかなり異なった部隊となった[71]。なおフランスの地上部隊と装備は、船舶で紅海に面する港に輸送され、サウジアラビアを横断し、部隊集結地に送られた。東部のペルシャ湾岸での揚陸が理想的ではあったが、そこはアメリカ軍の受け入れで過密状態であったのが大きな要因だった[72]。

フランス空軍も通常は 2～4 飛行隊からなる航空団を持っていた。「砂漠の嵐」作戦前に湾岸へ到着したのは、4 個戦闘航空団（ミラージュ 2000C 戦闘機、ミラージュ F1C 戦闘機、ジャギュア攻撃機、ミラージュ F1CR 偵察機）、1 個補給航空団（C-135R 給油機）、3 個輸送航空団（C-160）であった。その他に C-160G 電子戦機も展開した。ただし派遣された各戦闘航空団の機数は、4 機～25 機とまちまちであった[73]。これは航空団と名称は付けながらも、派遣部隊は、全てが通常の航空団のように完全な飛行隊を複数持ったものではなかったことを意味している。

---

[67] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 165-166.
[68] 英国国際戦略研究所編『世界の軍事情勢 90-91』メイナード出版編集部訳（メイナード出版、1992 年）81 頁。
[69] Secretary of State for Defenece, *Statement on the Defence Estimates 1991,* Vol. I, p. 10. ここで言う全ての種類の行動とは、①イラク、クウェートでの航空攻撃作戦、②イラク、クウェートでの地上攻勢作戦、③ペルシャ湾での海上攻勢作戦、④海上封鎖、⑤掃海、⑥サウジアラビアの枢要地防衛、⑦医療部隊の派遣、⑧多国籍軍への実用的あるいは財政的支援、⑨NATO 地域の防衛　である。
[70] たとえば緊急展開用部隊（FAR）5 個師団の総兵力はわずか 4 万 7 千名にすぎなかった。
[71] フリードマン『湾岸戦争』301-307 頁。
[72] United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 504.
[73] フリードマン『湾岸戦争』336-337 頁。鳥井『軍事分析　湾岸戦争』322-323 頁。

フランスは、エアランド・バトルに対応する能力という意味ではアメリカ、イギリスを除けば唯一の西側の国だった。フランスは8月10日に、陸空軍の展開を開始した。空母「クレマンソー（*Clemenceau*）」も8月13日にペルシャ湾へ向かったが、これは武力行使のためではなく、クウェートからフランス市民を避難させようとする「サラマンダー作戦（Operation Salamandre）」と呼ばれた作戦の一部だった。フランスは他の西側諸国と比較するとイラク寄りと見られるような行動が目立った。特に湾岸危機発生から年内は、フランス独自の外交が目立った。多くのフランス高官は、イラクのバース党政権とは密接な関係にあった。フランスの国防大臣は、特に強いイラクの支持者で軍事介入には反対だった。彼によって設立されたフランス・イラク友好協会は、8月9日にコミュニケでアラブへのすべての介入を非難する声明を発表している。そのため例えば安保理決議 661 条の禁輸に関してもフランス外交官は、この決議は通商禁止を予告するだけで、海上封鎖や軍事的手段を求めていないと解釈した。ミッテラン（François Mitterrand）大統領も9月24日、国連において、イラクのクウェート侵攻は非難したが、国際会議と関係者の直接対話を主張した。フランス国防大臣は翌年の「砂漠の嵐」作戦開始後まもなく辞任したが、彼はイラクとの和解を模索したため、それまでの間、フランス軍の実質的な湾岸への展開は遅延した[74]。

空母「クレマンソー」は、8月下旬は訓練という名目でジブチに留まっており、9月下旬にもヘリコプター輸送を湾岸地域で実施するだけであった。それでもフランス軍のいくつかの部隊は、早期に湾岸へ展開していた。しかしミッテラン大統領は9月14日の段階では湾岸への軍事的関与に関しては、1個空中機動旅団（第6軽機甲師団）と30機の戦闘用航空機を派遣する決定をしていただけだった。しかもこの決断もクウェートのフランス大使館にイラク兵が強引に侵入した結果、なされたものだった[75]。このようにフランスはイギリス等と比較してもイラクへの対応に温度差があった。「砂漠の嵐」作戦直前までフランスは交渉という別の道も追求し続けた[76]。それでも12月11日には、当初の6千名の派遣部隊にさらに4千名を追加で増派すると発表、議会も翌年1月16日にようやくクウェート解放の軍事力行使の正当性を可決した。これらの動きによりフランスは、今や「ダゲー作戦（Operation Daguet）」[77]と呼ばれる作戦で湾岸への部隊派遣が可能となった。これによる兵力は北東サウジアラビアの9,860名の兵員、第6軽機甲師団、58機の固定翼戦闘用航空機、60機の攻撃ヘリコプターで、その総計は16,500名に及んだ。フランス軍は「砂漠の盾」作戦中は、アメリカ軍およびイギリス軍と広範囲な連携と演習、訓練を実施した。またフランスはイラクに売却した軍事装備品の情報を多国籍軍に与えた。フランス軍も指揮統制、通信、センサー、情報、電子戦ではアメリカの支援が不可欠であり、アメリカの指揮・統制・通信・コンピューター・インテリジェンス／戦場管理システム（Command control

---

[74] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 166-167.
[75] *Ibid.*, p. 167.
[76] 実際に、フランスはイラクのクウェート撤退期限直前にもイラクに対して交渉のための派遣団を送ろうとしていた。しかし、これはアメリカおよびイギリスによる圧力によりキャンセルされることになる。
[77] 作戦名のダゲーは雄鹿を意味する。この名から主たる派遣地上兵力であった第6軽機甲師団は別名ダゲー（雄鹿）師団と呼ばれた。

communications computers intelligence and battle management systems: C4I/BM）に順応しなければならなかった[78]。

フランスが湾岸に展開した地上部隊の中心は、緊急展開部隊（FAR）と呼ばれる特別戦力投射部隊からなっていた。この軍は第 6 軽機甲師団が中心で、通常は重装備アメリカ陸軍旅団と同じ約 4,200 名の戦闘要員の規模があった。その中核部隊として第 1 外人機甲連隊（AMX-10RC 軽装甲車両 35 両）、第 1 スパッヒ連隊（AMX-10RC35 両）、第 2 外人歩兵連隊（VAB 装甲兵員輸送車）、第 21 海兵連隊（VAB）、第 68 海兵砲兵連隊（4 個牽引式 155mm 榴弾砲中隊、ミストラル 1 個中隊）、第 6 外人工兵連隊を有していた。この第 6 軽機甲師団は名前のように、重装甲装備は無く、せいぜい 72 両の AMX-10RC を保有する 2 個機甲偵察大隊がいる程度であった。このような軽装備部隊は、アフリカの低強度紛争地域では適していたが、イラクの重装甲部隊に対して威力不足は免れなかった。そのためフランスは第 6 軽機甲師団に対し増強部隊を派遣した。これらの増強部隊には、20mm ガンシップである SA-341 を 10 機、HOT 対戦車ミサイル装備の SA-342 攻撃ヘリコプター30 機、SA-330 ピューマ 62 機を保有する第 4 空中機動師団やミラン対戦車ミサイル装備の 1 個分遣空中機動対戦車誘導ミサイル大隊、AMX-30B2 戦車を保有する第 10 機甲師団の第 4 竜騎兵連隊を含んでいた。この AMX-30B2 は NBC 防護、同軸 20mm 機関砲、レーザー測距儀、弾道コンピューター、105mm 砲装備であったが、アメリカ軍の M-1、イラク軍の T-72 と比較すると軽装甲の戦車だった[79]。

またフランスは第 2 海兵歩兵連隊（VAB 装備）、第 3 海兵連隊の 269 名の分遣隊、第 11 海兵砲兵連隊を含む第 9 海兵師団の部隊を展開した。第 11 海兵砲兵連隊は、アチラ火器管制自動ナビゲーションシステムと 18 門の牽引式 155mmTR-F1 砲を保有する 3 個大隊を有していた。さらに紅海方面にも約 2,400 名の海兵を派遣した[80]。

フランスは湾岸にミストラル携帯式地対空ミサイルを装備する 2 個防空中隊も派遣した。1 個工兵大隊、1 個機甲偵察大隊、2 個長距離偵察部隊を有する第 11 空挺連隊も派遣された。その支援には第 11 空挺師団兵站支援大隊、1 個兵站支援大隊、1 個通信大隊、FAR からの 2 個電子戦中隊で増強された第 6 軽機甲師団の兵站支援大隊が実施した。これらの増強部隊によってフランス地上軍の兵力は約 9,000 名に拡大した。重火器としては、40～45 両の AMX-30B2 主力戦車、155mm 牽引砲 18 門を含むように拡大された。それにより戦闘車両数は総計で 160 両となった。またフランスはヘリコプター130 機を展開し、そのうち 60 機は機関砲又は対戦車ミサイル装備だった。展開したフランス軍は、アメリカ軍やイギリス軍のような高強度の機甲戦能力は保有していなかったが、かなりの空中機動能力と対装甲部隊戦闘能力は持っていた。フランス陸軍参謀長フォレー（Gilbert Forray）将軍は、フランスは湾岸では本当は新型で強力なルクレール戦車を必要としたと述べている。フランス軍は長距離砲を欠き、AMX-30B2 はイラクの T-72M 戦車と戦闘するには時代遅れだっ

[78] Cordesman Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 167-168.
[79] *Ibid.*, pp. 168-169.
[80] *Ibid.*, p. 169.

た。フランスは指揮の独立性を維持しつつも、装備の問題もあり多国籍軍の一部として連携しつつ行動することで、はじめて敵の重装備部隊との戦闘を効果的に実施できるのは明白だった[81]。そのため最終的にはアメリカ軍の戦術統制下に入った。

フランスは9月14日にイラク軍がフランス大使館に侵入した事件を受けて、湾岸への戦闘用航空機の派遣を決定した。最初に派遣された戦闘用航空機は、4機のミラージュ2000と4機のジャギュアであった。これらはフランスのC-135FR空中給油機の支援を受けて10月3日にサウジアラビアのダーランの南130kmに位置するアフサ（Al Ahsa）に到着した。この最初の展開後の増強は、比較的遅いテンポで実施された。10月中に4機のミラージュ2000と4機のジャギュアが増派され、8機のジャギュアがそれに続いた。また航空基地防護のため、クロタル（Crotale）地対空ミサイルと20mm機関砲も展開した。

フランスはカタールと軍事的合意事項にサインし、10月17日にドーハへ8機のミラージュF1を展開した。さらにはUAEに国産のクロタル地対空ミサイルおよびミストラル携帯式地対空ミサイルと共に、260名の人員を展開した。フランス空軍は時の経過とともに、輸送機（C-160、C-130、DC-8）を使用してサウジアラビアとフランス間に定期的な空輸を実施した。また戦域内輸送とC-135FR空中給油機のために、リヤドに基地を設営した。フランス軍はイギリス空軍と同様に戦略輸送機を持たなかったが、それでも約21,000名の軍関係者と約10,500tの貨物を湾岸地域に運んだ。一方でサウジアラビアでの戦域内輸送は、1,020ソーティをこなし、人員は12,400名、貨物約5,500tを輸送した。1月15日までにアフサのフランス軍は、総計1,300名になった。そして湾岸でのフランスの空軍力は、18～24機のジャギュア、12～14機のミラージュ2000となった。また別に展開したミラージュF-1CR偵察戦闘機は「砂漠の盾」作戦の間、イラクの防御状況の偵察を実施した。その結果は後に、ジャギュア部隊に反映されることとなる。戦闘用航空機のほとんどが主基地としたアフサは、クロタル地対空ミサイル2個部隊、10個ミストラル携帯式地対空ミサイル、8門の20mm機関砲で防御された。リヤドには4機のC-160F/NGトランザール輸送機、1機のC-160NG電子戦機、複数のC-135F空中給油機が展開した[82]。

フランス空軍は、ハフル・アル・バティン（Hafr Al-Batin）地域のサウジアラビア国境近くに、2個クロタル部隊により防護された戦術統制・監視部隊を配置した。これらの部隊はアメリカ空軍やサウジアラビア空軍の早期警戒管制機E-3と連携し、フランス地上軍のエアカバーの統制を実施したり、ミラージュF1CRにより収集した偵察データをリンクによってリアルタイムに分析する能力も持っていた。フランス空軍は、連合作戦を実施するうえで、アメリカ軍やイギリス軍よりも多くの訓練と相互運用性の問題に直面し、実際イギリス空軍ほどアメリカ空軍との作戦に関する経験はなかった。多くのフランス空軍パイロットはアメリカの「レッド・フラッグ（Red Flag）」演習に参加してはいたが、アメリカ空軍はその演習においてもフランスには戦略輸送支援という脇役的任務しか与えていなかった。

---

[81] *Ibid.*, pp. 169-171.
[82] *Ibid.*, p. 171.

またフランスのミラージュ F1 はイラクも保有していたため、初期に敵味方識別関連の問題があった。しかしフランス空軍は、NATO での経験やアメリカ空軍やイギリス空軍との共同訓練での経験を参考にすることはできた[83]。

フランス空軍は、アメリカやイギリスと比較すると展開が遅かったこともあり、他国との訓練も 10 月 25 日に初めてアメリカ空軍、イタリア空軍と共に 2 機のミラージュ 2000 が飛行場攻撃訓練に参加した。2 回目の共同訓練は 11 月 13 日で、この時はアメリカが攻撃訓練を実施する場合の仮想敵の防空側として演習に参加していた。3 回目が 11 月 21 日でフランスを含む 5 か国での攻撃訓練だった。しかしイギリス空軍と比較すると、共同訓練の規模や頻度はかなり少なかった[84]。なお「砂漠の嵐」作戦直前のフランスの固定翼機は総計 66 機で戦闘機と攻撃機は 44 機であり、西側諸国ではアメリカとイギリスに次ぐ機数だった[85]。

フランス海軍は、国連のイラクに対する禁輸措置実施に関して大きな役割を果たした。このために展開した艦隊は、主力としてミサイル駆逐艦「デュ・シャイラ（*Du Chayla*）」、3 隻の対潜駆逐艦、フリゲート艦「コマンダン・デュキン（*Commandant Ducuing*）」を含み、それらを 1 隻のタンカー、2 隻の補給艦、1 隻の整備用艦艇、2 隻の病院船が支援艦艇となった。空母「クレマンソー」は、ヘリコプターの輸送業務を実施した。またフランスは紅海の安全のために、3 隻の掃海艇と支援艦 1 隻をエジプトのポートサイドへ派遣した[86]。

ウ　その他の西側諸国の軍

多くの他の西側諸国は、支援の役割で軍を湾岸地域へ展開、あるいはトルコへ戦闘部隊を派遣した。その後の「砂漠の嵐」作戦において戦闘部隊を関与させるのは、西側ではアメリカ、イギリス、フランスを除けばカナダおよびイタリアのみであった。カナダは、空軍の 26 機の CF-18 からなる 1 個混成飛行隊を 500 名の人員と共にカタールへ派遣した。カナダ空軍は、カナダとドイツから移動したが、その支援には C-130 輸送機と KAC-130 空中給油機が使用された。一方、イタリアは UAE のアル・ダフラ（Al-Dhafra）に 200 名の人員と 10 機のトーネード攻撃機を派遣した。その支援機として C-130 と G-222 兵站支援機も展開した[87]。カナダ空軍とイタリア空軍が、11 月末までに実施した他国との共同訓練は 1～2 回と非常に少ないものであった[88]。ドイツは湾岸の戦闘地域に部隊を送ることができなかったが[89]、トルコへアルファ・ジェットを派遣したほか、地対空ミサイルのローランドおよびホー

---

[83] *Ibid.*, p. 172.
[84] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, pp. 176-180.
[85] リチャード･P･ハリオン『現代の航空戦――湾岸戦争』服部省吾訳（東洋書林、2000 年）185 頁。
[86] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 172-173.
[87] *Ibid.*, p. 173.
[88] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, pp. 176-179.
[89] ドイツ憲法の規定では軍の行動は北緯 25 度以北の NATO 地域に限定していたため。

クを派遣した。また東地中海に掃海艦艇を、その後に練習艦隊を地中海へ派遣した[90]。NATO の艦艇が地中海から抜けるとドイツ艦艇の他にも NATO の大西洋常備艦隊、海峡常備艦隊が訓練目的で地中海に展開することで、在地中海の NATO 海軍力が減少しないよう処置がなされた[91]。

（6） アラブ諸国の湾岸への展開と各国の軍の状況

ア サウジアラビア

湾岸危機はサウジアラビア軍の不意を突いた。サウジアラビアは未だ兵器近代化計画の最中であり、それも限定された進展しか見られていない状況だった[92]。1990 年 8 月、サウジアラビア軍単独では、とてもイラク軍に対抗できる状況ではなかった。他のアラブ諸国や西側諸国の軍の協力が不可欠だった。サウジアラビア陸軍は、2 個機甲旅団、4 個機械化歩兵旅団、1 個歩兵旅団、1 個空挺旅団からなる総計 45,000 名の人員と 550 両の戦車を有していた。また軍隊に準ずるものとして、サウジアラビア国家警備隊（Saudi Arabian National Guard: SANG）があった。これには 2 個機械化旅団（3 個目を編成中）、国内の秘密施設に配備された 5 個歩兵旅団（部族の市民軍）、王室警備連隊があり、総計 56,000 名の人員と約 400 両の装甲戦闘車両を有していた[93]。

サウジアラビア空軍は、F-15 とトーネード攻撃機を含み戦闘用航空機 250 機、15 個飛行隊を保有していた。サウジアラビア軍はイラク軍と比較すれば、かなり小規模であったが、保有兵器の質はイラクと同等以上であり、アメリカからの指導を受けていた点は強みであった。サウジアラビア陸軍の戦車 M-60A3、AMX-30 は、それぞれが、イラクの主力戦車の T-72、T-62 と同等の性能と考えられたが、空軍の F-15 はイラクの最新鋭機である MiG29、ミラージュ F1 より優っていた。もっともイラクと同様にサウジアラビアも様々な国の武器メーカーから装備を幅広く購入していたため、維持、教育等に苦労が伴った。サウジアラビア軍は一部にイギリス製、フランス製装備の部隊があり、それ以外はアメリカ製装備だった[94]。サウジアラビア空軍は、各軍種の中で最も戦闘力があり、防空作戦や空対空戦闘では、湾岸諸国のどの空軍よりも高いレベルにあった。特徴的なのは 5 機の E-3A 空中警戒管制機を保有していたことだった。そのためサウジラビア空軍は NATO 以外のどの空軍よりも先進的な空中警戒管制機能を持っていた[95]。

---

[90] フリードマン『湾岸戦争』345 頁によれば、掃海艇派遣は、リビアがスエズ運河の地中海入り口付近に機雷を敷設する可能性があり、その対処を予期したものである。
[91] 英国国際戦略研究所編『世界の軍事情勢 90-91』81-85 頁。
[92] Kenneth M. Pollack, *Arabs at War: Military Effectiveness, 1948-1991* (Lincoln: University of Nebraska Press, 2004), p. 432. 1965 年から 90 年までに軍にかけた予算は 3,000 億ドルにも及んでいたが、軍の力は全く不十分だった。
[93] *Ibid.*, p. 432.
[94] *Ibid.*, pp. 432-433.
[95] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 188-189, 248. 航空警戒管制機 E-3

サウジアラビア軍にとって問題だったのは、イラク軍と比較しての兵力規模だった。この問題に関しては、湾岸危機発生以降の志願兵募集により、ある程度解消することができた。たとえば8月に下士官、兵の志願を募ると、最終的な志願者は20万人以上となった。事前の予測では2万5千名程度であろうと考えられていた[96]。これは予想外の数だったが、それでも実際の90年末のサウジアラビア陸軍の兵力は、せいぜい4万人台で、ほとんど変化がなかった。サウジアラビア陸軍は長く正規兵、熟練した技術兵、下士官の採用や訓練が問題となっていた[97]。志願者が多くても徴兵制のないサウジアラビアでは、素人からの訓練等では早期に戦力化を図れなかった可能性がある。

湾岸危機発生後、サウジアラビア陸軍は兵力増強に懸命となったが、「砂漠の嵐」作戦開始時には、20～35%人員不足であり、多くの部隊も最低限の充足レベルであった。この兵力不足の問題は深刻であった。サウジアラビアはクウェートやイラクとの国境地帯への守備兵力も当然必要であったが、イエメンとの国境防衛にも自国の有力な軍を派遣しなければならなかった。それによる兵力不足の深刻さを補うため、8月に8千名からなるパキスタン旅団の展開を必要としたが、展開経費までサウジアラビアが提供しなければならないような深刻な状況だった[98]。

イラク軍の強みは、その多くが戦争を経験した古参兵であることだった。一方でサウジアラビア軍は第1次中東戦争以降、ほとんど実戦を経験していなかった。1950年代にいくつかの部隊が、オマーンでの戦争に参加したことはあったが、第3次中東戦争では重要な機甲旅団をイスラエルから攻撃されないようタブクに戻していた。60～70年代にイエメンと衝突したことはあったが、小規模だった。第4次中東戦争では、1個大隊をイスラエルに対し派兵したが、ほとんど行動せず、旗を見せるという政治的意味合いしかなかった。空軍も80年代にイランやイラクとの間で交戦したことはあったが、偶発的なもので実戦経験と言うにはほど遠いものだった[99]。

湾岸危機発生直後、サウジアラビアには焦点となる自国の北東部に2個部隊しかなかった。ハフル・アル・バティン（Hafr al-Batin）第20機械化旅団とダーランに所在したサウジアラビア国家警備隊の第2キング・アブドゥーラ・アジズ（King Abd al-Aziz）機械化旅団である。さらにサウジアラビアによるこれらの軍の作戦準備の実施、あるいは他の部隊を北東部へ再展開するには長時間を必要とした。多くの部隊は、組織が不十分で、移動にも過度な時間がかかるからであった。8月20日までに、サウジアラビア東部の全州で戦闘可能な部隊は、実際には2個大隊しかなかった。そのためアメリカ軍が8月半ば、「砂漠の盾」

は、航空作戦で極めて重要な機種であった。アメリカ空軍はリヤドを拠点にE-3Cを11機、トルコのインジルリックを拠点に3機を使用した。アメリカ空軍はサウジアラビア上空で4機、トルコ上空で1機が常時運用された。一方でサウジアラビア空軍は5機のE-3Aを使用した。両空軍のE-3は全てのソーティ数の約85%、戦争中9万ソーティ以上、1日平均2,240ソーティの航空機を統制した。戦争中のアメリカ空軍およびサウジアラビア空軍のE-3はそれぞれ448ソーティ、303ソーティの任務をこなした。

[96] Pollack, *Arabs at War*, p. 433.

[97] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 176.

[98] *Ibid.*, p. 176; Pollack, *Arabs at War*, p. 433.

[99] Pollack, *Arabs at War*, p. 433.

作戦のための一部として湾岸に到着し始めた時、サウジアラビアの開豁した砂漠に、前述した第 20 機械化旅団と第 2 サウジアラビア国家警備隊旅団を見ることができたが、その部隊の布陣では予想されたイラクの侵攻ルートを阻止できそうにはなかった。側面からの包囲には極めて脆弱な布陣であったからだった。サウジアラビア部隊は適切な布陣、射界を重複させる火器配置、相互に容易に支援可能な各部隊の配置といった陸軍の基本的な防御戦闘を実施することができなかった。これらの状況を見れば、クウェート侵攻直後に継続してサウジアラビア攻撃が実施されなかったことは、同国にとって幸運であった。実際サウジアラビア軍の上級司令部は 8 月第 1 週に、イラク軍は 6 時間で全東部の州を蹂躙できると予想した。たとえアメリカの航空戦力が介入しても 12 時間で制圧されると予想した[100]。このようにイラクとサウジアラビアの相対的戦闘力には、絶望的な格差があった。

アメリカ軍は、サウジアラビア軍の戦闘能力にほとんど信頼を置いていなかった。アメリカ人はサウジアラビア軍との訓練での経験から、サウジアラビア軍がイラクに対する戦闘へはほとんど貢献できないと評価していた。アメリカの上級将校を含む多くの者は、最初の 1 弾が撃たれた時、サウジアラビア軍は遁走すると予想した（実際にはこれは過小評価であった）。また古参のアメリカ将校たちは、サウジアラビア人は自分たちのミスを認めるより、隠ぺいする傾向があると述べていた。そうしたことからアメリカ軍は、サウジアラビア軍の役割を最小限なものに限定し、サウジアラビア軍が最良の状況で戦闘に加入できるよう、多国籍軍の作戦を計画した。さらにアメリカの空軍と砲兵が、サウジアラビア軍部隊への火力支援を割り当てられた。しかし、支援されるサウジアラビア軍は作戦的にあまり重要ではない地域での任務しか割り当てられなかった[101]。

また戦略レベルに関して、サウジアラビアの能力はほとんどなく、その軍事作戦ほぼ全ては事実上、アメリカによって計画されていた。そのため 8 月 7 日にサウジアラビアへアメリカ中央軍が展開し始めると、サウジアラビアの防衛はアメリカ人の肩にかかることになった。アメリカ軍が到着する前のサウジアラビア軍の防御態勢は、適切な防御方法に関する理解がほとんどないことを示していた[102]。

実際にサウジアラビア軍の兵士の訓練には、アメリカ軍の 2 倍の期間が必要とされた。またサウジアラビア軍に装備が納入された後、何十年経ってもサウジアラビア人が、それらを十分に運用できない場合もあった[103]。サウジアラビア軍の整備能力はひどいものであったが、大きな問題にはならなかった。サウジアラビアは、自分たちの装備に対する最小限の

---

[100] *Ibid.*, pp. 433-434.

[101] *Ibid.*, p. 434. またアメリカの軍人が、サウジアラビア軍への助言や、彼らの報告の正確性を確実にするため、張り付かされていた。

[102] *Ibid.*, p. 444. その後もサウジアラビア軍の上級司令部は、大規模な軍事作戦の計画、実行を提示することはほとんどなく、そのような計画策定等をアメリカ側から要求されることもなかった。このような状況自体が、サウジアラビア軍の根本的な能力の低さを示していた。

[103] *Ibid.*, pp. 444-445. たとえば 1970 年代にサウジアラビアは F-5 を導入したが、その整備は比較的容易なはずであった。しかし湾岸危機発生時、ようやく独力で整備可能になりはじめたところだった。専門家が 1984 年に軍の装備に対する運用、整備の要員の訓練は、予定より何年も遅延していることを指摘していたが、90 年代初期もそれは変化していなかった。

整備（通常では軍内で処理する事項）でも外国の民間技術者に大きく依存していたからである。そのためサウジアラビア軍は、自分たちの車両を整備・維持することについてさえ、基本的な事項も知らなかった。たとえば戦車の乗員が、戦車のエアフィルターの定期的な整備方法すら知らなかった。ある大隊では駐屯地から砂漠の防御陣地へ展開後、M-60 戦車の 3 分の 2 以上が非可動となったが、これは直近の数週間でエアフィルターが詰まったためだった[104]。

驚くべきことにサウジアラビア陸軍は、優秀な西側兵器を保有し、給与、食事も良好だったが、戦場において部隊を支援する野戦兵站部隊が存在しなかった。先進国の陸軍部隊では正面装備はもちろん整備、糧食、衛生、輸送等多種の兵站支援を担う部隊が付随するのが通常であった。ところが、サウジアラビア軍では、平時の兵站支援を軍以外の民間業者に任せていたため、実戦になれば、野外において兵站支援を実施できる兵がいないという状況だった。そのため既述した戦車のエアフィルターの問題もサウジアラビア兵は、欠陥品と認識する始末だった[105]。またサウジアラビア空軍の減耗率も、エリートである F-15 飛行隊でさえ、同じ機種を持つアメリカの飛行隊と比較しても著しく高かった。さらに情報、兵站、通信、防空の分野ではサウジアラビアは完全に外国人に依存していた。

サウジアラビアの石油の富が、同国の人々が学校で技術を習得したり、単調な仕事を受けることをいやがる傾向を作ってしまった。サウジアラビア軍の弱点は他のアラブ諸国にも共通であったが、他のアラブ諸国よりは、まだましというだけだった[106]。このようにサウジアラビア軍の欠陥は、西側の軍から見ると全く異なった次元にあるものだった。部隊の維持という面で、軍での自己完結性が欠如していたからだった。平時であれば、取り繕うことができるが、一旦有事になれば問題が顕在化するのは必然だった。さすがにこの状況をアラブ総司令官のハリド王子も認識し、陸軍の後方支援体制に関して、シュワルツコフに会った最初の週に助力を求める有様だった。しかし後方支援組織は短時間で構築するのが困難であり、しかもサウジアラビア軍にはライバル関係や縄張り争いといった煩わしい問題が内在しており、ハリド王子が命令を下しても確実に実行されるとは限らないという状況であり、シュワルツコフも頭を痛めた[107]。

一方で比較的以前からアメリカから訓練を受けている空軍は、陸軍ほどひどくなかったが、新鋭機である F-15 等を保有していたにもかかわらず、攻撃能力が欠如しているなどの問題を含んでいた[108]。しかしサウジアラビア空軍は、アメリカ空軍が展開してくると、アメリカ中央軍航空部隊が計画した共同訓練に、早くも 9 月 12 日には参加した。この時はアメリカ空軍機とのパッケージによる連携訓練だった。さらに 9 月 22 日にはアメリカ空軍、イギリス空軍との 3 か国のストライクパッケージによる訓練を実施するなど、その後も積極

---

[104] *Ibid.*, p. 445.
[105] シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』355-356 頁。
[106] Pollack, *Arabs at War*, pp. 445-446.
[107] シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』355-356 頁。
[108] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 190. というのも F-15 売却時、中東の状況に鑑み、意図的に機体に攻撃能力が付加されなかったからである。

的に共同訓練に参加した[109]。

イ　エジプト

エジプトは、1978 年にイスラエルと平和条約を結んだ。その時にエジプトはおよそ 20 年にわたったソ連との密接な関係を見直し、軍事援助、訓練、装備をアメリカに切り替えた。また第 4 次中東戦争当時、軍に在籍した高学歴の兵士の多くは復員し、エジプト軍の人的長所であった兵士の教養レベルが低下していた。80 年代終わりまでに、大量の徴集兵は以前ほど教養レベルが高くなく、多くは複雑な器材に触れることはなかった。このような傾向からエジプト軍の人員は、かつてないほど能力が低くなった。エジプトに関わったことのあるアメリカ国務省の人間やアメリカ軍士官は皆口をそろえて、エジプト軍下士官はライフルやシャベルより精巧な装備を取り扱う任務を遂行する能力が無いことを証言している。同様にエジプト軍初級士官の能力は、西側の下士官レベルであり、西側陸軍の初級士官が通常アサインされる任務を遂行することはできなかった。中東、東アジア、ヨーロッパでの経験を持っていたアメリカ国防省の人間は、西側や東アジアの軍では軍曹や尉官が通常実施する仕事に、エジプト軍では大佐や准将がいつも従事していたと証言した[110]。

1978 年以降、エジプトは大量のアメリカ軍機材を購入し、軍の再編や改革にアメリカ軍の支援を受け始め、より古いソ連製機材は次第に二線級に追いやられた。多数のアメリカ軍事顧問がエジプトへ向かい、兵器の教育と運用訓練を実施し、多数のエジプト軍将校がアメリカの訓練コースへ参加した。80 年代半ばまでにエジプト軍の中核は、ソ連式ではなくなった。しかしエジプトで勤務していたアメリカ国務省員やアメリカ軍士官は、エジプトにおいては、能力や経験よりもムバラクと政治的に近い者が、軍では優遇されていると報告した。またアメリカ国防省の人間は、エジプトでは指揮系統上位の者が情報を各自が独占し、自己の保身のために軍高官は相互に情報交換もしないと述べた[111]。

エジプトは、アラブの中ではサウジアラビアに次ぐ 2 番目の規模の派遣軍で、多国籍軍全体の中でも大軍を派遣した国の 1 つだった。エジプトは第 3 機械化師団、第 4 機甲師団の 2 個師団を派遣した[112]。「砂漠の盾」作戦初期には、レンジャー部隊をとりあえずサウジアラビアに派遣し、ワジ・アル・バティン（Wadi al-Batin）の峡谷の東縁に配置した[113]。エジプトも重装備師団の展開は、サウジアラビアの受け入れ能力の関係で当初より遅れ、年明けにずれ込んでしまった。さらにエジプト軍の重装備部隊は、サウジアラビア西側の紅海で揚陸されたため、展開地までサウジアラビアを横断する形となった[114]。

派遣部隊はアメリカの装備品を使用し、アメリカ軍のドクトリンを習得した部隊であっ

---

109 Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, pp. 173-187.
110 Pollack, *Arabs at War*, pp. 137-138.
111 *Ibid.*, pp. 138-139.
112 *Ibid.*, p. 139.
113 Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 68.
114 United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 504.

たため、最良な部隊と考えられた。全派遣軍の規模は人員約 4 万人、戦車約 400 両であった。北部合同軍（JFC-N）は「砂漠の嵐」作戦での 2 つの主要なアラブ軍の 1 つで、エジプト軍は北部合同軍の中心となった。もう 1 つの東部合同軍（JFC-E）は、クウェート沿岸に沿った地域で作戦し、その中心はサウジアラビア軍、クウェート軍、カタール軍だった。北部合同軍はエジプト軍の他、サウジアラビアの 2 個重装備旅団、2 個クウェート旅団、シリアの 1 個機甲師団および 1 個コマンド旅団を含んでいた。アメリカ軍がエジプト軍を北部合同軍で中核と考えたのは、規模が大きいからだけでなく、アメリカ軍の計画策定者が、アラブ諸国の中でエジプトを最も能力があり、信頼できると思っていたからだった。一方、陸上戦力としてサウジアラビアとクウェートは、アメリカにとって大きな戦力とは考えられていなかった。そのためアメリカの計画策定者たちは、エジプト第 3 機械化師団を東部合同軍における攻撃の先鋒にすえた。そして第 4 機甲師団は戦果拡張部隊として使用しようとした。クウェートとサウジアラビアは、エジプト軍の右側面で助攻撃をすることとなっていた。シリアは他の部隊が深刻な問題に陥った時の予備とされた。

エジプト軍に対するアメリカ軍の信頼の程度は、あくまで他のアラブ軍と比較した際に問題が少ない程度のものにすぎなかった。実際、アメリカ中央軍（CENTCOM）は、北部合同軍が攻撃を実施する場合、何かあった時のために背後にアメリカ第 1 騎兵師団を配置した。アメリカ中央軍はアメリカ陸軍第 7 軍団とアメリカ海兵隊第 1 海兵遠征軍の間の区域を北部合同軍に割り当てた。アメリカ海兵隊第 1 海兵遠征軍は、海岸部での主要陽動部隊で、アメリカ第 7 軍団が攻勢の主力となる予定だった。この軍団はクウェート西方の南部イラクへ攻め入り、イラク共和国防衛隊を撃破するため、東へ旋回する予定であった。北部合同軍は 2 つの強力なアメリカ軍に挟まれ、作戦エリアは西部クウェートとされ、クウェートへの突進と南部クウェートからイラク軍が撤退するのに重要なバスラ・ジャフラ街道を占拠して、イラク軍の退路を遮断するために東に旋回する任務を与えられた。北部合同軍の任務において重要な部分は、クウェート中部のイラク機甲部隊による反撃から 2 つのアメリカ軍の翼側を掩護することになっていた。したがってアメリカ中央軍も、もし北部合同軍が敗退した場合、アメリカ海兵隊第 1 海兵遠征軍あるいは第 7 軍団の側面へのイラクの反撃を阻止するため、第 1 騎兵師団を北部合同軍のバックアップとしての必要を感じていた[115]。

およそ 15 年間にわたるアメリカの援助、助言、訓練を受けてきたが、エジプト軍の精強性はほとんど進歩しなかった。エジプトの将軍たちは、戦術的能力も非常に限定されたものであった。エジプト軍の初級士官は、独創的な思考を持つ傾向はなかった。エジプト軍をよく知るあるアメリカ軍士官によれば、エジプト人は簡単なことを複雑にし、決まった方法を使用する傾向が強く、融通が非常にきかなかったと評している。初級幹部のイニシアチブは、時に故意に抑えられ、意思決定権を委任された指揮官も積極的に行動する能力や意欲を示さなかった。エジプト軍と仕事をした国防省の人間にも、現場レベルでは少しもイニシアチ

[115] Pollack, *Arabs at War*, pp. 139-140.

ブがなく、またエジプト軍は諸兵科連合作戦を少しも理解しているように見えなかった。多くの軍事演習では各兵種バラバラで、適切に各兵種を有機的に結合させること（インテグレーション）を教えようともしなかったことを述べていた[116]。

エジプト軍は大隊以上の規模での訓練をめったに実施せず、兵種間での理解が全く不足していた。訓練では敵に対して有利となる機動については重視していなかった。湾岸戦争でも見られたが敵防御陣地を包囲する、あるいは側面攻撃するよりも正面攻撃を実施することを重視した[117]。

エジプト軍は、作戦だけでなく訓練も細部まで決定され、計画からの逸脱は少しも許されなかった。アメリカ軍士官の 1 人はエジプト軍の演習は、訓練ではなく、見世物として実施していると酷評した。計画は状況が変化しても変更せず、堅持するとも述べた。エリートである空軍の F-16 部隊でも訓練はシナリオ通りで、どこで旋回し、どこで撃ち、誰が勝つか知っているといった訓練だった[118]。これでは訓練の意味をなさなかった。

整備（メンテナンス）はエジプト軍の問題の根源であり続けた。アメリカ軍は、エジプト空軍の整備員は非常に簡易な調整等の整備は可能だが、より複雑な整備を実施する能力はないと報告している。空軍は F-16 を含む先進的兵器を保有し、継続的にアメリカから様々な支援を得て、パイロットもアメリカによる訓練を受けていた。にもかかわらず空軍力はそれほど高いものではなかった。F-4 パイロットは飛行訓練を好まず、あまり飛行しなかった。さらにエジプトのパイロットは F-16 でさえも、アビオニクス（電子機器）を空中で使用しなかった。通常オフにしているレーダーをオンにしても、器材を無視し目視に頼った。彼らにとって演習では台本通りなので、レーダーや他のアビオニクスを使用する必要性がなかった。誰がどこにいて、どう機動して、誰が勝つか事前に知っていたからである。アメリカ軍はエジプトが空軍を派遣しなかったのは、戦闘能力の低さのためだと考えた[119]。このように最先端のアメリカ製戦闘機を装備していても、エジプト空軍は西側の常識では考えられない運用を実施していた。またエジプトが平和条約を締結する以前、何回も戦ったイスラエル空軍がエジプト空軍に示した優位性も当然の帰結であったと言えよう。

エジプト軍の装備、運用、訓練等は、1980 年代はソ連方式からアメリカへと移行していったが、ソ連の強みや弱点も保持し続けていた[120]。一方で大規模な演習は減少していった。エジプトは 82 年以降は、西ではリビア、東方では他の中東諸国とイスラエルの紛争の飛び火に備えようとしていた。そのため自国の基地からの作戦やスエズ地域での作戦に重点を

---

[116] *Ibid.*, pp. 142-143.
[117] *Ibid.*, pp. 143-144.
[118] *Ibid.,* p. 144. アメリカ軍の顧問が、作戦を彼らに即興で作成させたり、広範なガイドラインを作らせたり、部下に細部を任せようとさせたが、それらに彼らは興味を示さなかった。
[119] *Ibid.*, pp. 145-146. 航空機の整備に関しては、F-4 導入後も長年、独力での整備が困難で、アメリカの関与を要求していた。そのため可動率は低いままだった。80 年代半ばにはエジプト人だけで整備をするため、アメリカとの整備契約をキャンセルしたが、エジプト人は予防整備をほとんど実施せず、適正な修理もできなかったため、F-4 の飛行隊は、すぐにお手上げ状態となった。結局自国独力での整備実施の決断は取り消し、アメリカで補給処レベルの整備を実施しなければならなかった。
[120] *Ibid.*, p. 146.

置いた。80 年代以降の急速なアメリカ装備の取得は、近代装備の量を重視したため、実戦的訓練の欠如、兵士のひどい居住環境の放置等の代償を伴った[121]。

初級士官は機動、革新、即興、主導権、自主的行動という事項に関しては全く興味を持たなかった。軍は常続的な情報操作、目的分析や情報収集の怠慢に悩んでいた。軍の指揮構造は、過度に一極集中していた。そのため早いテンポの作戦を実施することは不可能であった。軍は機甲、砲兵、空対空、空対地作戦を実施する能力がほとんどなかった。諸兵科連合作戦は第 4 次中東戦争の最初の 4 日間に見られた例外はあるものの[122]、ほとんど実行されなかった。一方、エジプト人にも有能な分野もあった。個々の兵士の勇敢さは疑いのないものであった。兵站や戦闘工兵も比較的得意な分野であった。概してエジプト軍は綿密な計画による攻勢や静的な防御戦闘ではよく戦ったが、計画外の作戦の遂行や流動的な機動戦では失敗した[123]。しかしサウジアラビアへ派遣されたエジプト陸軍部隊は、実戦的な訓練が欠如しているという難点はありつつも、派遣された士官および下士官は比較的優秀で、高い士気を保ち続けた[124]。

ウ　シリア

シリアは湾岸戦争に際して、第 9 機甲師団と 1 個コマンド旅団を派遣した。しかし彼らは、多国籍軍の指揮官たちからは主に政治的理由で、あてにできないと考えられた。シリアの指導者アサド（Hāfiz al-Asad）は、自国軍をイラクへの地上攻勢に参加させるかどうか、最後の瞬間まで決定しなかったからだった。その結果、彼らは予備部隊とされた。総じてシリア軍は、イスラエルとの戦争で何も学んでいなかったように見えた。シリアはイスラエルとの戦争後も特にコマンド部隊の勇気を中心に自分たちの能力を称賛していた。イスラエルとの戦争で自軍が後退したのは、ソ連製兵器の性能の悪さやイスラエル軍の全能さを原因とみなしていた[125]。重装備の機甲師団は、シリアもエジプトやフランスと同様、その展開はサウジアラビアの受け入れ能力の制約により年末にずれ込んだ。この重装備部隊も紅海沿岸の港から部隊集結地までサウジアラビアを横断しなければならなかった[126]。シリアは攻勢作戦に参加するか不透明であったが、ソ連製装備を保有しており、友軍相撃の可能性があることも予備とされた理由の 1 つであった[127]。

---

[121] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 196.
[122] 第 4 次中東戦争でエジプト軍は開戦当初、北のシリア軍と呼応してイスラエル軍に奇襲攻撃を実施し、成功を収めた。この時エジプトは、様々な欺瞞によってイスラエル軍の開戦初期の対応を不十分なものとした。エジプト陸空軍はよく連携し、精強なイスラエル空軍に対しては濃密な SAM や対空火砲で対応し、戦場でのイスラエル空軍の活動を一時的に封殺した。またイスラエル軍の戦車に対しても携行対戦車ミサイルの大量使用が戦果をあげた。詳細はアブラハム・ラビノビッチ『ヨムキプール戦争全史』滝川義人訳（並木書房、2008 年）を参照。
[123] Pollack, *Arabs at War*, pp. 146-147.
[124] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 197-198.
[125] Pollack, *Arabs at War*, p. 548.
[126] United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 504.
[127] Pollack, *Arabs at War*, p. 139.

シリアは諸兵科連合、機動戦、空対空戦闘の訓練を改善する意欲があまり見られなかった。シリアの作戦、演習は「遅い動き」、「細部まで規定された綿密な作戦」、「融通がきかない」と評された。シリア軍は全軍種のあらゆるレベルで、戦闘では機動（maneuvering in combat）を好まなかった。戦車の乗員やパイロットは思考せず、若手士官のイノベーションや臨機応変な即興的対応はほとんど期待できなかった。一方で大量の兵器購入は、シリア軍に非常な困難をもたらし続けた。乗員やパイロットは購入兵器が近代化するにつれて、その装備の習得には従来よりも大変な労力が必要だったからである。シリア軍は兵器を十分に使いこなす訓練を要員に実施することができなかった。1990 年代には 1,000 両もの戦車があったが、乗員は訓練不足であった。また航空機に対するパイロットの比率は、おそらく 2 対 1 に近いほどだった（パイロット 1 人に対し 2 機があった）。整備に関しても改善はなされていなかった。評価できるのは 73 年以降にゆっくりとではあったが自分たちの長所および短所を認め、長所は強化、短所は最小限にしようとしたことだった[128]。

シリア軍の防空は主として地対空ミサイルと地対空火砲の集中を中核とした。空軍機にエアカバーを託すのは、その低い空中戦能力では困難と認識していた。イスラエル空軍のように防空網を航空機で突破して、地上を攻撃する能力がなかったため、その代わりに大量の地対地ミサイルを保有した。シリア軍の部隊の団結と個人の勇気は素晴らしいものがあったが、効果的な機動戦を実施するうえでの戦術的リーダーシップには常に問題があった。特に初級士官は、一部既述したようにイニシアチブ、臨機応変な即興性、柔軟性、独立的な行動能力に欠けていた。指揮系統は過度に中央集権化していた。戦車、砲兵、空対空、空対地作戦に関わる練度は、非常に低いものだった。シリアは新しい兵器を取り込むのに多大な困難を抱え、機材の長所を生かしきれなかった。さらにシリア軍の指揮能力は二流だった[129]。

一方でシリアのコマンド部隊は選抜されており、比較的能力は高かった。規模は小さかったが、良好な戦闘技術を身に着けていた。1945 年からの中東地域での紛争で、シリア軍は他のアラブ諸国とは少なくとも 2 つの異なる部分があった。1 つはシリア軍は非常に勇気があり団結していた。アラブ各国は兵士の勇敢さを自慢するが、シリア兵士の勇敢さは突出していた。2 番目は他のアラブ軍より劣る兵站と規律であった。補給部隊不足がシリア軍の足を引っ張った。48 年のヨルダンを除いていかなるアラブ諸国の軍もシリアほどの能力を発揮することはできなかった[130]。シリアの特殊部隊旅団は、「砂漠の盾」作戦では早期にサウジアラビアに展開し、イラクと湾岸危機前の中立地帯の境界をパトロールし、後に重装備師団の到着により戦力は強化された[131]。

このように多国籍軍部隊は、主としてサウジアラビアへ集結しつつあった。イギリス軍およびフランス軍は、ある程度期待できるもののアラブ諸国は既述したように多くの問題があり、西側の基準から考えると、その装備の種類と数量だけで戦力を判断するのは危険であ

---

128 *Ibid.*, pp. 548-549.
129 *Ibid.*, pp. 549-550.
130 *Ibid.*, pp. 550-551.
131 Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 68.

った。

２　「砂漠の嵐」作戦――航空作戦

本節では、「砂漠の嵐」作戦開始からのアメリカ軍以外の多国籍軍による航空作戦の概要を述べてゆく。

（１）　全般

1991 年 1 月 17 日未明に始まった「砂漠の嵐」作戦の攻撃の先陣には、ヘリコプター、F-117A、巡航ミサイル、F-15E、トーネード GR1 攻撃機が使用され、イラクのレーダー警戒網や指揮統制システムに対して攻撃を実施した。これらの攻撃は、後続する非ステルス機の攻撃実施を容易にした[132]。

多国籍軍の「砂漠の嵐」作戦中のソーティ数では、アメリカ軍が全体の 86.3%を占めた。サウジアラビア空軍は 5.4%、イギリス空軍は 4.1%、フランス空軍は 1.5%、カナダ空軍は 1.0%、クウェート空軍は 0.8%、バーレーン空軍は 0.3%、イタリア空軍は 0.2%、カタールおよび UAE はどちらも 0.1%以下だった。アメリカ軍は全ての攻撃ソーティの約 90%、攻撃および防空ソーティの総数では、約 85%を占めた。特にアメリカ軍航空部隊は、偵察、電子戦、指揮統制といった特殊な面では多国籍軍の中で圧倒的優位を占めた。すなわちアメリカ航空部隊は、全ての偵察任務の 90%、指揮統制任務の 96%、電子戦任務の 97%を占めた。アメリカ軍以外のトーネードやミラージュ 2000 は、素晴らしい戦闘用航空機だったが、攻撃および視程外戦闘能力ではアメリカ軍の F-14B、F-15C、EA-6E が重要な役割を担った[133]。アメリカ軍以外では、サウジアラビアとイギリスが、比較的ソーティ数を多くこなしていた。サウジアラビア空軍は、「砂漠の嵐」作戦間に飛行した合計 6,852 ソーティのうち、防勢対航空（DCA）が約 35%と最も多かった（航空輸送 27%、航空阻止 24%）。それに対し、イギリス空軍では合計 5,417 ソーティのうち、航空輸送（これが最も多く 26%を占める。フランスも同様）を除けば、航空阻止や攻勢対航空（OCA）が比較的多い（航空阻止 23%、OCA16%、DCA13%）という特色があった[134]。

防空用航空機は、69 機のサウジアラビア空軍 F-15C[135]、24 機のトーネード ADV、18 機のイギリス空軍トーネード F3、18 機のカナダ空軍の CF-18、12 機のフランス空軍ミラージュ 2000、12 機のバーレーン空軍の F-16C を含んでいた。アメリカ軍以外の多国籍軍の

---

[132] United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 89-90.
[133] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 376-377.
[134] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, pp. 232-233.
[135] Eliot A. Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey Summary Report* (Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office, 1993), pp. 197-198 によれば、エアカバーの必要性がなくなるにつれて F-15C は攻撃ミッションに振り替えられた。

戦闘用航空機が参加した主要な航空作戦の規模は、以下のようなものであった[136]。

主要航空機の作戦規模（ソーティ数）					
所属	機種	OCA	DCA	AI	偵察
イギリス	トーネード F3（防空型）		696		
	トーネード GR1	740		682	130
	ジャギュア			530	26
フランス	ジャギュア	50		495	18
	ミラージュ 2000	172	340		
	ミラージュ F-1-CR			36	44
カナダ	CF-18	144	693	48	
イタリア	トーネード IDS			135	
サウジアラビア	F-5	62		1,058	
	F-15C	140	1,940		
	トーネード ADV（防空型）		451		
	トーネード IDS	75		590	
バーレーン	F-16	14	152		
UAE	ミラージュ 2000			58	6

多国籍軍の航空作戦が成功した 1 つの鍵は、単一統合指揮官の任命であった。アメリカ中央軍航空部隊指揮官であったホーナー中将が、統合航空部隊の指揮官となった。「砂漠の嵐」作戦では、1 人の航空部隊指揮官（JFACC）が、全ての航空部隊の統合（アメリカ軍の全軍種）、そして複数国の航空作戦の指揮官として指名され、航空作戦の計画策定、調整、戦力配分、戦域目標に合致した適切な多国籍軍の航空作戦への任務の責任を与えられた。これは局地紛争ではアメリカ軍事史上初めてのことだった。JFACC が統制した航空機は 2,700 機以上で、その 25%がアメリカ以外の 14 の異なる国と軍種であった[137]。

アメリカ軍を中心とする、いわゆる西側諸国の軍とアラブ軍とは建前上、指揮統制系統が分離してはいたが、実際には調整組織を通じることにより、アメリカ軍は全体の作戦を統制した[138]。そしてアラブ軍には西側諸国の軍と分離して、個別に作戦を実施しても確実に実行できる比較的容易な支援任務を与えることが、多国籍軍の指揮統制では重要であった。航空作戦では、アメリカ空軍の E-3AWACS を使用した中央での防空管理とアメリカ空軍による中央（統合航空構成部隊）での攻撃ミッション計画作成において、アメリカ軍以外の各国の空軍に役割を明確に定義することで、指揮統制の軋轢といった問題を減少させた[139]。

---

[136] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 397-398; Cohen, *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, pp. 326, 329-330, 340-345.
[137] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 237.
[138] United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 557-558.
[139] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 235.アメリカ軍とアメリカ軍以外と

「砂漠の嵐」作戦間、多国籍軍の航空部隊の指揮統制活動は、アメリカが 90%以上を占めたが、サウジアラビアの AWACS も重要な役割を果たした。多国籍軍航空部隊の指揮、統制、電子戦、偵察能力におけるアメリカの航空部隊の能力は突出していたが、指揮・統制・通信・コンピューター（C4）では、サウジアラビア空軍が E-3 による 85 のミッションを実施し、この E-3 は、イラク・クウェート国境の南方 110～125NM の地点で指揮統制のため滞空した、また偵察にはサウジアラビア、イギリスおよびフランスの航空部隊が参加し、電子戦では ESM に関してのみイギリス軍が関与した[140]。

軍事専門家の中には、多国籍軍が航空作戦で多くの損害を受けると予想した者もいたが、サウジアラビア空軍や UAE 空軍の何人かの将軍は、イラン・イラク戦争でのイラク空軍のお粗末ぶり[141]からイラクに対する航空作戦を楽観的に考えていた[142]。

「砂漠の嵐」作戦の航空作戦では、アメリカ軍の存在感は、質、量共に圧倒的であった。アメリカ軍以外は、ほとんどが DCA や航空輸送等の積極的な攻撃任務以外に従事した。

（２）　西側諸国の派遣空軍の作戦状況

ア　イギリス

（ア）　緒戦の作戦状況――トーネード GR1[143]を主として

イラクに対する航空攻撃開始は、現地時間で 1991 年 1 月 17 日の午前 3 時（H アワー）とされた。最初の 4 時間でイラクを攻撃した航空機は、400 機近くにおよび、支援や艦隊防空で約 200 機が充当された。最初の夜に 668 機が出撃したが、その内、アメリカ空軍機が 530 機、アメリカ海軍および海兵隊の航空機は 90 機であり、イギリス空軍機は 24 機が参加した。イギリス空軍機の全体に占める割合はわずか 4%であったが、アメリカ以外の航空機は、他にフランスとサウジアラビアが 12 機ずつであった。また最初の 24 時間で多国籍軍は、合計約 1,300 機を出撃させた[144]。初日の未明にあった最初の航空部隊の任務はイラクの統合防空組織をバラバラにし、究極的には破壊することだった。ほとんどがアメリカ軍であったが、一部イギリス空軍のトーネード GR1 が攻撃に、トーネード GR1A が偵察に使

の間では航空機の性能と部隊練度には明確な差があるため、それに見合ったミッションを与えることで航空作戦を円滑に遂行した。

140 *Ibid.*, pp. 245-246.

141 たとえば Pollack, *Arabs at War*, pp. 185-186 によれば、イラン・イラク戦争開戦劈頭、イラク空軍は、イラン革命で戦力が低下したイラン空軍基地を初日に奇襲攻撃で一気に叩こうとしたが、イラク軍機は技量不足で全く戦果をあげることができなかった。後日イラン軍がイラク軍の攻撃目標が何であったかわからなかったほどであった。

142 Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 398-399.

143 トーネード GR1 はトーネードの攻撃機型のイギリス空軍での名称である。その他の装備国では、トーネード IDS と呼称される。ただし *Gulf War Air Power Survey* 各巻では、サウジアラビアのトーネード IDS もトーネード GR1 と呼称している。

144 ハリオン『現代の航空戦』198-199 頁。

用された。GR1、GR1A が使用されたのはイラク南部や西部であったが、アメリカ軍以外に、この重要な開戦初頭の攻撃の第 1 波（0239～0525）に加わるよう計画されたのは、イギリス空軍だけであった[145]。この 4 時間における初動の攻撃は、当然最精鋭の攻撃戦力を一気に投入したものと考えられ、数は少ないながらも多国籍軍の中では、攻撃戦力としてアメリカ軍以外でイギリス空軍は最も期待されていたと言えよう。最初の 5 日間、トーネード GR1 はイラク軍の航空活動を制約するため、イラク飛行場への JP233 爆弾[146]による低空攻撃を実施した[147]。

初日の H アワー直後の攻撃には、トーネード GR1 が飛行場攻撃に向かった[148]。トーネード GR1 は、バーレーンのムハラク（Al Muharraq）、サウジアラビアのタブク、ダーラン（Dhahran）から発進、敵飛行場を叩くために、JP233 滑走路破壊用爆弾および 1,000lb 通常爆弾で攻撃した[149]。この時、アサド（Al Asad）飛行場への攻撃では、飛行場攻撃のトーネード GR1 と共に対レーダーミサイル（ALARM）でレーダーを破壊するトーネード GR1 も随伴し、目標まで 200ft という低高度で進攻した[150]。

また開戦劈頭の攻撃で、4 機のトーネード GR1 は、アメリカの A-6 攻撃機 4 機と共に、バグダッド西方 74km に位置するタカドゥム（Al-Taqaddum）飛行場を攻撃した際、イラク防空網に混乱を与えるために、デコイを搭載した 4 機の A-6 が援護した。さらにこの攻撃隊の直前には、アメリカ海軍によるバグダッドの防空網を制圧するための攻撃パッケージが先行して紅海から発進しており、このトーネード GR1 を含んだ飛行場攻撃パッケージは、アメリカ海軍の防空網制圧部隊にわずかに遅れて、効果的に攻撃を実施した[151]。飛行場を制圧するため有効と考えられた JP233 による攻撃は、敵飛行場上空を水平低高度で航過する必要があった。しかし第 1 夜（未明）の攻撃では、この低高度ミッションにもかかわらず、イギリス空軍には損失機はなかった[152]。

1 月 17 日の昼間には 4 機のトーネード GR1 が、イラク南部の飛行場を攻撃した。また 2200 には、アメリカ海兵隊の 18 機の F/A-18、10 機の A-6 と共に 4 機のトーネード GR1

---

145 United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 116-117.

146 ニューディック『ヴィジュアル大全航空機搭載兵器』183 頁によれば、JP233 はイギリスのハンティング社によって開発された滑走路破壊用のクラスター爆弾である。この爆弾は、内部が 2 つに分かれ、1 つには、215 個の小型の多目的地雷が、もう 1 つには、30 個の成形炸薬滑走路貫通弾が収納されていた。これにより滑走路の復旧使用の時間を長引かせることを期待した。この JP233 をトーネード GR1 は、2 発を搭載可能だった。

147 Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey Summary Report*, p. 63.

148 Eliot A. Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. II, Pt I*, Operations Report* (Washington, D.C.: U.S.Government Printing Office, 1993), p. 123 掲載の H アワー後 1 時間半までの攻撃図にはイラク飛行場 3 箇所に対して GR1 の攻撃参加が確認できる。内 2 箇所についてはアメリカ海空軍機とのストライクパッケージを編成して攻撃している。事前の訓練状況から考えれば、この 3 箇所の飛行場攻撃のトーネードはイギリス空軍機と思われる。

149 「湾岸戦争戦闘日誌」、イギリス空軍、〈http://www.raf.mod.uk/history/Gulf War Campaign Diary.cfm〉2015 年 11 月 10 日アクセス。

150 Thomas Withington, *Wild Weasel Fighter Attack* (Bansley: Pen & Sword Aviation, 2008), p. 159.

151 Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. II, Pt I, p. 127.

152 *Ibid.,* pp. 135-136.

が、バスラ近郊の飛行場、橋梁、石油施設を攻撃した[153]。この時もトーネード GR1 の攻撃目標は、飛行場であったと推定される。この日の昼間攻撃では 1 機のトーネード GR1 が、レーダー誘導地対空ミサイル（SAM）により失われている[154]。トーネード GR1 は、当初のほぼ 1 週間は、OCA に専念していた。この間に、GR1 は戦闘で 5 機を喪失（戦闘外で 1 機喪失）したが、これは、同時期のアメリカ軍機の損失と比較して、機種別では最も多い損失数であった。トーネード IDS（トーネード GR1 と同等の攻撃機）を初日の攻撃から参加させたサウジアラビアは、初日の OCA でも損失が全く無く[155]、同じ OCA でもその目標の重要性と任務に対するリスクは、サウジアラビア空軍と比較してイギリス空軍の方が大きかったと思われる[156]。

この日の夜間に、イラク西部の航空基地 H-2、H-3 をアメリカ海軍の SEAD（防空網制圧）の支援を得て 8 機のトーネード GR1 が、滑走路等の攻撃を実施した。同時に中西部の 2 基地（Mudaysis および Wadi Al Khirt）もトーネード GR1 の攻撃を受けた[157]。しかし、夕方の作戦では 2 機のトーネード GR1 が、地対空火砲およびレーダー誘導地対空ミサイルにより撃墜された[158]。

第 2 日目は、未明にトーネード GR1 が、第 1 日目と同様にイラク西部の H-2、H-3 を、南部においては、1 日目とは異なるジャリバ飛行場（Jalibah）を攻撃した[159]。アメリカの攻撃計画策定者は、初日の多国籍軍の攻撃によりイラク防空網の能力を低減させたと判断し、2 日目にはやや攻撃パターンを変えてきた。すなわち様々な目標に対し、より規模の大きな攻撃パッケージを送り込むこととした。2 日目の朝の最初の大規模パッケージ部隊は、多数のアメリカ海軍機（10 機の A-7、16 機の F/A-18、18 機の F-14）を伴った 4 機のトーネード GR1 によってイラク西部のアサド（Al Asad）基地の攻撃が計画されたが、悪天候のためミッションはキャンセルされ、一部は別目標へと指向された[160]。

3 日目の早朝には、アメリカ海空軍のイラク南部への攻撃パッケージに、トーネード GR1A（偵察機型）が 2 機参加し、さらに夜間から翌未明にかけて、アメリカ軍の航空機との攻撃パッケージにより 7 機のトーネード GR1 が、イラク西部の H3 に、さらに 16 機のトーネード GR1 が、イラク南部の飛行場と防空指揮所を攻撃した[161]。しかし 3 日目である 1 月 19 日は、トーネード GR1 が、再び 2 機失われた。この時期、これらの航空機は、イラ

---

153 *Ibid.*, pp. 139-144.
154 *Ibid.*, p. 145. この搭乗員は脱出後、捕虜となった。詳細は John Peter and John Nichol, *Tornado Down* (London: Michael Joseph Ltd, 1992) に詳しい。
155 Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, pp. 344-345, 642-643, 651.
156 サウジアラビア空軍の OCA は、数も少ないが、アメリカ側史料においてもイギリス空軍の OCA に関してはたびたび評価されているものの、サウジアラビア空軍の OCA に関する論評は全く見当たらない。後述するように、サウジアラビア空軍の技量は低いとアメリカ側に認識されており、当初から重要度が高く、リスクも高い目標へイギリス軍を指向したと考えられる。
157 Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. II, Pt I, pp. 141, 144.
158 *Ibid.*, pp. 145-146 ; Cohen, *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, pp. 642-643.
159 Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. II, Pt I, pp. 148-149.
160 *Ibid.*, pp. 150-151.
161 *Ibid.,* pp. 165-168.

クの対空砲や赤外線地対空ミサイルの脅威が高いとされた低高度進攻を実施していた[162]。

開戦初期の典型的なトーネード GR1 による敵飛行場攻撃は、たとえば 8 機のトーネードが攻撃を実施するために、敵防空網制圧に直接アメリカ海軍の A-7 や EA-6B が支援した。さらに F/A-18 が飛行場施設を攻撃、F-14 が上空で援護した。くわえて、この攻撃部隊はスタンドオフジャマー[163]として行動するアメリカ空軍の EF-111 を伴った KA-6 空中給油機により支援されるといった多機種による攻撃パッケージだった。しかし、アメリカ軍には感謝されていたものの、トーネード GR1 と JP233 の組み合わせはやや攻撃力不足であった。イラクの航空基地は、元来トーネード GR1 が予想戦場としていたワルシャワ条約機構軍の飛行場と比較し、はるかに広大なものであったからである[164]。当然、トーネードの攻撃機数の少なさ（最も全力で OCA を実施した開戦初日でイギリス空軍は 47 ソーティだった。一方でアメリカ空軍だけで初日の OCA は 359 ソーティ、アメリカ海兵隊機は 14 ソーティだった[165]。）も影響したが、十分に飛行場を制圧するのは、困難だった。結局、多国籍軍の航空戦力によってイラク空軍が圧倒されたため、その問題が顕在化することはなかった。

（イ）　低高度攻撃から中高度攻撃への変更

ジャギュアは主として日中のクウェートでの作戦が予想される一方で、トーネード GR1 は、昼夜間の作戦で、最初は、イラク領内の重防護の飛行場が目標と予想されていた。飛行場攻撃用に JP233 を使用することが前提なら、低高度飛行が要求されるのは必然的だった。しかし、戦域のイギリス航空部隊指揮官であったラッテン（William Wratten）少将は、イラク空軍機が開戦数日でほとんどその活動をやめてしまったことで、低高度進攻作戦の必要性が減少したことや、開戦時に低空進攻したトーネード GR1 の損害率が比較的高かったと考え、トーネード GR1 の低高度から中高度攻撃への変更を決心した。しかし実際には、JP233 による低高度進攻による損害は 1 機だけだった。作戦初期、トーネード GR1 が 1 機喪失したことでラッテン少将は即座に、当分は昼間の航空機運用は中止するという決断もしている[166]。このように、イギリス空軍指揮官は、自軍のリスクに対して、非常に敏感で迅速な判断を下した。

一方で、イギリス軍攻撃機が中高度で作戦を実施する場合、効果という面で問題があった。乗員は、それまで中高度から 1,000lb 自由落下爆弾を投下する訓練は実施していなかった。そのため、1 月末時点のイギリス空軍攻撃機による中高度攻撃は、極めて正確さを欠くもの

---

162 *Ibid.*, p. 178.

163 スタンドオフジャマーは敵の武器（ここでは対空火器）の射程外から電波妨害を実施することである。

164 John Andreas Olsen ed, *Global Air Power* (Washington, D.C.: Potomac Books, 2011), p. 58.

165 Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, pp. 243, 260, 307.

166 Cox and Gray, *Air Power History*, p. 297. 一方で「湾岸戦争でのエアパワー」、イギリス空軍、〈http://www.raf.mod.uk/history/airpower in the Gulf War.cfm〉2015 年 11 月 10 日アクセス によればイギリス空軍は、JP233 投弾後数十マイル離れた所で墜落した機体はあったが、投弾中に撃墜された機体はないとも述べている。

となった。またトーネード GR1 による精密誘導兵器による攻撃は、目標標定機能を保有していないため、実施不可能だった。この問題に関しては、従前はアメリカ空軍の F-15E が、トーネード GR1 の目標標定機として行動する予定であったため、問題ないと考えられていた。しかし、「砂漠の嵐」作戦開始後、イラク軍のスカッド狩りに多くの F-15E を必要とされたために、トーネードへの約束は反故にされてしまった[167]。一方で、偵察機型のトーネード GR1A のみは、ヨーロッパでの訓練と同様に低高度・高速度で任務を継続した。この偵察任務は、スカッド捜索、特殊部隊支援、攻撃前偵察、戦果確認などで、多用された[168]。

（ウ）　精密誘導攻撃実施への迅速な対処

精密誘導攻撃が実施し得ない状況となって、イギリス空軍は、迅速な行動を起こした。ペイブスパイク・レーザー標定器[169]を装備した旧式攻撃機バッカニア[170]が、1 月末に到着、これによりバッカニアとトーネード GR1 のペアで精密誘導兵器による攻撃が可能となった。さらに、開発中だった 2 基の熱画像レーザー目標指示器（Thermal Imaging Airborne Laser Designator: TIALD）ポッドとこの TIALD の情報を受信処理可能な 4 機のトーネードが、2 月 6 日に到着した。これであれば TIALD ポッド搭載のトーネード GR1 単独で、精密誘導兵器による攻撃が実施可能となった。TIALD 運用後は、攻撃の有効性が高まった。またバッカニア自体は、旧式な航空機であったが、レーザー標定器による目標誘導により、湾岸戦争で最も役立った航空機の 1 つとなった[171]。

（エ）　トーネードの運用状況の推移

結局トーネード GR1 は、湾岸戦争において約 1,500 ソーティにおよぶ攻勢対航空（OCA）および航空阻止（AI）を実施した。その割合は半々であった。当初の約 1 週間の夜間低高度攻撃による JP233 や 1,000lb 爆弾を使用した OCA、続く数週間は、中高度での航空阻止と 1,000lb 爆弾を使用した OCA も実施した。この場合、石油貯蔵所、物資集積所、飛行場等精密度が比較的要求されない広い目標が選択された。最後の 3 週間は、昼夜間、中高度からの OCA および航空阻止をもっぱらレーザー誘導爆弾で実施した。その際、バッカニアが目標標定する場合は、作戦は昼間に限定され[172]、トーネードが TIALD を使用する場合は、

---

[167] Cox and Gray, *Air Power History*, pp. 298-299. アメリカ軍の F-15 が標定機となることは、1990 年 10 月にホーナー中将がイギリス空軍司令官に約束した事項であった。
[168] Olsen ed., *Global Air Power*, p. 59.
[169] ニューディック『ヴィジュアル大全航空機搭載兵器』187 頁によれば、本器材が登場したのは 1973 年で、アメリカ軍では通常、ファントムの胴体前方下部にあるスパロー・ミサイルベイの 1 つに装着した。
[170] バッカニアは 1960 年代イギリス海空軍に配備された機体で、湾岸戦争終了の数年後に退役となった機体である。
[171] Cox and Gray, *Air Power History*, pp. 298-299.
[172] ニューディック『ヴィジュアル大全航空機搭載兵器』160 頁によれば、一般に 4 機のトーネードは 2

昼夜間作戦が可能だった。この場合、橋梁、飛行場施設、航空機シェルターのような正確な攻撃を必要とされる目標設定が可能となった。結果的に、開戦から 4 週目の終わり（2 月中旬）までに、トーネード GR1 のミッションの 60%は、ペイブウェイレーザー誘導爆弾を使用するようになった。なお戦争中、トーネード GR1 の 7 機の喪失のうち[173]、5 機は中高度 1,000lb 爆弾でのミッションであった[174]。

また、戦争中期以降、TIALD を使用して、229 個所のピンポイント目標を攻撃した。この攻撃での被害は、唯一 2 月 14 日に 1 機が SAM により撃墜されたものである[175]。さらにトーネード GR1 にレーザー標定結果を与えるバッカニアは、2 月 2 日、ムハラクから作戦を開始、別のバッカニアが 2 月 5 日、ダーランから作戦を開始した。2 月 2 日の初めての精密誘導攻撃は、2 機のバッカニアと 4 機のトーネードによって、ユーフラテス川の橋への攻撃に成功した[176]。

一方で、戦闘でのトーネード GR1 の喪失のうち 5 機は、1 月 23 日まで、すなわち、最初の 1 週間で発生している。これは、同時期の多国籍軍航空機の損失の 26%を占めており、かなり大きなものであった[177]。この損害は、元来トーネード GR1 が、ヨーロッパで想定された低空攻撃を同様に、イラク領内でも実施したため、多くの被害を受けた感がある。しかし、実際には既述したように、緒戦で低空での JP233 攻撃ミッションが多かったために、特別に被害が大きくなったわけではなかった。開戦後、短期間での損失数の多さが、誤認識を生んだ。攻撃高度の高低の損失への影響は、トーネード GR1 に関しては、ほとんどなかった。低高度攻撃を停止後、被害が極限（GR1 のその後の喪失は 2 月 14 日の 1 機のみ[178]）されたのは、開戦 1 週間以内でイラクの防空能力が、多国籍軍によりほとんど壊滅したのが原因である。実際、開戦 4 日目の 1 月 19 日には、イラクの SAM や対空火器の活動は、開戦日の 10 分の 1 以下になっている[179]。

1 月 22 日の最後の JP233 による攻撃までに、4 機のイギリスのトーネード GR1 が失われた。このことが戦争中も戦後も、喪失理由を JP233 攻撃で要求される低空攻撃が原因と言われていることにつながった。この損失 4 機のうち 2 機の喪失は、レーダー誘導ミサイルによるものであり、そして 4 機のうち 1 機のみが、JP233 による攻撃任務に従事してい

機のバッカニア（レーザー標定）に支援された。

173 Cohen ed.,*Gulf War Air Power Survey* Vol. V, Pt I, pp. 641-647 では、戦闘によるイギリス空軍トーネードの全損失は 7 機となっている。一方で「グランビー作戦における航空作戦」、イギリス空軍、〈http://www.raf.mod.uk/history/RAFAirOperationduringGranby.cfm〉2015 年 11 月 10 日アクセス、では喪失機数は 6 機となっているが、1,000lb 爆弾ミッションで 5 機、JP233 攻撃で 1 機、TIALD による攻撃で 1 機喪失であるため、7 機が正確な喪失数と考えられる。

174 「グランビー作戦における航空作戦」、イギリス空軍、〈http://www.raf.mod.uk/history/RAFAirOperationduringGranby.cfm〉2015 年 11 月 10 日アクセス

175 Sebastian Ritchie, “The Royal Air Force and the First Gulf War 1990-91, p. 42.

176 Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 421-423.

177 Christopher Chant, *Air War in the Gulf 1991* (Oxford: Osprey Publishing Ltd, 2001), p. 67.

178 「湾岸戦争でのエアパワー」、イギリス空軍、〈http://www.raf.mod.uk/history/airpower in the Gulf War.cfm〉2015 年 11 月 10 日アクセス。

179 United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 150.

た。イギリス側は、初期の 4 機の喪失は、低高度攻撃に起因するのではなく、不運が続いたと主張している。22 日に 1 機のトーネード GR1 が、原因不明で喪失し、さらに中高度攻撃実施以降は、トーネード GR1 が 2 機、イラク軍防空網によって撃墜された[180]。

空爆開始から 4 週間経過すると、イラク上空の航空優勢は完全に多国籍軍が掌握しており、多国籍軍機は様々な目標を攻撃できた。たとえば 2 月 13 日の例では、0800 過ぎにトーネード GR1 は、イラクの 2 か所の航空基地（Al Asad、Taqaddum）を、そして 1 か所の前線拠点基地（As Salman）を攻撃、午後にも 2 か所の航空基地（Al Asad、Latifiya）を攻撃した。イギリス空軍の攻撃には、アメリカ海空軍の攻撃機や援護機が同行した。またトーネード GR1 の攻撃編隊の多くに、目標標定機としてバッカニアも同行した[181]。さらに、この午前、午後の TIALD 装備のトーネード GR1 は、ALARM 装備機に支援され、またバッカニアを目標標定機としたトーネード GR1 も精密誘導兵器を使用し、橋梁や航空機シェルターを破壊した[182]。

（オ）　多彩な攻撃目標

重要目標の 1 つであったイラクの石油施設へは、多国籍軍の様々な機種が、攻撃を実施した。時には、8～12 機のトーネード GR1 から構成される大規模な攻撃部隊も投入された。石油施設の攻撃は、多くが無誘導爆弾によるものだったが、最終的には攻撃機としては旧式なバッカニアも爆撃を実施した[183]。また発電所も重要目標であり、アメリカ軍機以外ではトーネード GR1 がナシリヤ（Al Nasiriyah）とナジャフ（Al Najaf）の発電所攻撃に参加し、戦果をあげている[184]。発電所への攻撃でアメリカ軍機以外で参加した多国籍軍機は、トーネード GR1 のみである。その他の攻撃例としては、NBC（核・細菌・化学）関連施設を目標としたものも見られた[185]。

また、多国籍軍は最終的に、イラク地上防空システムの中枢である KARI システムに対し、総計 630 ソーティの攻撃を実施した。攻撃には様々な航空機種を使用した。これらにもアメリカ軍機のほか、トーネード GR1 を含み、この KARI システムへの攻撃は、多国籍軍機のイラク防空システムへの全ての攻撃の 58%を占めた。開戦 4 日目までに、鍵となる指揮統制施設と KARI のセンサーへの多国籍軍の攻撃は成功を収め、他の目標を攻撃することが可能となった[186]。

---

[180] Eliot A. Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. II, Pt II, *Effectiveness Report* (Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office, 1993), pp. 145-146.
[181] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. II, Pt I (Washington,D.C.: U.S. Government Printing Office, 1993), pp. 215-216.
[182] 「湾岸戦争戦闘日誌」、イギリス空軍、〈http://www.raf.mod.uk/history/Gulf War Campaign Diary.cfm〉2015 年 11 月 10 日アクセス。
[183] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. II, Pt II, p. 299. ごく一部、精密誘導攻撃を実施し、トーネード GR1 も参加した。
[184] *Ibid.*, p. 306.
[185] *Ibid.*, p. 322.
[186] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 410-412.

（カ）　ジャギュアの活動

ジャギュアが使用可能な搭載兵器は、1,000lb 爆弾と BL-755 クラスター爆弾であった。後者は、完全な低高度進攻が必要であり、前者は、低高度進攻で緩降下投下あるいはトス爆撃によって攻撃した。イギリス軍は、「砂漠の嵐」作戦前、低高度進攻するジャギュアの危険性を憂慮した。しかし、高度 10,000ft 以上では対空火砲や赤外線 SAM からの脅威は最小となるものの、1,000lb 爆弾の着弾誤差が大きく有効性に問題があった。これを是正するには、レーザー誘導爆弾が有効であったが、目標標定器材がないため使用できなかった。結果的に、中高度攻撃に適したアメリカの CBU-87 クラスター爆弾を何とか導入しようとした[187]。この爆弾はその投下高度だけではなく、湾岸に集積されたアメリカ空軍のストックから入手可能という利点もあった[188]。

様々な制約があるなかで、ジャギュアの攻撃方法については、ジャギュアの派遣部隊指揮官に一任され[189]、彼は、中高度攻撃を選択した。予想戦域は、イラク軍対空火砲が最も集中するであろうクウェートであり、中高度では多くの軽火器や赤外線 SAM の脅威から免れることができ、一方、中高度で脅威となるレーダー誘導 SAM やイラク空軍戦闘機は、アメリカ軍により早期に無力化されると考えたからだった[190]。この判断は正解であった。イギリス空軍のジャギュアは、開戦初日から連日の航空阻止に従事したが、損害はなかった[191]。ジャギュアは戦争全期間では満遍なく連日 15 ソーティ前後の航空阻止を実施した[192]。

ジャギュアの航空阻止（イギリス側は BAI と認識[193]）等は、昼間攻撃だけであったが、補給物資集積所、SAM サイト、火砲およびシルクワームミサイル（地対艦ミサイル）を対象に攻撃を実施した。特に、海上目標への CRV-7[194]による攻撃は高い効果があり、揚陸艇や哨戒艇を破壊した[195]。

一方、陸上部隊に対する近接航空支援は、イギリス空軍は実施していないとアメリカ空軍は認識していた。また、その他のアメリカ以外の国も全く参加していない[196]。これは、アメ

---

187 Cox and Gray, *Air Power History*, pp. 293-295.
188 Ritchie, "The Royal Air Force and the First Gulf War, 1990-91," p. 40.
189 *Ibid.,* p. 42 によれば実際には指揮系統上部から攻撃高度の件について明確な方向性が欠如していたため、結果的に現場指揮官が、裁量の自由を持つことになったのが実情であった。
190 Cox and Gray, *Air Power History*, pp. 295-296.
191 Cohen, *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, pp. 642-647.
192 *Ibid.*, p. 341.
193 イギリス軍では BAI としていても、アメリカ空軍の認識では Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey* Vol V, Pt I, pp. 232-233 によれば全て通常の航空阻止（AI）と分類している。
194 ニューディック『ヴィジュアル大全航空機搭載兵器』172 頁によれば、CRV-7 はカナダのブリストル・エアロスペース社に開発による無誘導地上攻撃ロケット弾、この種のロケット弾では最高速度を誇った。
195 「グランビー作戦における航空作戦」、イギリス空軍、〈http://www.raf.mod.uk/history/RAFAirOperationGranby.cfm〉2015 年 11 月 10 日アクセス
196 Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War, Vol. IV,* p. 378; Cohen, *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, pp. 232-233. 近接航空支援（CAS）についてはアメリカ側資料では他国の CAS は全くカウントが無いが、「グランビー作戦における航空作戦」、イギリス空軍、

リカ軍以外はその機数に余裕が無かったこともあるが、友軍相撃を回避するため実施しなかったとも考えられる。

総計12機のジャギュアは、クウェートの地上目標およびペルシャ湾の艦船を目標として、600ソーティのミッションをこなした。ジャギュアは作戦間、741発のUK-1000爆弾、387発のCBU-87クラスター爆弾、608発のロケット弾、8発のBL-755クラスター爆弾を使用した[197]。一方でフランス空軍のジャギュアは、イギリス空軍の倍の展開機数があったが、作戦ソーティ数はほぼ同じであった（571ソーティ）。イギリス空軍のジャギュアは、フランス空軍と比較して1機当たりのソーティ数は約2倍であり、活発に作戦を実施した。

（キ）　スカッド狩りへの参加

多国籍軍が予想外に苦労したのが、イラクのスカッドミサイルを抑えることだった。これへの対処、いわゆるスカッド狩りへアメリカ軍航空機と共に、トーネードGR1も相当数のミッションに参加した。これらのスカッド狩りでの攻撃対象は、スカッド本体だけではなく、関連施設等も含まれた。たとえば1月23日夜から24日早朝にかけてのスカッド関連への攻撃では、トーネードGR1は、アメリカ海軍のECM機および援護戦闘機と共に、H-3基地の陸軍兵舎をスカッド関連施設として攻撃している[198]。アメリカ軍機以外でスカッド狩りに参加したのは、イギリス空軍のトーネードGR1が唯一のものであった[199]。

アメリカ側が報告書等で、その参加規模は小さい中で、イギリス空軍の行動を特筆しているのは、イギリス空軍が、湾岸戦争の連合・統合作戦において効果的能力を示すことができた唯一の同盟国であったからだった。一方で地上戦支援に関しては、限定的な兵器システムやC4I/BM（Command Control Communication Computer Intelligence system/Battle Management）という面で多くの問題を見せたのも現実であった[200]。このようにイギリス以外の多国籍軍は、空軍に関しては、アメリカが軍事的に期待できるような条件をほとんど持っていなかったのが現実であり、それ故にイギリス空軍が目立つこととなった。

また哨戒機ニムロッドは、常時、湾岸での海上哨戒飛行を実施したが、その有効性は高かったためか、アメリカ空母群との連携任務をしばしば実施した[201]。

〈http://www.raf.mod.uk/history/RAFAirOperationGranby.cfm〉2015年11月10日アクセス、ではジャギュアが日中、CASを実施したとされている。しかしアメリカではCASではなくAIでカウントされているものと推定される。たとえば2月24日のイギリス空軍の戦闘日誌を見ると、アメリカ軍と同様に地上友軍に近接した航空支援は、友軍相撃回避のためか中止していると思われる部分がある。

197 Eliot A. Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. IV (Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office, 1993), p. 65; Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, p. 341.

198 Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. II, Pt I, pp. 188-190.

199 Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. IV, pp. 275-276.

200 Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 257.

201 「湾岸戦争戦闘日誌」、イギリス空軍、〈http://www.raf.mod.uk/history/Gulf War Campaign Diary.cfm〉2015年11月10日アクセス。

イ　その他の西側空軍の活動

ヨーロッパから派遣されたイギリス、フランス、イタリア空軍は、合わせて 4,000 ソーティ以上の主要な戦闘飛行に参加した。カナダ空軍は、DCA および地上軍支援のために、制空用および地上攻撃戦闘機として CF-18 を提供した。イタリア空軍は、阻止任務のため、攻撃戦闘機を、その他の任務のため輸送機、タンカー、偵察機を展開した。またヨーロッパの航空部隊派遣隊は、イラクの攻撃を抑止するため、トルコにも派遣された。これらの部隊には、ドイツの 18 機のアルファジェットと 800 名の人員、125 名の支援隊員と偵察機を含んだ[202]。

（ア）　フランス

フランス空軍は、連合作戦の環境での運用に即座に順応した。「砂漠の嵐」作戦期間中、総計で 2,258 ソーティをこなした。これは全ての航空作戦の約 2%であり、アメリカ軍、サウジアラビア空軍、イギリス空軍に次ぐ規模だった。フランス空軍は 531 ソーティの航空阻止、172 ソーティの攻撃機護衛、340 ソーティの DCA、62 ソーティの偵察を実施した。支援任務として、62 ソーティの空中給油、855 ソーティの空輸、1 ソーティの救難などを実施した。フランス空軍は計画された飛行のうち、約 10%にあたる 222 ソーティのキャンセルがあったが、高いレベルの運用態勢を維持した。このうち整備関連の原因によってキャンセルされたのは、25 ソーティのみであった。指揮統制上の小さな問題と戦場での急速な状況変化で 73 ソーティがキャンセルされたほか、天候によっても 102 ソーティがキャンセルされた。

湾岸へ派遣されたミラージュ 2000 戦闘機は、340 ソーティの DCA、172 ソーティの OCA、総計 512 ソーティをこなした。これらのミッションには、アメリカ軍機、サウジアラビア空軍機との空中哨戒（CAP）を含み、さらに自軍のジャギュアによる攻撃作戦時のエアカバーを与えるために出撃した[203]。

作戦初日、1 月 17 日の午前中は、フランス空軍のジャギュアもクウェート領内へ攻撃を実施した[204]。この日、ジャギュアは、4 機が損傷、うち 3 機は、対空砲火（AAA）によるもので、おそらく低空攻撃であったためと推定される。これはイギリス空軍のジャギュアとは対照的であった[205]。第 2 日目、第 3 日目も前日に継続してジャギュアは、クウェート領内を攻撃した[206]。

---

[202] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 173, 376; United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 148. ドイツはこの時期、NATO 域外への派兵を禁じられていたため、トルコへは展開することができた。
[203] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 172.
[204] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. II, Pt I, p. 139.
[205] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, pp. 642-647.
[206] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. II, Pt I, pp. 149, 177.

湾岸戦争ではフランス空軍も精密誘導兵器を使用した。その場合、フランス空軍のジャギュアは、マトラ BGL 誘導キットを 1,000kg 爆弾と共に使用し、ジャギュアはアトリ照準ポッドを使用して爆弾を目標まで誘導した[207]。

湾岸派遣の全 24 機のジャギュアは、クウェートの地上目標およびペルシャ湾の艦船を目標として、571 ソーティのミッションをこなした。イギリスおよびフランスのジャギュアが参加したのは、ほとんどが航空阻止であった。ごく一部、フランス空軍のジャギュアが、OCA に緒戦と 2 月末に参加している[208]。

またフランス空軍は、約 60 発の精密誘導攻撃可能な AS-30L 空対地ミサイルをジャギュアにより使用した[209]。ミサイル発射時にはジャギュアは、レーザー誘導のため、自動追跡レーザー照射システムである照準ポッドを使用した。このポッドは、尾翼方向に取り付けられるため、航空機が、ミサイル発射後に急反転して、目標から退避しても、ポッドが目標指示を継続し、ミサイルは目標へ向かった。このミサイルはクウェートとイラク南部での堅固なシェルター等の攻撃に使用された。硬い弾頭と超音速での突入により、厚さ 2m の鉄筋コンクリートを破壊する能力があった[210]。

夜間視認システムや迅速なエアランド・バトルに必要な C4I/BM は、フランス軍も欠如していたため、アメリカ軍以外の他の多国籍軍と同様、地上作戦支援能力は不十分で、その実施は困難だった[211]。地上戦が開始されると、活発な航空阻止が多国籍軍機により実施され、アメリカ軍以外の航空機も攻撃に参加した。たとえば地上戦初日 2 月 24 日には、サルマン（As Salman）をジャギュアが攻撃した[212]。またホーナー中将は、フランス軍地上部隊指揮官からフランスの航空部隊を指定した支援要求を受けて、それを了解している[213]。

（イ）　カナダ

カナダ空軍は、総計で 1,302 ソーティをこなした。主力であった CF-18 は、961 ソーティの作戦を実施したが、多くが DCA で、693 ソーティ（CF-18 のソーティ数の 72%）、144 ソーティの OCA、48 ソーティの航空阻止を実施した。F/A-18 はデュアルロール戦闘機で、エアカバーの提供、あるいは SEAD に主たる役割を果たすことができたが、当初はエアカバーの提供に使用された。しかしイラク空軍の脅威がわずかだと判明してきたので、戦域における 18 機のカナダ空軍の CF-18 は、空中戦闘任務から攻撃任務へと変更された。DCA

---

[207] ニューディック『ヴィジュアル大全航空機搭載兵器』159 頁。
[208] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. IV, Pt I, p. 65; Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, p. 341.
[209] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 476.
[210] ニューディック『ヴィジュアル大全航空機搭載兵器』81、101 頁。
[211] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 257.
[212] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. II, Pt II, pp. 249, 252. このジャギュアの国籍は明記していないが、フランス地上軍の進撃方向にあたるところからフランス空軍機と推定される。
[213] Mark D. Mandeles, Thomas C. Hone and Sanford S. Terry, *Managing "Commnd and Control" in the Persian Gulf War* (Westport: Praeger Publishers, 1996), p. 127.

は作戦期間中、継続的に実施、OCA は航空優勢が確立された以降に、少ないながら継続実施されたが、航空阻止はおおむね「砂漠の嵐」作戦末期の地上戦開始以降のみ実施した。またカナダの B-707 は、163 ソーティをこなした。その内訳は 64 ソーティの空中給油および 99 ソーティの空輸を作戦全期間に継続的に実施、また C-130 は 124 ソーティの空輸を、さらに CC-144 も 54 ソーティの空輸を実施した[214]。

（ウ）　イタリア

イタリア空軍は派遣兵力も少ないため、多国籍軍に対して大きな貢献を果たすことはできなかった。それでも「砂漠の嵐」作戦当初より、イタリア空軍のトーネード IDS は連日、航空阻止に参加した。出撃頻度は、緒戦のミッションが最大で、1 日当たり 8 ソーティ程度（各機が 1 日 1 回出撃）であった。それ以降は、ほぼ 1 日当たり 4 ソーティと各機が 2 日に 1 度出撃する程度で、イギリス空軍と比較すると、かなり少ないものであった[215]。

第 1 日目の攻撃成果により、多国籍軍機の攻撃 2 日目の損害は、3 機に抑えられたが、その中には 1 機のイタリア空軍のトーネード IDS も含まれていた[216]。一方で、イタリア空軍初陣の攻撃は、ややみすぼらしいものだった。イタリア空軍のトーネード IDS は、1 月 17 日から 18 日にかけての夜間、イラクへの攻撃のため、攻撃航空戦力の全力である 8 機のトーネード IDS が、最初の任務のため発進した。しかし、天候を理由として、必要な空中給油を 7 機が受けることができず、1 機のみが攻撃に向かった。しかしこの 1 機も攻撃終了後の退避行動中に、イラク軍の対空砲火によって撃墜された。乗員は脱出できたが、捕虜となり、戦争終結まで解放されなかった[217]。しかしイタリアのトーネード IDS は、「砂漠の嵐」作戦直前に、湾岸へ展開したばかりであり、戦域への慣熟や訓練時間も無かった[218]。そのためこの最初の任務は、悪天候という因子が無くても非常に困難なものだったといえる。

（3）　アラブ諸国空軍の活動

多国籍軍のアラブ各国の空軍は、ヨーロッパから派遣された空軍と同じ規模で作戦を実施した。特にサウジアラビア空軍は、ヨーロッパ各国から派遣の空軍全体よりも多く戦闘任務をこなした。サウジアラビア空軍と他の南部湾岸諸国の空軍は、OCA、DCA、阻止ソーティ等の任務に戦闘機を提供した。彼らは燃料補給、空中での指揮統制、偵察、様々なユー

---

[214] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, pp. 233, 326, 353, 356, 384; Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey Summary Report*, pp. 197-198.
[215] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, pp. 344-345.
[216] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. II, Pt I, p. 154.
[217] Vincenzo Camporini, Tommaso De Zan, Alessandro Msrrone, Michele Nones and Alessandro R. Ungaro, *The Role of Italian Fighter Aircraft in Crisis Management Operations: Trends and Needs* (Roma: Edizioni Nuova Cultura, 2014), p. 34.
[218] Jim Corrigan, *Desert Storm Air War* (Lanham: Stackpole Books, 2017), p. 91.

ティリティ、空輸任務も実施し、後方および運用支援を提供した。またクウェート空軍は、クウェート地上軍が地上戦で果たすことができた以上に航空戦でより大きな役割を果たした。さらにバーレーンのような小規模空軍でさえ、戦闘で重要な役割を果たした[219]。

ア　サウジアラビア空軍の活動

（ア）　緒戦の状況

サウジアラビアのトーネード IDS（イギリスの GR1 と同様の攻撃機タイプ）も、作戦初日、OCA を 14 ソーティ実施した。しかし、1 月はそれ以外に OCA を実施していない。その後、2 月に一部 OCA を実施しているものの、それ以外は航空阻止に集中している[220]。この OCA の中では、イギリス空軍と同様に、飛行場攻撃用の JP233 も一部使用されたと考えられる[221]。

この初日の夜間から翌 2 日目未明にかけての OCA では、トーネード IDS は、イラク西部の飛行場 H2 および H3 を攻撃した。これらの目標は、既にアメリカ軍やイギリス空軍に反復攻撃を受けていた場所だった。2 日目も前進作戦拠点（Forward Operating Location : FOL）を 4 か所（Mudaysis、Wadi Al Khirt、Ghalaysan、As Salman）攻撃したが、これらの目標のうち 3 か所も、アメリカ軍またはイギリス空軍が、航空攻撃を既に実施した基地であった[222]。

一方で、午前中のアメリカ空軍によるバクダッド周辺への攻撃においては、攻撃機および ECM 機に対する援護機として、サウジアラビアの 4 機の F-15C が、アメリカ空軍の 24 機の F-15C と共に参加した[223]。

3 日目は終日、イギリス空軍のトーネード GR1 だけでなく、サウジアラビアのトーネード IDS もイラクの飛行場を攻撃した[224]。ただしイギリス空軍のトーネード GR1 が、イラク軍の主要飛行場を目標としたのに対し、サウジアラビアのトーネード IDS が目標としたのは、飛行場ではあっても FOL であり、主要飛行場と比較すれば、攻撃は容易であったと考えられ、アメリカ軍ではこれらの攻撃を OCA ではなく、航空阻止としてカウントしている[225]。しかしこの 3 日目である 1 月 19 日は、トーネード IDS にとって厄日だった。イギリス空軍と同様、サウジアラビアのトーネード IDS が、2 機失われたのである。これらの航空機は、この時期には、イラクの対空砲や赤外線地対空ミサイルの脅威が、高いと考えられ

---

219 Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 376-380.
220 Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, p. 343.
221 Ronald Stuart-Paul, *The Royal Saudi Air Force: A Legacy of His Majesty King Abdul Aziz Ibn Saud* (London: Stacey International, 2001), p. 126.
222 Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. II, Pt I, pp. 122-123, 140-141, 150.
223 *Ibid.*, p. 151.
224 *Ibid.,* p. 177.
225 Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, p. 343.

た低高度進攻を実施していた[226]。1 機は対空火砲によるもので、低高度進攻の影響が考えられるが、もう 1 機は燃料不足によるものだった[227]。

（イ） F-15C の運用

視程外における空中戦は、多国籍軍の成功のなかで特に顕著なものだった。特にアメリカ空軍とサウジアラビア空軍の F-15C は、空対空ミサイル能力やレーダーでの長距離での探知において、決定的な長所を持っていた。さらに空中警戒管制機 E-3A（AWACS）は、並外れた状況認識を友軍機に与え、多国籍軍機が友軍機を誤射する恐れなしで、イラク機の攻撃ができることを保証する能力を与えた。このような状況で、サウジアラビア空軍の F-15C は、1 月 19 日および 24 日に、イラクのミラージュ F1 を 3 機撃墜した。2 機は AIM-7（セミアクティブ・レーダーホーミング・ミサイル）、1 機は AIM-9（赤外線誘導ミサイル）によるものだった[228]。1 月 24 日の交戦に関しては、アメリカの議会報告書では、サウジアラビア空軍の F-15C が、AWACS の支援の下で、イラク軍機を冷静に撃墜したように記述されている[229]。しかし実際には、この時のサウジアラビア空軍のパイロットは、アメリカ空軍の AWACS の支援を得ていたが、イラク軍機要撃のための針路を指示されると当初、パニックとなった。そのため AWACS の管制官は、細心の注意を払ってサウジアラビア機を誘導した。この時、管制官は、サウジアラビア空軍のパイロットを落ち着かせるために、会話を続けなければならなかった。しかしイラク軍機は、空域の状況認識がほとんどできない状況で、F-15C を振り切る最低限の努力しかしなかったため、結果的には比較的容易に撃墜された。

「砂漠の嵐」作戦の航空作戦で判明したのは、サウジアラビアの戦闘機は、AWACS からの情報で行動するのにも困難を生じ、複数編隊以上の規模での作戦能力がないことであった[230]。そのため、機体の性能は極めて優れていた F-15C ではあったが、アメリカ空軍の F-15C が、DCA を主任務としつつも約 20%を OCA に充当されたのに対して、サウジアラビア空軍の F-15C は、ほぼ全力の約 95%が DCA に充当されるという対照的な状況であった[231]。

（ウ） 不十分なサウジアラビア空軍の能力

湾岸戦争でのサウジアラビア空軍は、航空阻止では 1,656 ソーティ、OCA では護衛任務

---

[226] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. II, Pt I, p. 178.
[227] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, pp. 642-643.
[228] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 403-406.
[229] United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 510.
[230] Pollack, *Arabs at War*, p. 435.
[231] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, p. 335.

を除けば 153 ソーティをこなした[232]。しかしサウジアラビア空軍が実施した航空攻撃は、不十分であり、多国籍軍全体から考えると、その戦果はわずかなものだった。たとえば第 1 夜の攻撃では、サウジアラビア空軍のトーネード IDS のミッションは、空中給油の失敗によってキャンセルとなった。またあるトーネード IDS は進路に迷い、アメリカ空軍の F-15C によって危うく撃墜されそうになった[233]。

また戦後アメリカ軍が、クウェート国境近くのイラクのサフワン（Safwan）飛行場を詳細に調査する機会があった。この飛行場は、サウジアラビア空軍に割り当てられた攻撃目標の 1 つであったが、トーネード IDS により繰り返し攻撃したにもかかわらず、ほとんど損害を与えていないことが判明した。サウジアラビア空軍のパイロットに割り当てられた攻撃目標は、アメリカ軍が選定したが、アメリカ軍の支援が得られるという状況下で、地上の軽防備の固定目標が選ばれた。サウジアラビア空軍のパイロットは、機動する目標を補足することができず、さらにイラクの地上防空網による妨害は、常にサウジアラビア空軍のパイロットにミッションを中止させたり、あるいは攻撃しても目標を外させることとなった。サウジアラビア人は、自らの作戦を計画したり、統制することができなかった。さらに飛行隊レベルより大規模編隊で作戦することもできなかった。また敵目標を攻撃する方法に関する作戦コンセプトや現実的な戦略も欠如していた。

さらに、サウジアラビア空軍は、偵察の回数も少なく、偵察結果の価値もそれほどなかった。そのため戦争中に、118 ソーティしか偵察を求められなかった。偵察機として RF-5 を保有していたものの、それほど役には立たなかった。そのためサウジアラビア空軍は、自分たちの攻撃任務に必要な偵察や情報は、アメリカ軍に頼らざるを得なかったのである[234]。

アメリカ軍以外で、最も大規模に参戦したサウジアラビア空軍（攻撃機としてトーネード IDS が 24 機、F-5 が 87 機、制空戦闘機として 69 機の F-15C、防空戦闘機としてトーネード ADV が 24 機[235]）も効果的な C4I/BM は欠如し、さらに陸軍支援の訓練は欠如していた[236]。そのためサウジアラビア空軍による対地支援実施は、困難な状況だった。

「砂漠の嵐」作戦期間のトーネード IDS の航空阻止が 590 ソーティ、OCA が 75 ソーティであるのに対し、イギリス空軍トーネード GR1 は、OCA のソーティ数が航空阻止を上回っている[237]。サウジアラビアのトーネード IDS は、圧倒的に航空阻止の任務が多かった。OCA も 1 日目の状況はアメリカ軍、イギリス軍が攻撃を複数回実施した後であり、イラク軍の抵抗が、弱体化したと予想される場面で攻撃を実施している。この事実は、サウジアラビア空軍とイギリス空軍の練度差を示したものといえよう。

---

[232] *Ibid.*, p. 232.
[233] Pollack, *Arabs at War*, pp. 435-436.
[234] *Ibid.*, pp. 435-436.
[235] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey Summary Report*, pp. 197, 199.
[236] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 257.
[237] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, pp. 343, 345.

イ　その他のアラブ諸国空軍の活動

（ア）　クウェート

クウェート空軍は祖国解放のため、より有効な活動を実施した。200 名足らずではあったが、訓練されたクウェート空軍の兵員たちは、「砂漠の嵐」作戦に当初から参加した。しかしクウェート空軍の作戦可能機数は、15 機のミラージュ F1 と 19 機の A-4 のみであった。この機体の支援には、フランス空軍とアメリカの契約した民間人が対応した。またクウェート空軍は、12 機の武装ヘリコプターも保有していた。

クウェート空軍は、「砂漠の嵐」作戦において 568 ソーティの阻止、212 ソーティの戦場阻止を含んだ総計 780 ソーティをこなした。これらの多くは、A-4 が実施し、全部で約 650 ソーティ、1 日平均 18～20 ソーティをこなした。ミラージュ F1 は、残りの 130 ソーティ、1 日に 4～10 ソーティをこなした。作戦稼働率は、毎日 80～85%が平均であった。作戦間、クウェート機は、イラク軍の火砲、歩兵、対空陣地へ攻撃を実施した。パイロットの技量は総じて低いながらも、何人かは高い技量を持っていた。しかしクウェート空軍は、ミッションを離陸前にキャンセルする割合が比較的多かった。実際に実施した 780 ソーティに対して、地上でキャンセルされたソーティ数は、203 にものぼった。そのうち 50 ソーティは整備に起因し、123 ソーティは天候が原因だった[238]。損失としては、1 日目の夕方の作戦で A-4 が、クウェート市南方 25NM の地点で、レーダー誘導の SAM によって失われた[239]。クウェート空軍は機数こそ少なかったが、他国と比較しても攻撃出撃頻度は高かった。一方でミラージュ F1 のソーティ数が A-4 と比較して、やや少ないのは、イラク軍も同種の機体を保有していたためと考えられる。

地上戦が開始されると、活発な航空阻止が多国籍軍機により実施され、クウェート機も参加した。たとえば地上戦初日 2 月 24 日には、クウェート空軍の A-4 は、アラブ北部合同軍地域前方のイラク軍砲兵陣地を攻撃した[240]。

（イ）　バーレーンおよび UAE

バーレーン空軍から参戦した 12 機の F-16 もデュアルロール戦闘機だったが、イラク空軍戦闘機の作戦活動が不活発であったため、F-16 を攻撃任務に使用できた[241]。その結果、F-16 は 2 月 10 日までは、DCA のみ割り当てられていたが、それ以降は、1 日当たり 2 ソ

---

[238] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 205-207.
[239] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. II, Pt I; Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, pp. 642-643. 田村俊夫「戦場のスカイホークたち」湯沢豊編『世界の傑作機 No.150』（文林堂、2012 年）123 頁によれば、撃墜されたのは、第 9 飛行隊隊長ムハマド・スルタン・ムバラク中佐。
[240] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. II, Pt II, pp. 249, 252.
[241] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 402.

ーティ程度ではあったが、OCA も並行して割り当てられるようになった[242]。また 20 機足らずの F-5 は、緒戦の数日を除いて、攻撃機として毎日概ね 4 ソーティ前後の航空阻止に従事した[243]。

また UAE 空軍も 20 機あまりのミラージュ 2000 が、主として航空阻止に参加したが、全て 2 月中旬以降であり、しかもほとんどが 1 日 4 ソーティ程度と、出撃頻度は少なかった[244]。

（ウ） 支援活動

「砂漠の盾」作戦の項で述べたように、サウジアラビアを主体とする湾岸諸国は、インフラ等で、多国籍軍機の展開・戦力発揮を迅速で効果的なものとした。また航空部隊に対する後方支援として有効であったのは、ジェット燃料の補給であった。アメリカ空軍だけでも戦争のピーク時には 1 日に 1,500 万ガロンの燃料を使用した。サウジアラビア、オマーン、UAE は約 20 億ドル相当の航空燃料についてその全てを供給したのである[245]。

（４） 航空作戦の各種側面における状況

ア 精密誘導兵器の使用

精密誘導兵器を使用可能な航空機は、レーザー標定機能が必要だが、その標定機能を持つ航空機としては、イギリス空軍のバッカニア、フランス空軍のジャギュア、サウジアラビア空軍の F-5[246]、何機かのイギリス空軍のトーネード GR1（TIALD 搭載機）があった。一方でアメリカ軍以外でレーザー誘導爆弾を使用できない機体として、A-4、イギリスのジュギュア、トーネード GR1（ペアで目標標定用バッカニアが同行しない場合および TIALD 非搭載機）があった[247]。

地上攻撃目標として、道路や鉄道の橋梁は、「砂漠の嵐」作戦全期間にわたってリストアップされ、航空攻撃が実施された。橋梁攻撃は、アメリカ海空軍機の他には、イギリス空軍トーネード GR1 のみが参加、その割合は橋梁攻撃全体の約 15%に及んだ。特に精密誘導兵

---

[242] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, pp. 337-338.
[243] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey Summary Report*, p. 190; Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, p. 340.
[244] ハリオン『現代の航空戦』198-199 頁；Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, p. 342.
[245] Patricia A. Weitsman, *Waging War* (Stanford: Stanford Univercity Press, 2014), p. 59.「砂漠の盾」作戦の部分で既述したように、サウジアラビアはジェット燃料の精製設備がなかったため、ここで述べているジェット燃料の補給は、他国からのジェット燃料買い付けを実施し、多国籍軍へ供給したものと推定される。
[246] ただし、サウジアラビア空軍の F-5 による精密誘導兵器による攻撃実施の有無は、各種文献では確認できなかった。
[247] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. II, Pt II, p. 97.

器を使用した攻撃に限れば、トーネードの割合は、全体の概ね 30%を占めた。特に 2 月初旬から中旬にかけては、橋梁攻撃を実施した機種は、トーネード GR1 が突出したものとなった。橋梁攻撃により、バクダッドから南部への後方連絡線にある橋梁は、多大な損害を被った[248]。

イギリス空軍のトーネード GR1 は、「砂漠の嵐」作戦開始から 2 週間後に、誘導爆弾の使用を開始したが、戦争の最後の 2 週間は、誘導爆弾のみ使用した。しかしその際、トーネード GR1 の使用した爆弾は、1,000lb のみであり、アメリカ軍の 2,000lb 爆弾のようにイラクの堅固な掩蔽壕を貫通することはできなかった[249]。

またアメリカ軍以外では多国籍軍は、2 か国のみが、精密誘導ミサイルでの航空攻撃を実施した。イギリス空軍（トーネード GR1）は、誘導爆弾を総計で 1,126 発投下した他に、112 発の空中発射対レーダーミサイル（ALARM）を使用、フランスも AS-30L 空対地ミサイルを使用した[250]。ALARM はイラク領内での対レーダー作戦でアメリカ軍の HARM（High-Speed Anti-Radiation Missile）による攻撃を支援した。HARM は低空飛翔して目標へ突入したが、ALARM は発射後急上昇し、高速でレーダー波に垂直で突っ込んだ。このミサイルはトーネード GR1 に最大 7 発が搭載可能であった[251]。イラクのレーダーオペレーターは、トーネード GR1 の平通信による ALARM 発射報告を傍受すると、レーダーを停止させたという逸話があり、このミサイルの有効性の高さは明白だった[252]。イギリス空軍は、ALARM 搭載用に改修した 6 機のトーネード GR1 を使用した。このミサイルは、湾岸危機発生時には開発途上であり、高い自律性[253]を持つよう設計され、「砂漠の嵐」作戦直前に納入された。イギリス空軍は、アメリカ軍のように攻撃機を支援する様々な特殊任務機を欠いていたからである[254]。一方でフランス軍の空対地ミサイルは、クウェート戦域で使用されたと推定されるが、その成果に関しては不明である。

イ　C4I/BM システムに関する問題

多国籍軍には、戦闘準備時間（「砂漠の盾」作戦の期間）が、比較的長かったにもかかわらず、アメリカ以外の空軍は、航空作戦を MAP/ATO（Master Attack Plan/Air Tasking Order）によって対処するのは困難であった。ATO の変更に迅速に対応できないため、しばしばミッションをキャンセルしなければならなかった。多くの同盟国の航空部隊は、彼らがアメリカの戦術やアメリカの C4I/BM システムに順応していなかったため、限定されたミ

---

[248] *Ibid.*, pp. 174-183.
[249] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. II, Pt I, p. 219.
[250] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 476.
[251] ニューディック『ヴィジュアル大全航空機搭載兵器』92-93、95、99-100 頁。
[252] 同上、95、99-100 頁。
[253] 同上、92-93、95 頁によれば、このミサイルの特徴としては滞空モードを持っている点がある。敵の目標レーダーが電波発射を止めた場合、パラシュートで滞空し、レーダー電波が再発射されるとパラシュートを切り離して降下する。
[254] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 413.

ッションの中で運用された。アメリカ軍を中心とした航空部隊の連合作戦では、アメリカとそれ以外の軍の双方を統制する十分な相互運用性（インターオペラビリティ）のあるシステムが必要となることが、湾岸戦争では明白となった[255]。

ウ　情報

湾岸戦争において多国籍軍に情報を与えたのはアメリカだけではなかった。イギリス空軍は、6 機のトーネード GR1A 偵察機を多国籍軍の統合情報や偵察活動の一部として任務をこなすのに使用した。既述したように、さして成果はなかったかもしれないが、サウジアラビア空軍の偵察機は、通常の偵察任務を支援し、10機のサウジアラビア空軍のRF-5Eは、国境地域の偵察を実施した。イギリスおよびフランスのジャギュアも偵察任務を実施した。移動目標指示レーダー装備のフランスのピューマヘリコプターは、有益な戦術データを提供した[256]。実際には湾岸戦争において、アメリカ空軍は、固定翼の戦術偵察機が不足していたため[257]、アメリカ軍以外の偵察機の協力も必要だった。

しかし、全ての航空部隊の 9 割は、アメリカの秘匿通信とその普及能力に依存し、多国籍軍間の調整、連絡、情報支援と総合化（インテグレーション）においてもアラビア語が話せるアメリカ軍の情報将校に依存した[258]。このように情報関連は、一部のアメリカ軍以外の航空機が、偵察活動に参加することはあったが、通信保全を含めてアメリカに完全に依存した形態であった。

情報収集衛星に関する活動も、アメリカがほぼ独占していた。これらの衛星は、商業衛星と異なり、解像度も高かった。また商業衛星の中でも重要であったフランスのスポット画像、ロシアの衛星システムは、多国籍軍にデータを与え、一方でイラクにはデータを与えなかった[259]。

エ　飛行場破壊用兵器の効果と問題

多数の航空機が、イラク軍航空基地を攻撃したが、イギリス空軍のトーネード GR1 は、航空作戦の初日、多くの理由で滑走路制圧という重要な任務を付与された。アメリカ軍は、滑走路制圧を二次的な優先度の任務と考え、滑走路破壊用には、軽量のフランス製デュラン

---

[255] *Ibid.*, p. 253.
[256] *Ibid.*, p. 281. 原著ではサウジアラビアの偵察機を RF-5C と標記しているが、『ミリタリーバランス 1990-91』等から RF-5E の誤記と思われる。
[257] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 312. アメリカ空軍は固定翼偵察機に関しては、24 機の RF-4C、5 機の TR-1、6 機の U-2 を保有していたにすぎなかった。しかも「砂漠の嵐」作戦開始までに 12 機の RF-4C は戦域に到着しておらず、6 機はトルコにいる状況であり、2 月には戦域に到着するもクウェート戦域をカバーするには不足していた。
[258] *Ibid.*, p. 282.
[259] *Ibid.*, p. 284.

ダル爆弾[260]を装備するのみであった。イラク航空基地攻撃にトーネード GR1 を使用することによって、そのミッション数だけアメリカ空軍は、数量が限定的な F-117 や F-111 を精密誘導爆弾使用による他目標への攻撃を任務付与することが可能となった。一方でイギリス空軍のトーネード GR1 部隊は、JP233 という装備もあり、従前より滑走路破壊用の訓練を実施していた。ただし、この滑走路破壊用爆弾である JP233 は高価であるため、湾岸戦争前までに、大規模な実弾訓練を実施することを困難にしていた。JP233 は、滑走路に穴をあける機能とその修復を遅らせるための地雷をまく機能を合わせもち、元来、イラク軍より小規模な東ヨーロッパの飛行場攻撃を想定していた。

トーネード GR1 は、アメリカ海空軍機に支援された攻撃パッケージにより、飛行場攻撃任務についた。彼らは 1 月 17 日に、21 か所のイラク飛行場を攻撃、106 発の JP233 を投弾し、飛行場に損害を与えることに成功した。大部分のイラク航空基地は、バグダッド周辺あるいはクウェート戦域北方のイラク奥地に所在した。主要な施設は、全て掩蔽され、どの基地も 2～3 本の長い主滑走路と多くの分散した仮設滑走路があった。多国籍軍は、破壊されていない滑走路長が、3,000ft 残っていないという基準から飛行場の機能を封殺できたかどうかを判定するしかなかった。トーネード GR1 は、JP233 投弾のため、約 180ft の低高度飛行を実施しなければならなかった。このような低高度でも緩やかな横風（クロスウインド）があれば、子爆弾のいくつかは、風に流された。あまりにも多くの攻撃目標があったが、攻撃ソーティ数は限定されていた。攻撃によって発生した滑走路の穴は、十分に深いものではなく、散布地雷は、修理に大きな支障を与えるほどではなかった。またイラクの対空火砲要員と短射程 SAM 要員は、電子戦や HARM によっても完全には制圧できなかった。そしてイラク軍は、最初の航空機の攻撃に気付けば、後続の航空機に対しては多数の対空砲を指向することができた。その後すぐにトーネード GR1 は、滑走路から航空機シェルターへの攻撃へシフトするよう計画された。1 月 23 日までに多国籍軍は、イラクの航空活動を制圧した。そして滑走路攻撃は、イラク航空機や重要施設へ十分な損害を与えることのない低価値のミッションと評価された。航空機は掩蔽されていたからであった[261]。

またイタリアのトーネード IDS は、対装甲あるいは対滑走路用弾薬を搭載できる MW-1 と呼ばれる子爆弾投弾システムを使っていた。このシステムは、4,536 発までの装甲貫徹小爆弾、あるいは対戦車地雷、対装甲車地雷、滑走路散布用地雷の混合したものを搭載できた。しかし、この弾薬使用の効果に関する信頼できるデータは、本章の執筆時点で見当たらない。

ロンドンの統合司令部に所在したイギリス統合軍指揮官パトリック・ハイン（Patrick Hine）空軍大将は、滑走路破壊任務を「滑走路に穴を開け続けても 24 時間以内に復旧され、更なる航空機の損失のリスクを負い続ける」と述べた[262]。またイギリス中東軍司令官ドラビリエール（Peter de la Billiere）中将は、「4 機あるいは 8 機の編隊で、広大な目標に対して

---

[260] ニューディック『ヴィジュアル大全航空機搭載兵器』146-147 頁。対滑走路用爆弾。無誘導だがパラシュートで落下後、固形燃料モーターが着火し、強化コンクリートに深く潜り込み爆発する。
[261] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 418-419.
[262] *Ibid.*, p. 419.

攻撃するのが普通になってしまった。今や、低高度への集中した防空網に直面するような戦術は、問題を引き起こし、事態は予測不可能である」と述べた[263]。そしてアメリカおよびフランスの航空機は、滑走路制圧任務ではさらなる問題を経験したのはほぼ確実であった。彼らは滑走路制圧に、フランス製デュランダル爆弾を使用するからである。この爆弾も低高度で投下しなければならない。そして JP233 や MW-1 より効果が少なかった[264]。

しかしイギリス空軍の経験を確固とした教訓にするのは、注意が必要である。多国籍軍は最初の数日で、低高度ミッションをやめる余裕があった。もはや、より高い高度で在空しても、重大な脅威に直面せず、そして飛行場制圧ミッションは既にその目的をほとんど達成し、攻撃目標もイラクの航空機シェルターへ移行していたからだった。中東イギリス空軍司令官ウイリアム・ラッテン空軍少将は、その状況を「完全に飛行場を封殺するために、飛行場の規模や形状を調べる必要があり、それからイラクの固定翼機が使用不能にするのにどのくらいの数の JP233 が必要か計算する。実際に多くのイラク飛行場は大規模だった。我々は当初からトーネードにとって目標が多すぎる飛行場攻撃の要求は、実際に過大と知っていた。それで、当初の航空作戦計画を策定していた CENTAF との協議で、我々は飛行場攻撃にはトーネード GR1 と JP233 の搭載、加えて B-52、A-6、F-111 などの航空機もイラク空軍の攻撃に使用するよう努めるのが良いであろうということに合意していた」と述べている。

さらに彼は「我々がその結論に至ったのは、開戦前の観察で、イラクは飛行場が大規模だが、航空機数が多くても航空活動は活発でなく、イラク軍の訓練状況を考慮すれば、イラク空軍は重大な脅威にならないとのイラク空軍の能力認識を共有したからだった。イラク空軍は実際、飛ぼうとはせず、飛んだときも多国籍空軍機と交戦しなかった。彼らは全くこけおどしだった」と述べるなど、イラク空軍に対する脅威認識は低かった。

しかし、他の戦争に、湾岸戦争の滑走路制圧の教訓が、反映できるか明らかではない。ほとんどの国は、イラクのような大規模な飛行場は保有せず、大規模な隠ぺいもせず、そして多くの国は、保有航空機のシェルターも用意できないからである[265]。

オ　シェルター内航空機への精密攻撃とレーダー爆撃等の問題

「砂漠の嵐」作戦開始のかなり前に、イラクは多国籍軍の航空部隊と交戦しないことを選択するだろうことは明らかだった。フセイン大統領は 1 月 12 日に、イラクはシェルターがあると述べ、さらに多国籍軍の空襲開始後にも「安全であり、戦闘準備はできている」とも述べた[266]。また「砂漠の嵐」作戦開始前にフセイン大統領は、クウェートでのイラク軍司令

---

[263] Peter de la Billiere, *Storm Command: A Personal Account of the Gulf War* (Glasgow: HarperCollins, 1992), p. 234.
[264] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 420.
[265] *Ibid.*, pp. 420-421.
[266] *Ibid.*, p. 421.

官たちとの秘密会議において、多国籍軍の空襲下では「地下でじっとしていれば、空爆は無駄に終わり、地上戦になれば話が違う」とも述べている[267]。多国籍軍のエアパワーに対してイラク空軍は、耐弾シェルターによってその航空攻撃を乗り切ろうとする一方で、多国籍軍を困らせるために、限定的な防空作戦しか実施しないことを決定したようであった。このような考えは、イラン・イラク戦争の経験によるものであり、イラク空軍は敵の重大な軍事行動の時のみ対処し、それ以外は戦力を温存するというものであった[268]。しかし、いくらアメリカ製の新鋭機を保有していたとはいえ、革命で極めて脆弱となった 1980 年代のイラン空軍と多国籍軍とでは、その航空戦力差は全くの桁違いであった。

早くも 1 月 22～23 日の夜間には、イラクのシェルターの弱点が明白となった。有効なシェルター攻撃により 1 月 24 日に、イラク機は、イランへ逃走を開始した。その直後、イギリス空軍のトーネード GR1 とバッカニアが合流し、トーネード GR1 もシェルター攻撃にレーザー誘導爆弾を使用した。さらに最初の TIALD 装備部隊が、2 月 10 日に戦域に到着すると、2 月 13 日以降トーネード GR1 は、航空機シェルターに攻撃を集中した。

この TIALD 使用による攻撃は、トーネード GR1 の作戦効果改善に大きな利益を与えた。イギリス空軍の精密誘導爆撃の約 28%がシェルター攻撃に向けられたが、トーネード GR1 は、イラクの後方連絡線での鍵となる目標の攻撃や精密誘導爆撃においても重要な役割を果たした。一方で爆撃損害評価は、通常攻撃における 1 万フィート以上でのレーダー爆撃や自由落下爆撃による攻撃任務の効果がほとんどないことを示した[269]。

イギリス軍指揮官ドラビリエールはその状況を以下のように述べている。「次の週、トーネード GR1 の乗員は夜間に、1,000lb 自由落下爆弾投弾にレーダーを使用し、全て中高度から（約 2 万フィート）、レーダーサイト、石油施設、弾薬庫を含む様々な目標に対しての攻撃任務が付与されていた。しかし、その攻撃に関して何日かの間でも的確な損害評価を得るのは不可能だった。なぜなら分厚い雲により、衛星が写真画像を撮影することを困難にしたからだった。損害評価が可能となった時、我々はレーダー爆撃が効果が無かったことを確認している。これは驚くようなことではなかった。トーネードの兵器システムは、低高度での投弾を主として開発されたからだった[270]」

F-117、F-111F、トーネード GR1 とバッカニアの組み合わせは、搭載兵器もあいまって多国籍軍の重要な攻撃機種となった。これらは、総計 71 か所の飛行場攻撃のために限定された数量しか提供できなかった。戦闘停止までに多国籍軍は、イラクの 41 か所の飛行場とクウェートの 3 か所の飛行場に損害を与えた。しかしシェルター破壊は、敵空軍を迅速に処理できる手段ではなく、緩やかな消耗戦だった。実際、多国籍軍は停戦時、まだシェルターを破壊し続けていた[271]。

---

[267] コバーン『灰の中から』21 頁。
[268] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 421.
[269] *Ibid.*, pp. 421-424.
[270] de la Billiere, *Storm Command*, pp. 231-232.
[271] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 424-425.

カ　電子戦のインパクト

電子戦は重要だったが、イラク側にはほとんど対抗措置がない状況だった。アメリカ海空軍が、その任務のほとんどを背負った。アメリカ軍機以外の特殊電子戦機は、固定翼機は、ペルシャ湾で使用されたイギリス空軍のニムロッド哨戒機のみであり、その他に特殊電子戦活動に従事していた機体として、フランスの DC-8、EC-160 各 1 機、2 機の改良 SA-330 ピューマヘリがあったが、活動の細部は不明である。対レーダーミサイルを使用した F-4G ワイルドウィーゼル、トーネード GR1 等による大規模なイラクの対空センサーや指揮統制施設への攻撃に関しては、電子戦機が随伴することが不可欠であった。攻撃的な電子戦器材をアメリカ軍以外は、保有していなかったが、イギリス、フランス、サウジアラビアの多くの航空機では、自己防御用電子戦器材が搭載された。イギリスのトーネード GR1 は、イギリスのマルコーニ社製のスカイシャドウと呼ばれるジャミング・欺瞞ポッド、レーダー警戒・追尾レシーバー、チャフ・フレアディスペンサーを搭載した。しかしイギリス空軍の防空型トーネード F3 は、レーダー警戒装置を持ってはいたが、湾岸戦争前に使い捨てのチャフ・フレアディスペンサーは装備していなかった。一方、サウジアラビアの同機種（トーネード ADV）には装備されていた。この相違は、平時に第一線の戦闘部隊に十分な予算をかけられないリスクを示したものであった[272]。しかし湾岸危機発生後、トーネード F3 にもチャフおよびフレアのディスペンサーが装備された[273]。また ESM（電子戦支援活動）では、アメリカ軍以外はイギリス空軍のみが参加した[274]。

一方でイギリスのジャギュアは、適切なジャミングポッドとチャフ・フレアディスペンサーを装備していたが、有効なレーダー警戒装置を欠いていた。さらにイギリスのバッカニア、チヌークにも有効なレーダー警戒装置が欠けていた。そのため、より有効な新タイプのレーダー警戒装置が、湾岸へ展開している部隊へ急いで供給しなければならなかった[275]。戦争が始まるとイギリスのトーネードとジャギュアは、レーダー吸収材を使用する改修を要求した。その吸収材は既に開発されていたが、平時から戦時対応への間でも全ての機体には普及していなかった。これらの問題は、戦時態勢への移行には全ての面で、十分な資金が必要なことを示している。同時にイギリス空軍のパイロットは、平時に様々な兵器システムの問題を恒常的に無視していたので、有事になって電子戦アビオニクスの問題が表面化することとなった。このことは、平時における十分な戦闘態勢保持の必要性を再び明示した。イギリス軍は予算不足により、戦時に必要な装備の取得や改修については、認識をしつつもおざなりになっていた[276]。

---

[272] *Ibid.*, pp. 425-426.
[273] House of Commons, *Defense Committee Fifth Report, Implementation of Lessons Learned from Operation Granby* (London: HMSO, May 25, 1994), pp. xxi-xxii.
[274] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern, War* Vol. IV, p. 246.
[275] House of Commons, *Defense Committee Fifth Report,* pp. xxi-xxii.
[276] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 147, 426.

キ　精密、非精密攻撃の併用

湾岸戦争ではマスコミが盛んに取り上げたこともあって、精密誘導兵器の役割に大きな注目が集まったが、戦後アメリカ空軍は、戦域展開航空機のうち、約 200 機のみが精密誘導兵器による攻撃が可能であり、全ての使用弾薬の 7%のみが精密誘導兵器であったと結論づけており[277]、精密誘導兵器による攻撃の効果は高いが、実際にはごく一部の航空機による攻撃にすぎなかった。

多国籍軍機は、異なる新旧の機種がレーザー誘導爆弾を搭載した。しかし、より新型の航空機でもレーザー誘導爆弾を搭載できなかった。たとえばレーザー誘導爆弾を誘導できない航空機は F-16、F/A-18、B-52、A-10、AV-8B、A-7、F-111E、A-4、イギリス空軍のジャギュア、多くのトーネード GR1（バッカニアとのペアだと可能、後日単独でも TIALD を搭載した機体だと単独攻撃可能）を含んだ。

レーザー誘導爆弾を使用しない場合、多国籍軍はレーダー爆撃を実施することがあったが、問題に直面した。既述したようにアメリカ軍機以外では、トーネードがレーダー爆撃機能を持っていたが、レーダー爆撃の精度は低かった（赤外線使用よりも低い）[278]。多国籍軍は、異なる航空機の混在によってこれらの問題のいくつかを埋め合わせる戦術的、技術的方法を見つけた。その結果、多国籍軍は異なるタイプの航空機で相互の弱点を相殺し、補う任務を考慮した攻撃パッケージを作った[279]。

ク　地上戦への航空支援

多国籍軍は近接航空支援能力向上のため、地上戦直前に、航空攻撃戦術のさらなる調整を実施した。それは多国籍軍の地上軍が、イラクの防御ラインを突破する直前、イラク地上軍に大規模航空攻撃を実施するもので、多国籍軍地上軍を継続して支援し、戦闘停止までクウェート戦域（KTO）後方エリアのイラク地上軍への航空攻撃を継続した。

多国籍軍地上軍には、アメリカ空軍、アメリカ海軍、アメリカ海兵隊の FAC（前線航空統制官）と空海軍火力支援チームが配置された。FAC は地上軍の攻撃局面では、アメリカ以外の主要な地上戦闘部隊の全てに配置され、戦術航空管制チームはアラブ東部合同軍とアラブ北部合同軍に配置された[280]。

しかし既述したように、アメリカ軍以外は近接航空支援を実施していない。地上戦期間中の近接航空支援および航空阻止を含めた地上軍支援の航空攻撃は、アメリカ軍以外は 8%にすぎない。地上戦期間中の航空阻止に関しては、アメリカ軍以外ではサウジアラビア空軍が

---

[277] *Ibid.*, pp. 447-448.
[278] *Ibid.*, p. 448. ただし、アメリカ空軍の F-16 や A-10 は、ニューディック『ヴィジュアル大全航空機搭載兵器』98 頁によれば、レーザー誘導以外のマヴェリックミサイルによる精密誘導弾攻撃を多数実施している。
[279] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 449.
[280] *Ibid.*, p. 517.

最も多く、アメリカ軍以外の航空阻止の 40%以上を占めており、F-5 およびトーネード IDS が参加している。しかしイギリスは、地上戦開始前後にジャギュアが、阻止攻撃に参加したものの、トーネード GR1 は阻止攻撃には参加せず、この期間、イラクの飛行場を攻撃する OCA を実施した（トーネード GR1 による OCA は作戦初期には実施していたが、それ以降 2 月中旬までは実施されていなかった）[281]。

地上戦開始以降、サウジアラビアの F-5、UAE のミラージュ M-2000、クウェートのミラージュ F1 はイラクの砲兵や他のイラク地上軍を攻撃した。イタリアのトーネード IDS、フランスのジャギュア、ミラージュ F1 はイラク軍部隊、機甲部隊、砲兵を攻撃した。しかし多国籍軍は、バスラ地域でのイラク地上軍への大規模攻撃は実施しないことを決断した。これは戦争の最後の段階で後方地域への阻止のインパクトを限定的なものにした[282]。

ケ　空中給油および航空輸送

アメリカ軍以外の空中給油機としては、フランスが 6 機の KC-135、イギリスは VC-10、ビクター、トライスターの 3 機種で計 15 機、サウジアラビアは KE-3 および KC-130 が計 12 機、カナダは 3 機の B-707 が運用された。アメリカ軍機以外の空中給油機は、主として自国機の空中給油を実施したが、しばしば他国の空軍機にも実施した[283]。イギリスの給油機を例にとれば、時には、イギリス軍機だけでなく F-14 や EA-6B のようなアメリカ海軍機を含む航空機にも空中給油を実施した[284]。イギリス空軍が派遣した航空機による空中給油は、総計 711 ソーティであった。アメリカ空軍の 11,024 ソーティと比較すると非常に少ないが、アメリカ以外では第 2 位のソーティ数で、第 3 位のサウジアラビアと第 4 位のフランスの空中給油ソーティ数の合計とほぼ同じであった[285]。

「砂漠の嵐」作戦間、多国籍軍における空輸は、約 7 割をアメリカ空軍に依存した。そのほかはサウジアラビア、イギリス、フランス、カナダ、イタリア、UAE が担った[286]。また地上作戦前には、アメリカ第 18 空挺軍団および第 7 軍団に対して当初の展開地から西方へ戦術航空輸送を実施した。この空輸作戦には多数の C-130 輸送機が使用されたが、アメリカ空軍のみならず、アメリカ海軍、海兵隊の他、イギリス空軍そして韓国の C-130 も戦域内輸送に使用された[287]。

---

[281] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 519-523; 「湾岸戦争戦闘日誌」、イギリス空軍、〈http://www.raf.mod.uk/history/Gulf War Campaign Diary.cfm〉2015 年 11 月 10 日アクセス。

[282] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 525-526. この時期、バスラ地域での大規模攻撃を実施しなかったのは、バスラ西側は小規模な町が密集していたことや、イランとの国境に近接しているため爆撃に制限がかけられたという背景もあった（Cohen, *Gulf War Air Power Survey,* Vol. II, Pt I, p. 256）。

[283] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey Summary Report* , p. 190.

[284] Christopher Chant, *Air War in the Gulf 1991* (Oxford: Osprey Publishing Ltd, 2001), p. 69.

[285] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. V, Pt I, pp. 232-233.

[286] *Ibid.*

[287] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey,* Vol. II, Pt I, pp. 264-265.

（5）　航空作戦への寄与

「砂漠の嵐」作戦における航空作戦では、アメリカ軍機以外の各国の航空機によるソーティ数は、約 13%にすぎなかった。また OCA のような積極的、かつリスクの高い航空作戦は、ほとんどがアメリカ軍に依存した。湾岸戦争時は中佐で航空作戦計画策定部署の主担当だったデプチュラ（David A. Deptula）退役アメリカ空軍中将は、アメリカ軍以外の航空部隊の参加によるメリットは、無形なものとして、多くの国の団結を示したことであり、一方で有形なものとして、イギリス空軍の JP233 を使用した航空基地攻撃の航空作戦への貢献を肯定的に言及している[288]。航空戦力では、機体やパイロットの練度といった質的優位が、作戦行動に反映されることが常であり、積極的な攻撃作戦にアメリカ軍と共に参加できたのはイギリス空軍の一部だけであった。それはトーネード GR1 の損失からも分かるように、リスクを伴う作戦行動であったが、それゆえにアメリカ側から貢献度を明確に認められたといえよう。その他の空軍の参戦は、象徴的なものであり、後方の作戦基盤を盤石に守るような任務（主として DCA）には多く参加したが、脆弱なイラク空軍の実力から考えれば交戦の可能性は極めて低かったのである。

しかしアメリカ側から評価されたイギリス軍の作戦初期の飛行場攻撃は、イラク空軍反撃の可能性の有無を考慮すれば、戦争への効果としては少なく、当初から航空阻止に全力で指向した方がより有効であったように思われる。

3　「砂漠の嵐」作戦――地上戦

本節では主として「砂漠の嵐」作戦時におけるアメリカ軍以外の多国籍軍の地上戦の状況について述べてゆく。全体の戦況推移図等は第 2 章を参照されたい。

（1）　カフジの戦い――本格的地上戦前の前哨戦

ア　イラク軍の越境

多国籍軍がイラクを圧倒していた航空作戦が実施されている中で、思いもかけず、イラク陸軍がサウジアラビアへ越境し、カフジ（al-Khafji）を占領した。イラクの目的は、この戦いを長引かせ、アメリカに多くの死傷者を出させることで、アメリカの世論を動かし、勝利を収めることにあった。フセイン大統領は地上作戦に関しては、イラクに有利に働くと考えていた。このような考えは、1983 年にレバノンからアメリカ軍が完全撤退した事実を背景としていた。この時は、ベイルートのアメリカ大使館およびアメリカ軍兵舎の爆破で多くの

[288] デプチュラ退役アメリカ空軍中将へのインタビュー（2017 年 2 月 27 日実施）。

アメリカ人が死傷したことが撤退の引き金となった[289]。またカフジ侵攻は、シュワルツコフらにとって、軍事的常識を無視したものであったが、フセイン大統領にとっては、自らの指導力を誇示する機会であり、フセイン大統領の戦略的思想に合致するものでもあった。そのため、このカフジの戦いは当初より、イラクにとっては戦略的、作戦的、精神的勝利とみなされた[290]。

1991 年 1 月 29 日の夜間、イラク軍第 5 機械化師団所属の大隊規模の部隊による複数個所への攻撃が、カフジ方面を含め開始された。これらのうち 3 か所の攻撃は、アメリカ海兵隊の区域で実施されたが、イラク側は大損害を受け後退した[291]。同時に出撃したミサイル艇などイラク海軍艦艇は、イギリスのリンクス・ヘリコプターの攻撃にさらされ、多数のミサイルが命中した。残存の艦艇もその後のアメリカ海軍機の攻撃に直面してイランへ遁走した[292]。

4 か所目の攻撃は、1 個戦車中隊で増強されたイラク第 5 機械化師団の第 15 機械化旅団からの 1 個機械化大隊によるものであったが、この部隊はカフジ方向へ攻撃を実施した。このイラク軍は南下し、カフジ北方でサウジアラビアの警戒部隊と接触した。警戒部隊は非常に短期間の抵抗後、後退した。この地域で警備していたのは、サウジアラビア国家警備隊の第 2 キング・アジズ機械化旅団の第 5 機械化大隊であった。この部隊は、アメリカ海兵隊からのイラク軍攻撃の情報を得ると、カフジ南方へ退却した。またカフジ北方の海岸部にはサウジアラビアの海兵隊 1 個大隊があったが、これも後方 6km のミシャブ（al-Mishab）へと後退した。このようにサウジアラビア軍は、ほとんど交戦することなくカフジをイラクに渡してしまった[293]。多国籍軍を驚かせたイラクの成功は、サウジアラビアの能力とは無関係だった。イラク軍の動向に関する情報は、アメリカの所掌だったからである。イラクの攻撃発生時、それが小部隊ではない事実を当初、アメリカは気づかなかった。アメリカが、カフジへのイラクの攻撃部隊がイラク第 3 軍団の 2 個師団の一部であると断定したのは、かなり後のことだった[294]。

一方でカフジ市内には、アメリカ海兵隊の小規模な前線派遣隊が取り残されてしまった。サウジアラビア政府および軍の高官は、このカフジの失陥が、彼らのプライドに屈辱を与えるものだったため、激怒した。アメリカ海兵隊が、翌朝には奪回可能な態勢に移行可能であったが、サウジアラビアのプライドを保つため、サウジアラビアが自軍によって奪回する命令が発出された[295]。元来シュワルツコフの考えでは、クウェート国境に近いカフジを防御する意思はなく、カフジに大規模な駐屯部隊は配置しなかった。理由としてはイラクが、クウェート内からカフジにいつでも砲撃ができるからだった。しかしアラブ合

---

[289] ヘイカル『アラブから見た湾岸戦争』361-362 頁。
[290] Woods, *The Mother of All Battles*, pp. 14-15.
[291] Pollack, *Arabs at War,* p. 436.
[292] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 182.
[293] Pollack, *Arabs at War*, p. 436.
[294] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 181.
[295] Pollack, *Arabs at War*, p. 436.

同軍司令官のハリド中将は、国王から国土を寸土といえど渡さないよう指示されており、カフジをほぼ無防備とするには抵抗があった[296]。それがやや拙速とも思えるサウジアラビア軍のカフジ奪回作戦の実施につながった可能性がある。

一方、イラク軍はカフジ地域で多国籍軍を撃破するために、更なる増援としてクウェート南部に重装備の第 3 機甲師団、第 5 機械化師団を集結させたが、この集結は多国籍軍航空部隊に発見され、粉砕された。また航空攻撃は、カフジを占領しているイラク軍部隊にも加えられ、打撃を与えた[297]。

サウジアラビアはカフジ奪回のため、直ちにカタール軍の AMX-30 戦車装備の 1 個大隊で増強された国家警備隊第 2 旅団を集結させた。さらに必要時に攻撃に合流させるべく、サウジアラビア陸軍第 8 機械化旅団も準備させた。これらの部隊には、アメリカ海兵隊の砲兵大隊、攻撃ヘリ、航空機からの常続的な火力支援もあった[298]。

カフジのイラク軍は、イラン・イラク戦争の経験はあったが、湾岸戦争では士気が低く、装備も劣悪だった。一方でカフジに取り残されたアメリカ海兵隊員偵察チームは、多国籍軍の砲撃時には観測員として役立った[299]。アメリカ海兵隊がカフジに取り残されたことで、アメリカ海兵隊が救出作戦を実施する可能性があった。しかしカフジは、東部合同軍の担当区域であり、アメリカ海兵隊が攻撃の主力となれば、サウジアラビアの面目は丸つぶれだった。そのためアラブ合同軍の指揮官ハリド中将は、1 月 30 日夕刻にカフジに残置したアメリカ海兵隊の救出作戦、翌朝に主力による攻撃によってカフジを奪回するという計画を立案した[300]。カフジ解放の戦闘は、市街戦の訓練もせず、装備もなく、戦闘経験の無いサウジアラビア軍およびカタール軍にとっては大きな試練だった[301]。

イ　1 月 30 日の攻撃

1 月 30 日夕刻、サウジアラビア国家警備隊第 2 旅団に属する機械化中隊とオスマン任務部隊（Task Force Othman）の戦車中隊が、救出部隊としてカフジへ向かった。サウジアラビア軍は、42 両の V150 装輪装甲車部隊の突入で攻撃を開始したが、イラク軍の攻撃により 10 両が行動不能となった。この苦境では、サウジアラビア軍の予備の戦車中隊が、イラク軍の攻撃を封じ込めた。救出隊は、この戦闘間にアメリカ海兵隊偵察チームが脱出したと判断して、自らも後退したが、実際には偵察チームは取り残されたままであった。いまだにカフジがイラク軍の手にあることで国王は激怒した。翌朝に予定されていた奪回作戦が急

---

296 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』442-443 頁。
297 Pollack, *Arabs at War*, pp. 436-437.
298 *Ibid.*, p. 437.
299 *Ibid.*, pp. 437-438. カフジ市内のイラク軍戦車部隊の装備は、ソ連製 T-55 をコピーした中国製であった。
300 河津幸英『湾岸戦争大戦車戦（上）』（イカロス出版、2011 年）180-181 頁。
301 Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 182.

きょ、この日の夜に繰り上げられた[302]。

本格的な奪回のためのサウジアラビアの攻撃は、1月30日の2300に開始された。ただしカタール軍の戦車やサウジアラビアの対戦車部隊は、それ以前から攻撃を実施していた。また、アメリカ海兵隊によって継続的な砲爆撃の支援が実施された。しかしサウジアラビアの攻撃準備には問題があった。すなわち、①カフジのイラク軍に関する情報を収集するような偵察活動を実施しなかった、②十分な弾薬が供給されていなかった、③配置されたカタール部隊との通信手段が、サウジアラビア部隊になかった、④サウジアラビア部隊は、市街戦訓練を実施していなかった。この4点の他にもカフジ奪回に関して熟考された特別な戦略はなく、南方から強引な正面攻撃を実施することとなっていたが[303]、これはあまりに拙速すぎた。

最初の攻撃は、カタールの2個戦車中隊とサウジアラビアの第6機械化大隊によって増強された国家警備隊第2旅団の第7機械化大隊が実施した。規模から見れば、攻撃するサウジアラビア側はカフジのイラク軍の2倍で、アメリカ海兵隊からの砲爆撃支援も期待できたが、全くの失敗に終わった。サウジアラビアの機械化歩兵は、幹線道路を南からカフジへ前進したため、まともにイラク防御陣へ突っ込むことになった。さらにサウジアラビアの攻撃部隊間の通信でのみ突進命令が伝達されたため、カタール軍や同行したアメリカ海兵隊の顧問たちも連携した有効な策を講じられなかった。イラク軍はサウジアラビアの国家警備隊に対し、一歩も引かず、すさまじい火力で防戦した。幸いなことにその砲火は不正確であり、サウジアラビア軍に対し大きな損害（戦死1名[304]、戦傷4名）を与えることはなかったが、後退させることはできた。一方で連携を取れないカタール機甲部隊は損害が発生し、停止した[305]。結果的に第7機械化大隊は、カタール戦車部隊と連携が取れず、サウジアラビア部隊が突出する形となり、完全に攻撃を阻止されてしまった。この部隊を指揮するハーミド中佐は、翌31日未明の0320に攻撃部隊の撤退を命じた[306]。しかしイラク軍も多国籍軍航空部隊による圧倒的な航空攻撃下では、増援部隊をカフジへ送ることができず、極めて苦しい状況であった。

ウ　1月31日午前の奪還作戦

サウジアラビア軍は、翌朝すぐに攻撃を再興した。この時は前夜と異なり、サウジアラビアの第6および第7機械化大隊は、カタールの戦車部隊と攻撃計画の調整を実施した。さらに第5機械化大隊は側方攻撃、第8機械化大隊は予備とし、サウジアラビア軍大隊とカタール戦車部隊は同時に攻撃を実施したが、またもや攻撃は失敗した。最初に第5機械

302 河津『湾岸戦争大戦車戦（上）』180-183頁。
303 Pollack, *Arabs at War*, p. 438.
304 河津『湾岸戦争大戦車戦（上）』184頁によれば、最終的に2名戦死。
305 Pollack, *Arabs at War*, p. 438.
306 河津『湾岸戦争大戦車戦（上）』184頁。

化大隊はカフジ北方で阻止陣地を確保した。他方、アメリカ海兵隊の火力支援の中で、再びサウジアラビア軍はカフジに対しては正面攻撃を実施した。サウジアラビア軍とカタール軍は、前方に突進する形となり、砲撃を受けると停止したが、損害はなかった。しかし攻撃部隊は後退した[307]。

また 1000 にサウジアラビア軍は、予備の第 8 機械化大隊に、現在攻撃中の第 7 機械化大隊への支援を命じたが、ほとんど前進しなかった。サウジアラビア軍は、結果的にカフジを攻略できなかったが、イラク軍は追撃することもなく、射撃技量も高くなかったため、今回の戦闘でも双方共に大きな損害は受けなかった。一方でこの戦いで成功した要素もあった。北方に阻止陣地を確保した第 5 機械化大隊は、北方からカフジへ兵力を増強しようとしたイラク第 15 機械化旅団から派遣された 1 個機械化大隊と 1000 頃会敵した。アメリカ海兵隊の砲爆撃による支援もあり、第 5 機械化大隊はイラク軍を撃退した。イラク軍は戦車および装甲人員輸送車 13 両が破壊もしくは遺棄され、撃退された。しかしサウジアラビア軍は、この機会に追撃しなかったため、このイラク大隊を壊滅させる機会は逃した[308]。

このような状況下で、アメリカの顧問チームは、1 月 31 日から 2 月 1 日の夜間にかけて、サウジアラビア国家警備隊に対して市街戦に関する即席教育を実施、さらに次の攻撃ではアメリカ海兵隊の大規模砲撃支援も手配した。一方でその間もカフジへのアメリカ海兵隊による爆撃は継続された。ファハド国王は、この戦況に激しく怒り、カフジが奪回できなければ、イラク軍が駐留不可能となるほど、空爆等によってカフジをがれきの山とするよう、アメリカ側に依頼したとも言われる。しかしこれは幸いにも実施されなかった[309]。シュワルツコフは、国王との関係で苦悩しているハリド中将をカフジの件で弁護する書簡をファハド国王へ送ったため、カフジは破壊を免れ、ハリド中将の面目も保たれることとなった[310]。

エ　カフジ奪回成功（2 月 1 日）

奪回のためとしては、第 3 回目の攻撃が実施された。サウジアラビア軍は、この作戦をこれまで以上の規模で実施した。国家警備隊第 2 旅団全力に、カタール機甲大隊が支援した。既述したように、北方からのイラク軍の増援阻止のため、国家警備隊第 5 機械化大隊により確保された阻止陣地を引き継ぐべく、サウジアラビア陸軍第 8 機械化旅団の 2 個大隊が、カフジ北方へ送られた。このサウジアラビア軍は、中隊規模のイラク軍部隊に会敵したが、会敵したイラク軍は疲弊し、航空攻撃によって弱体化していたため、容易にサウジアラビア軍に圧倒された。サウジアラビア軍は、この戦闘について、イラクの完全なる

---

307 Pollack, *Arabs at War*, pp. 438-439.
308 *Ibid.*, p. 439.
309 *Ibid.*, pp. 439-440.
310 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』444-445 頁。

1 個装甲旅団を撃破したと報告した[311]。

カフジを防衛するイラク軍への攻撃は、アメリカ海兵隊の大規模砲撃によって開始された。サウジアラビア軍旅団（第 7、8 機械化大隊）はゆっくりと前進した。アメリカ軍の攻撃ヘリコプターを含む航空部隊が、カフジの通りを乱舞し、市内のイラク軍戦車や装甲兵員輸送車を撃破した。一方でサウジアラビア軍は、機動や調整、掩護射撃との十分な連携なしで正面攻撃を再び実施した。イラク軍は弱体化していたが、サウジアラビア軍は慌てふためきながら、全方向へ射撃しながら市内へ突入した。イラク軍は、最初は抵抗したが、大規模火力で簡単に圧倒された。2 月 1 日の 1300 ごろまでには、カフジ南部の防衛線は崩壊し、多くのイラク兵が降伏した。最終的には夕刻までに、カフジの全イラク軍が降伏した。全体で破壊もしくは捕獲されたイラク軍戦車および装甲兵員輸送車は、50 両以上、戦死 60 名、400 名が捕虜となった。これに対しサウジアラビア軍は、7 両の V-150 装甲車両と 2 両のカタール軍戦車が失われた。攻撃側の戦死者 18 名、戦傷者 50 名であった[312]。圧倒的な航空戦力および火砲による大規模支援があり、一方のイラク軍は装備をはじめ、劣勢は明らかであったが、サウジアラビア軍の稚拙な戦術が、予想外の損害を東部合同軍に与えた。それでもシュワルツコフによれば、それまで自らの戦闘能力にほとんど自信がなかったサウジアラビア軍の士気に、一大転機をもたらしたという副次的効果をこの戦闘はもたらした[313]。

イラク軍の弱点は、地上戦前に多国籍軍に知られていたが、カフジの戦いなどからイラク陸軍の欠点の多くが明確となった。しかしアメリカの各種情報機関とアメリカ中央軍は、第 18 空挺軍団、第 7 軍団、北部合同軍、東部合同軍の指揮官へイラク軍の弱点を分析、伝達することに一貫性が無く、十分な普及が図られなかった。そのため他の野戦指揮官、特に第 7 軍団、北部合同軍、東部合同軍においては、イラク軍能力が誇張されて、その誤った情報を基に地上攻勢を準備した[314]。イギリス陸軍、アメリカ中央軍、アメリカ中央陸軍は、自分たちの攻撃計画にあわせた大規模な演習を実施し、アメリカ軍顧問たちが、防御陣地を突破する計画・実行のため北部合同軍と東部合同軍の指揮官たちと調整を実施した。イラク軍の過大評価等（不正確、画像配布問題、調整手続き標準化の欠如）もあり、アメリカ海兵隊第 6 連隊やイギリス第 1 機甲師団のような鍵となる部隊に供給する補給物資では様々な齟齬が発生した[315]。

---

311 Pollack, *Arabs at War*, p. 440.
312 *Ibid.*, pp. 440-441.
313 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』445 頁。
314 Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 572-573.
315 *Ibid.*, p. 575. たとえばアメリカ海兵隊第 1 遠征軍は、与えられたインテリジェンスが信用できず、前線のイラクの地雷原の正確な画像を得るためにワシントンへ将校を派遣する有様だった。

（２）　多国籍軍による地上戦の実施

ア　陸上攻勢作戦開始直前の状況

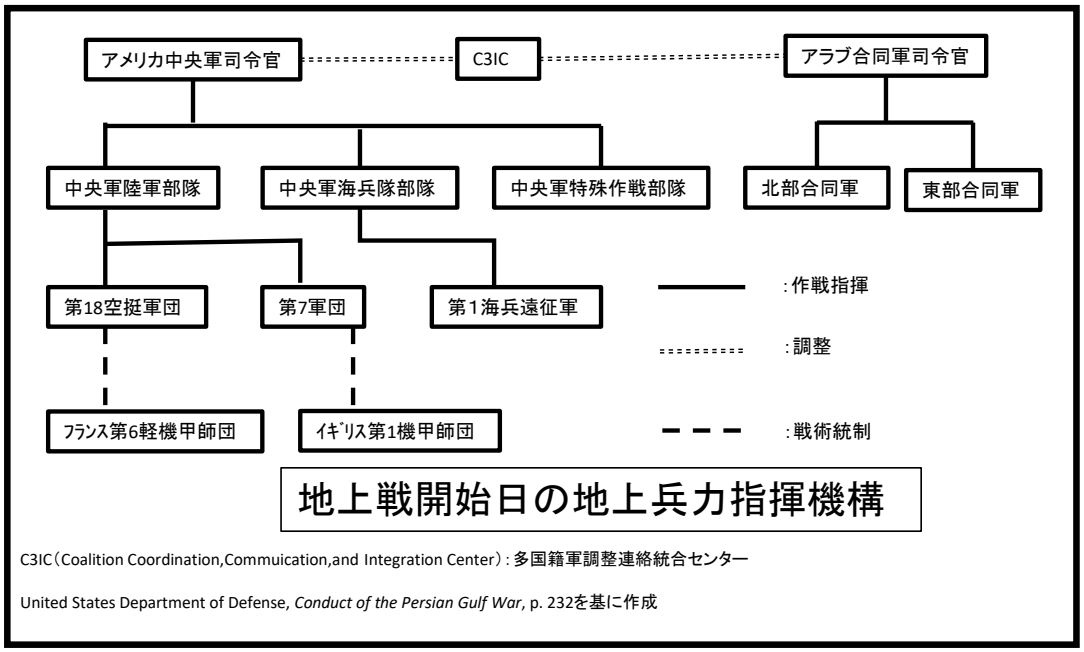
（ア）　全般

「砂漠の嵐」作戦における 1 月からの航空攻撃によって、イラク軍の戦闘用航空機はイランへいくらか逃亡することはできたが、陸空軍共に大きな損害を受けた。湾岸戦争の最後の仕上げが地上攻勢であった。事前の航空作戦によりパウエルは、地上攻勢を本質的に掃討作戦であると表現した[316]。多国籍軍の陸上攻勢作戦計画は、よく知られているように、その主力はアメリカ陸軍を中心としてクウェートの正面ではなく、はるか西方のイラクとサウジアラビア国境からイラク軍の背後に回ってその退路を遮断しようとするものであった。この主攻撃が開始される西方国境地域は、クウェート地域と比較してイラク軍の防備が手薄であることが、この陸上攻勢作戦計画を策定するうえで基礎となっていた。しかし当初、多国籍軍の指揮官たちは、イラク側の防備の手薄さに疑心暗鬼だった。地形的に重装備部隊が通過しにくい等、広域にわたる天然障害が存在する可能性も考えられた。しかしアメリカ軍以外のエジプト軍やイギリス軍は、過去数十年にわたって、中東地域でパトロールしていた経験によって、そのような障害がないことがわかっていた。西方国境地域の防御が手薄であったのは、後のイラク軍捕虜からの情報によれば、このような西方国境の砂漠地帯では目印が無く、道に迷う危険性があり、あえてその危険を冒すことはないとイラク側が判断したとのことだった。しかし後述するように、多国籍軍のうちアメリカ、イギリス、フランスの各軍は GPS を装備しており、イラク軍が考えたような問題は全く無かった[317]。

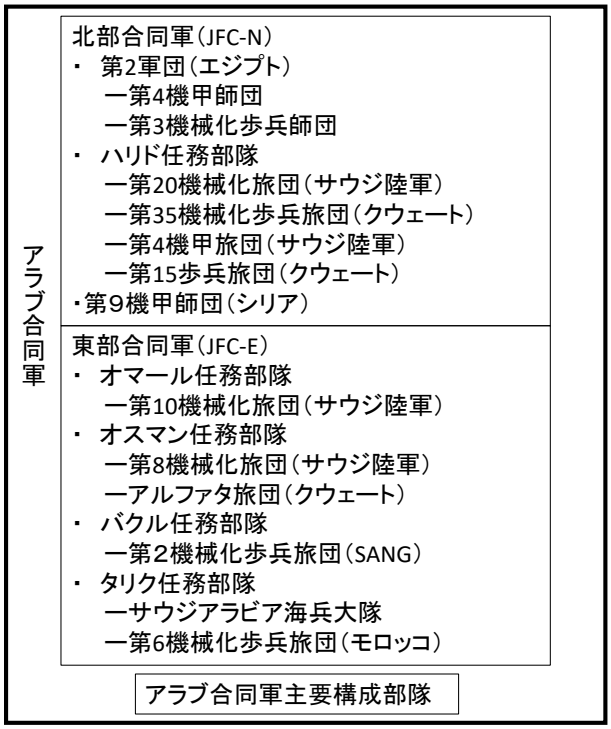
地上作戦の目的は、クウェートからのイラク軍の駆逐、クウェート戦域におけるイラク共和国防衛隊の撃滅、クウェート正統政府回復の支援であった。作戦計画では、クウェート正面でアメリカの IMEF と共にアラブの北部および東部合同軍が国境地帯での助攻撃により前方のイラク軍地上師団を拘束し、フランスおよびイギリスの陸軍師団により増強されたアメリカ陸軍を中心とした 2 個軍団（第 7 および第 18 軍団）がイラク防御陣の西方を迂回し、イラク国内深くへ進撃し、イラクの補給幹線を遮断、クウェート戦域のイラク共和国防衛隊を撃破することとなっていた[318]。なお地上作戦開始日の多国籍軍の地上部隊に関する指揮系統は、前頁の図（「地上戦開始日の地上兵力指揮機構」）のとおりで、アメリカ軍指揮官（アメリカ中央軍）シュワルツコフとアラブ合同軍指揮官ハリドが並列関係にあり、アラブ各国は 2 個の合同軍としてハリド中将に指揮された。一方でイギリスおよびフランスの部隊（各 1 個師団）は、アメリカ軍の第 7 軍団および第 18 空挺軍団の戦術統制を各々が受けることとなっていた[319]。

---

316 ヘイカル『アラブから見た湾岸戦争』350 頁。
317 同上、360-361 頁。
318 United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 227.
319 *Ibid.*, p. 232.



（イ）　アラブ合同軍



アラブ合同軍の任務を簡単に言えば、クウェート国境沿いのイラク防御陣地帯を突破、クウェート市へ向かって北進することだった。この前進は、アメリカ第 7 軍団右翼とアメリカ第 1 海兵遠征軍の両翼を掩護するため計画された。彼らの任務には、第 7 軍団の前進にとって脅威となるイラク軍の移動を防ぎ、クウェート戦域内にイラク軍を拘束、そしてイラク軍がその戦域に部隊を増援させるように仕向けることも含んだ[320]。

アメリカ中央陸軍は、北部合同軍と東部合同軍に 35 名の連絡班を派遣し、彼らは戦闘、アラブ軍の幕僚活動を補佐した。中央陸軍との連絡は衛星通信により実施されたが、これらの通信手段は、有視界連絡が不可能あるいは不明瞭である地上攻勢では重要であった[321]。

[320] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 184.
[321] *Ibid.*, p. 561.

（ウ）　イギリス軍

イギリス第 1 機甲師団は、その隷下の第 7 機甲旅団が一時、アメリカ海兵隊の統制下に置かれていたが、地上作戦開始前には全ての部隊が、アメリカ第 7 軍団の統制下に置かれた[322]。第 1 機甲師団は、1 月 17 日には地上戦で必要な補給物品と共に西方への移動を開始した。第 1 機甲師団の前線整備エリアは、ペルシャ湾岸のジュベイル（Jubayl）にある補給基地から西方へ約 275km 離れた場所に設置された。ただしこの前線整備エリアは、イラクに多国籍軍の意図を察知されないように、第 1 機甲師団が作戦を開始する地点から 100km 以上東に故意に設定された。そして地上攻勢開始直前には、別の補給基地が、前線整備エリアから西方 120km の場所に設定された[323]。

イギリス第 1 機甲師団は、今やかなりの戦力だった。その師団は第 4、第 7 の 2 個機甲旅団と支援部隊からなっていた。ただ火砲は十分だが、戦車戦力は限定的で[324]、そこがアメリカ軍とは異なっていた。イギリス機甲師団は、高強度紛争でのエアランド・バトルを実行するのに必要十分な近代的諸兵科連合能力を持ち多国籍軍ではアメリカ軍以外で唯一の機動力に富んだ有力な砲兵戦力を含む部隊であり、近代的な統合 C4 能力を持っていた。イギリスのターミガン（Ptarmiigan）システムは秘匿音声および FAX 機能を持ち、ウェイベル（Wavell）データリンクはリアルタイムのコンピューター通信を可能とした。

最も重装備なイギリス地上軍は、第 7 機甲旅団であり、戦闘部隊および支援部隊で公式には 3,940 名の人員で、この部隊は、総計 100 両のチャレンジャー戦車装備の 2 個機甲連隊と 45 両のウォーリア歩兵戦闘車装備の 1 個機甲歩兵大隊、16 両のシミター偵察装甲車、4 両のストライカー装甲車、4 両のスパルタン装甲兵員輸送車装備の 1 個偵察中隊、24 両の M-109A1　155mm 自走榴弾砲装備の 1 個野戦砲兵連隊、36 基のジャベリン地対空ミサイル装備の防空中隊、TOW 装備の 9 機のリンクス・ヘリコプター、4 機のガゼル・ヘリコプター装備の 1 個航空中隊、チャレンジャーAVRE 戦車回収車、架橋装甲車、戦闘工兵トラクター装備の 1 個工兵連隊からなっていた。

第 4 機甲旅団は、公式には 4,190 名の兵員にさらに支援要員が加わった。この部隊は、50 両前後のチャレンジャー戦車装備の 1 個機甲連隊、90 両のウォーリア歩兵戦闘車装備の 2 個機甲歩兵大隊、24 両の M-109A1　155mm 自走榴弾砲装備の 1 個野戦砲兵連隊、36 基のジャベリン地対空ミサイル装備の防空中隊、TOW 装備の 9 機のリンクス・ヘリコプター、4 機のガゼル・ヘリコプター装備の 1 個航空中隊、戦車回収車、架橋装甲車、戦闘工兵トラクター装備の 1 個工兵連隊からなっていた。

師団砲兵には 4 個砲兵連隊を含んだ。これらの連隊は、12 両の M-109 装備で 420 名の 1

---

[322] United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 239-240.
[323] Secretary of State for Defence, *Statement on the Defence Estimates Britain's Defence for the 90s* Vol. 1, p. 22.
[324] Thomas D. Dinackus, *Order of Battle Allied Ground Forces of Operation Desert Storm* (Central Point: Hellgate Press, 2000), pp. 27-29 によれば、それでも湾岸戦争に派遣したチャレンジャー戦車は、イギリスが保有するチャレンジャー戦車の約半数であった。

個連隊、16 両の M-109A1（さらに M-110　12 両の自走 203mm 榴弾砲）装備で 780 名の 1 個連隊、12 個の MLRS 発射部隊を持つ 650 名の 1 個連隊、600 名の人員と 6 基のレイピア地対空ミサイル装備の 1 個防空連隊であった。

師団直轄部隊として 16 両のチャレンジャー戦車、680 名の 1 個戦車連隊、40 両のシミター、24 両のスコーピオン、18 両のストライカーを装備した[325]。また 460 名の人員、13 機の TOW 装備のリンクス・ヘリコプター、18 機のガゼル・ヘリコプター、さらに 12 機のチヌーク、15 機のピューマ、12 機のシーキング等の支援ヘリコプター保有の 1 個航空連隊もあった。師団は 1,050 名の人員と戦車回収車、架橋装甲車、戦闘工兵トラクター、地雷除去のジャイアントバイパー成形炸薬ロケットシステム（Giant Viper Shaped-Charge rocket systems）装備の 1 個工兵連隊を含んだ[326]。

（エ）　フランス軍

フランスの第 6 軽機甲師団は、最も西方に位置する軍団であるアメリカ第 18 空挺軍団の戦術統制下で、この軍団の戦域の左翼を掩護するために運用されることとなった[327]。第 6 軽機甲師団はグループウェスト（Group East）、グループイースト（Group West）と呼ばれる 2 グループで攻撃を先導し、それをアメリカ第 82 空挺師団の第 2 旅団とアメリカ第 27 工兵大隊が支援した。この時までに第 6 軽機甲師団は、この戦域（ジプチと海上を含む）の 16,500 名のフランス軍のうち 9,860 名を占め、その他にリヤドに支援要員がいた。それは多くのアメリカ陸軍部隊よりはるかに小規模で、40 両の AMX-30 戦車、18 門の 155mm 榴弾砲を含む約 160 両の装甲戦闘車両を保有した。一方で 120 機のヘリコプターを保有し、そのうち 60 機は対戦車ミサイルを装備可能だった[328]。

イ　陸上攻勢作戦開始当日（2 月 24 日）

陸上攻勢作戦開始日、雨、砂嵐、油井の炎上に伴う黒煙により視界が悪く、これらの状況は戦闘に様々な影響を与えた。それらは高い夜間戦闘能力、赤外線および画像センサーを使用することで多国籍軍地上軍の長所をより際立たせることとなった[329]。

---

[325] シミターおよびスコーピオンは偵察戦闘車、ストライカーは対戦車車両。いずれもイギリスが開発したものである。
[326] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 598-599; 英国国際戦略研究所編『ミリタリー・バランス 1990-1991』145 頁。
[327] United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 239.
[328] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 590-591.
[329] *Ibid.*, p. 582.

（ア）　東部合同軍

0400 陸上攻勢作戦が開始された。東部合同軍は、最初の障害を突破するために、6 つの通過口を啓開し、0800 に前進を開始した[330]。サファーニーヤ（Saffaniyah）の西、国境近くに指揮所を設置した東部合同軍は、サウジアラビア・クウェート国境からペルシャ湾への多国籍軍陣地をカバーした。東部合同軍の攻撃は、サウジアラビア軍を主体としていた。鍵となる部隊は、①UAE の自動車化歩兵大隊とサウジアラビア陸軍第 10 機械化歩兵旅団で構成されるオマール任務部隊、②サウジアラビア陸軍第 8 機械化旅団とオマーン自動車化歩兵大隊、バーレーン歩兵中隊、クウェートのアルファタハ（Al-Fatah）旅団で構成されたオスマン任務部隊、③サウジアラビア国家警備隊第 2 自動車化歩兵旅団、カタール機械化大隊から構成されるアブ・バクル（Abu-Bakr）任務部隊であった。「砂漠の嵐」作戦間、サウジアラビア軍に同行したアメリカ軍顧問たちは、東部合同軍のサウジアラビア人は、勇気と決意を持って前進したと報告した。カフジの戦闘時とは異なり、これらの軍はイラク陸軍と十分に交戦可能なサウジアラビア陸軍の重装備部隊だった[331]。

東部合同軍は第 1 次目標を確保し、さらに北進、進撃途上で多くのイラク兵を捕虜とした[332]。東部合同軍は海岸部を含んだ戦域であったため、他の戦域と異なり、ペルシャ湾のアメリカ戦艦「ウィスコンシン（*Wisconsin*）」、「ミズーリ（*Missouli*）」を含む多国籍軍艦艇の艦砲射撃による支援も期待でき、サウジアラビア軍部隊が困難に直面すれば、アメリカ IMEF が、間接的に東部合同軍を支援することが可能だった[333]。東部合同軍は、隣接するアメリカ海兵隊第 I 海兵遠征軍とほぼ同時に攻撃を実施した。東部合同軍の進撃方向に布陣していたのは、イラク第 18 歩兵師団であったが、地上戦開始前の継続的な空爆、そして自軍への不十分な補給によって疲弊し、降伏を熱望する状況であったため、実際に東部合同軍が前進すると、前面のイラク軍は脱走と降伏兵士の群れにより簡単に崩壊した。

この日の夜間、イラクは、東部合同軍よりも隣接するアメリカ I MEF の前進を阻止するため、残余の戦闘部隊をサウジアラビア軍の戦域から転用した。そのため海岸沿いのサウジアラビア軍の前にはクウェート市への道が開かれることとなった。東部合同軍のサウジアラビア軍が、沿岸地域を前進するなかで直面した唯一の深刻と思われた抵抗は、偶然の弾幕射撃を実施したイラクの 1 個砲兵中隊だけだった。これに対してサウジアラビア軍の多連装ロケット部隊と砲兵が攻撃を実施した。これらの砲撃は、イラク軍砲兵にはほとんど損害を与えなかったが、士気の低いイラク兵は、火砲を遺棄し、北方のイラク方向へ遁走した。イラク兵の抵抗はほとんどなかったが、東部合同軍の前進速度は遅く、その速度は頑強な抵抗に直面していた隣接区域のアメリカ I MEF よりも遅かった。多数のイラク兵捕虜の対処によって前進が妨害された面もあった。サウジアラビア国家警備隊の前進速度は比較的早

[330] United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 512.
[331] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 184-185.
[332] United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 512.
[333] Pollack, *Arabs at War*, p. 441.

かったが、サウジアラビア陸軍部隊は、当初の計画から逸脱（計画前倒し）するのを嫌い、前進速度は遅かった。彼らは予期せぬ状況に対応できず、サウジアラビア陸軍部隊のアメリカ軍顧問が進撃スケジュールの前倒しを進言しても、彼らは必ず停止し、アラブ合同軍の指揮官であるハリド中将に伺いをたてることを主張した[334]。それでも隣接区域のアメリカ I MEF とクウェートへ向け北進する東部合同軍は、海岸道で本来の作戦計画にある目標全部を奪取し、前進も順調なため、シュワルツコフはアラブ合同軍司令官のハリドと話し合い、東部合同軍の進出限界線を超えて、そのままクウェート市へ向かい北上させることとした。本来はクウェート市攻略は、北部合同軍の任務とされていた[335]。

それでも東部合同軍は、この日の終わりまでに、クウェート市までの 3 分の 1 以上前進、多数のイラク兵を捕虜にした。サウジアラビア国家警備隊第 2 旅団は海岸の高速道路に沿ってジャビル（Jabber）へ向かって偵察を実施することもでき、東部合同軍も元来の戦争計画で求められたよりも迅速に前進できた[336]。

（イ）　北部合同軍

北部合同軍と西に隣接するアメリカ第 7 軍団は、本来は翌 2 月 25 日の早朝に攻撃を開始することとなっていたが、早々にイラクの防御が崩壊したことを知って、シュワルツコフは、北部合同軍とアメリカ第 7 軍団に対し、1 日目の午後に攻撃を繰り上げるよう指示した。しかしエジプト軍もまたカイロから命令があるまでは従わず、その後も攻撃開始を遅らせた。ようやく北部合同軍のエジプト軍も予定を繰り上げ 1600 頃、攻撃を開始した。前面のイラク軍は火炎壕に火を放ったが、砲兵陣地は放棄した。また最も前縁に位置していたイラクの警戒部隊は壊滅した[337]。実際、北部合同軍とアメリカ海兵隊第 1 海兵遠征軍前面のイラク軍は、航空攻撃と攻撃準備射撃でひどく叩かれていた。前面のイラク第 20、第 30 歩兵師団は戦闘力がないのは明白で、第 21、第 16 歩兵師団はアリ・アル・サーレム（Ali As-Salim）飛行場へ向けて後退した。アリ・アル・サーレム飛行場の西側に布陣していたイラク第 6 機甲師団もひどく戦力低下し、反撃能力はなかった[338]。

それでもエジプト軍の動きは遅かった。彼らはイラク第 20、第 30 歩兵師団が担任する区域を攻撃した。両イラク師団共に 6 週間の空爆間の脱走によって兵力がひどく減少していたうえに、アメリカ軍の A-10 によって、装甲車両や火砲の多くは破壊されていた。初日のエジプト軍の任務は、イラクの防御ラインを突破、クウェート領内 20NM にあるアブ

---

[334] *Ibid.*, pp. 441-442.
[335] シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』472 頁。
[336] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 609.
[337] United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 264-265; Pollack, *Arabs at War*, p. 442. 一方でシュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』472 頁によれば、シュワルツコフはこのようなエジプト軍の前進速度の遅さは、アラブ同胞への攻撃に対する国内世論への配慮もあるのではないかとも感じている。
[338] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 600.

ラク（al-Abraq）の兵舎を占領することとなっていた。しかしエジプト軍は、イラク防御陣地帯前面の燃える火炎壕に到達すると停止した。火炎壕の突破に関して彼らは何も対策を立てておらず、即興で解決する方法を考えるよりも彼らは炎が消えるのを待つ方を選び、炎が消えるまで 10 時間を浪費した。結局初日にエジプト軍は、イラク軍の主要陣地帯を突破するどころか、この火炎壕の突破さえできなかった[339]。そのため、この日、シュワルツコフは、エジプト軍の事情を好意的に解釈しながらも、北部合同軍のサウジアラビア軍司令官カミ少将とエジプト軍団長ハラビー少将に対して、ハリド中将等を通して前進の督促を実施した[340]。

北部合同軍は、多国籍軍の指揮官たちが、サウジアラビア軍よりも能力があると予想していたエジプト軍の軍団規模の軍を中核とした。北部合同軍には 2 個クウェート旅団と協力して、サウジアラビア陸軍部隊としてハリド（Khalid）およびムサンナ（Muthanna）各任務部隊があったが、ジャフラ（al-Jahrah）へのエジプト軍の前進に伴って、その右側翼を防護する任務を付与された。しかし北部合同軍のハリド任務部隊に所属したサウジアラビア部隊は、東部合同軍の同国部隊よりも能力が低かった。これは構成する部隊の中に国家警備隊が含まれていないことが原因だった。結果的に北部合同軍は「砂漠の嵐」作戦中、全ての多国籍軍の中で最も遅いペースで進軍することとなった[341]。

（ウ）　フランス軍

多国籍軍の中で、最も西方にあったフランス第 6 軽機甲師団の装甲車両部隊は、イラク領へ突進した。先遣部隊は、既に前日にはイラク軍の砂堤前まで進出していた[342]。この部隊はアメリカ第 82 空挺師団第 2 旅団（この旅団はフランス軍の作戦統制下）とともに、イラク領へ 90NM 入った所にあり、リヤドへ発射されたスカッドミサイルが発射された地点であるサルマン（As-Salman）空軍基地とその周辺を奪取する予定であった。

0400 に、この第 6 軽機甲師団の偵察隊が、イラク領内に前進した。その 3 時間後に、フランス軍主力が小雨の中、攻撃を開始した。第 6 軽機甲師団は抵抗なく越境したが、その後、イラク第 45 歩兵師団の前哨にぶつかった。掩体に入ったイラク軍戦車と掩蓋陣地に対しては、フランス軍のガゼル攻撃ヘリコプターを使用し、短時間の戦闘でフランス軍はイラク軍約 2,500 名を捕虜とし、制圧した。さらにフランス軍は前進し、目標ロシャンボー（ROCHAMBEAU）を抵抗を受けずに突破、サルマン飛行場（目標ホワイトと呼称）へ前進を継続し、作戦開始後 7 時間で第 6 軽機甲師団は目標飛行場付近を確保した後、さらに北方への攻撃を継続した。アメリカ第 18 空挺軍団の左翼は、フランス軍によって掩護され

339 Pollack, *Arabs at War*, pp. 140-141.
340 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』472 頁。
341 Pollack, *Arabs at War*, pp. 441-442.
342 Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 591.

た[343]。

フランス軍にとってはイラク軍の抵抗よりも多国籍軍の各種車両が補給幹線（MSR）に渋滞を起こすことが前進の妨げとなったが、フランス軍指揮官ジャンビエ（Bernard Janvier）准将が、第 18 空挺軍団に対策を依頼することによりこの問題は解消した。またこの日、第 6 軽機甲師団は、午前中にサルマンから 30km の場所でイラク軍 T-55 の戦車 1 個中隊を撃破する戦果も収めた[344]。

第 6 軽機甲師団はサルマンに向けて移動し始める前に夜間、野営するために休止した。これについては賛否両論がある（アメリカ軍は夜間の前進を期待した）。指揮官は、火砲を伴ったイラクの中隊規模の部隊が後方の目標ロシャンボーにまだ残存し、地雷のリスクもあり、2,000 人の捕虜も抱えていたため夜間の前進継続はできないと感じていた。フランス軍は、アメリカ・イギリス軍と同様なほどの暗視装置の装備はなされていなかった。1800 に日没で、その後すぐに砂嵐が発生、時には視程が 20m になった。このことはフランス軍の更なる進撃を困難にした。アメリカ第 18 空挺軍団が、この状況を理解していたかは明確ではないが、フランス軍指揮官に対し、進撃継続を主張した[345]。

（エ）　イギリス軍

アメリカ第 7 軍団の区域では、イギリス第 1 機甲師団の進撃に備えて、アメリカ第 1 歩兵師団が突破口を複数形成することになっていた[346]。この日の朝 0830、イギリス軍は、重装甲車両を大型の戦車運搬車両（HET）に積載中だった。師団長ルパート・スミスは HET によって自軍の攻撃直前に戦車等を現在地から 70～80km 前方に輸送することしていた。これには戦車の自走による攻撃開始前の故障等での車両損耗を防止する考えがあった[347]。

第 1 機甲師団は当初、アメリカ第 7 軍団主力と同様、地上攻勢開始後も 24 時間は待機する予定だったが、他戦域の進捗が好調であるため、アメリカ第 7 軍団は、15 時間の攻撃繰り上げを命令された。天候は悪化が予想され、攻撃準備射撃は当初予定された 2 時間が 30 分間に短縮された。正午前に第 1 機甲師団の前方で、アメリカ第 1 歩兵師団（機械化）の装甲ブルドーザーが、地雷原の啓開を開始した。8 分以内に 16 本の通路を開設、アメリカ騎兵部隊はイラク陣地を突破し、北方へ約 15km の半円形の橋頭堡を確立した。イギリス軍中東派遣軍司令官のドラビリエール中将は、地上作戦初日の多国籍軍の順調ぶりに満

---

[343] シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』467-469 頁；United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 260-261.
[344] Robert H. Scales Jr., *Certain Victory: United States Army in The Gulf War* (Washington, D.C.: Office of the Chief of Staff United States Army, 1993), p. 217.
[345] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 592.
[346] シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』469 頁。
[347] トム・クランシー、フレッド・フランクス Jr『トム・クランシー熱砂の進軍（下）』白幡憲之訳（原書房、1999 年）33 頁。

足はしていたが、順調すぎて疑いの眼も持ちつつリヤドの作戦室からモニターしていた[348]。

イギリス第1機甲師団は、この日の終わりまでに、アメリカ軍による国境の突破口に接近し、翌日に国境を通過して前進する準備が整った[349]。しかし攻撃予定が早まったために、戦車等をHETで攻撃発起位置付近まで輸送することは、運搬車両への積み込み、移動、降ろして集結させるといった時間を考えると困難と考えられた。そのため、計画は変更され、運搬車で移動する部分を自走して前進した。翌日にアメリカ軍が形成した突破口を通過するのにイギリス軍部隊（支援のためイギリス軍と行動を共にするアメリカ軍1個砲兵旅団を含めて）は、車両数が総計で約7,500両にもなるため、12時間必要と見積もられた[350]。

ウ　地上作戦2日目（2月25日）

（ア）　北部合同軍

北部合同軍のエジプト第3機械化師団は、地上作戦2日目となる2月25日0700、攻撃を開始した。イラク兵は逃亡あるいは退却した者も多く、イラク陣地帯の突破では、ほとんど抵抗にあわなかった。エジプト軍砲兵は、自軍の進撃を支援するため大規模砲撃を実施したが、実際には既にイラク軍が不在の地に対する砲撃であったため、当然ほとんど成果はなかった。この砲撃目標は、従来の砲撃計画にあったがために、エジプト砲兵中隊の指揮官たちは、計画通り目標への砲撃を実施したものだった。攻撃開始直後、第3機械化師団は、イラクの2個砲兵中隊から散発的な砲撃を受けた。これは全く危険な状況ではなかったが、すぐにエジプト軍は停止した。エジプト軍はアメリカの航空支援を要求したが、悪天候で実施されなかった。エジプト軍のアメリカ軍顧問は、火砲による反撃を提案したが、エジプト軍士官たちは拒絶した。エジプト軍砲兵は、既に突破作戦用の弾薬消費を超えており、イラク軍砲兵を沈黙させる砲撃を実施することはできないというのがその理由だった。その結果、エジプト軍は10時ごろにイラク砲兵の射撃が止まるまで、停止したままだった[351]。本来エジプト軍は、無駄な砲撃を実施していなければ、砲撃による反撃が可能であった。

前面のイラク軍の抵抗はほとんどなく、多くが降伏か逃亡したにもかかわらず、北部合同軍は、初日の目標も奪取していなかった。動きの遅いエジプト軍よりもサウジアラビア

---

348 Secretary of State for Defence, *Statement on the Defence Estimates 1991*, Vol. 1, p. 24; de la Billiere, *Storm Command*, p. 284.
349 クランシー、フランクスJr『トム・クランシー熱砂の進軍（下）』72頁。
350 同上、108、110頁。実際には同書155頁によれば突破口をイギリス軍が通過するには15時間を要した。
351 United States Department of Defense,*Conduct of the Persian Gulf War*, p. 513; Pollack, *Arabs at War*, p. 141.

軍はさらに前進に消極的でスピードが遅く、北部合同軍の右翼にあった隣接するＩMEF（アメリカ海兵隊）が急進したため、それとの接触が絶え、サウジアラビア軍はエジプト軍の側面の警戒といった役割しか果たせず、遅いエジプト軍の前進にも追随しようとはしなかった[352]。

このような状況のため、1300 になってもエジプト軍は、実際には既に防御が成されていないイラクの陣地線を突破する作戦が完了しなかった。南部クウェートから撤退するイラク軍を遮断するために、エジプト軍にはより迅速な進撃をアメリカ中央軍は望んだが、イラク軍が退却してもエジプト軍は前進が緩慢だった。エジプト軍に同行したジャーナリストは、地上戦の最初の 2 日間に、エジプト軍はほとんどイラク軍の戦車に、会敵していなかったと報告している。隣接の急進撃するアメリカ海兵隊との間に生じた間隙への対処で、海兵隊翼側を掩護するためにいくつかのアメリカ軍部隊が指向されなければならなかった[353]。それでもエジプト第 3 機械化師団は、約 1,500 名の捕虜を得て、戦車 2 両を捕獲した。北部合同軍のシリアの第 9 機甲師団を含む他部隊は、エジプト軍の後方で後続する準備を実施していた[354]。シリア第 9 機甲師団はゆっくりと続き、北部合同軍の予備として行動し、ＩMEF の作戦と連携するため、1 個偵察大隊を派遣した[355]。

しかし、北部合同軍の遅延は重大だった。計画では北部合同軍は、アメリカ第 7 軍団の右翼を掩護し、ジャフラ（Al-Jahrah）の北東のクウェート内の目標へ前進、クウェート湾の北へ向かい、さらに東方へ進撃することを求められていたからである。この計画では、イラク軍の包囲を支援、南東クウェートと中央クウェートにおいてイラク軍の退路遮断に協力することとなっていた。また北部合同軍は、イラク軍を過大評価した情報に悩んだ。結果的に包囲されるはずのイラク軍は撤退に成功した[356]。

また細部は不明だが、サウジアラビア軍とエジプト軍の間で友軍相撃も発生した。北部合同軍は、自分たちの任務を完遂できなかった。ジャフラとムトラ丘陵の確保はアメリカ軍に任され、北部合同軍の一部がクウェート市解放に参加するため、東方へ急きょ移動することとなった[357]。

（イ）　東部合同軍

一方、東部合同軍は軽微な抵抗を排除しつつ、ほとんど損害なく前進した。東部合同軍の正面に所在したイラク第 18、第 8 歩兵師団がミナアスサウド（Mina As-Saud）で激しい抵抗を示すこともあったが、その進撃目標を確保した。多数のイラク兵が降伏したため、前進速度は遅くなった。この頃になると東部戦域からのイラク兵の大量脱出が始ま

[352] Pollack, *Arabs at War*, pp. 442-443.
[353] *Ibid.,* pp. 141-142.
[354] United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 513-514.
[355] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 600.
[356] *Ibid.*, p. 601.
[357] Pollack, *Arabs at War*, pp. 442-443.

り、この方面にあったイラク第3軍団は、東部合同軍とアメリカⅠMEFによってクウェート市へ押し戻されていた[358]。

東部合同軍は、アメリカⅠMEF東側の海岸地域を前進し続けており、海兵隊と異なって軽微な抵抗に遭うだけだった。その主要な問題は、多数の降伏したイラク兵の処理で、捕虜として後方へ移送しなければならなかった。オマール任務部隊とオスマン任務部隊は前進を継続した。またサウジアラビア国家警備隊第2旅団は海岸に沿って前進した。カタール軍部隊は、東部合同軍の予備として後続した。これらの前進に対して2隻のアメリカ戦艦は艦砲射撃による支援を継続して与えた[359]。

（ウ）　イギリス軍

この日、アメリカ第7軍団の統制下にあったイギリス第1機甲師団は、前日にアメリカ軍によって開設された通路を通って前進を開始した。第1機甲師団の目的は、アメリカ第7軍団の右翼を掩護することだった。第1機甲師団は、アメリカ第7軍団の進撃の右翼を担い、イラクの国境防衛部隊の背後の戦術予備となっているイラク機甲部隊を攻撃することとなっていた。第1機甲師団は、中核となる2個機甲旅団、北部の第7機甲旅団（ロイヤル・スコット・ドラゴン・ガード連隊、クイーンズ・ロイヤル・アイリッシュ軽騎兵連隊、スタードシェア連隊第1大隊）と南部の第4機甲旅団（第14／第20キングス軽騎兵連隊、ロイヤル・スコット連隊第1大隊、フュージリア・ロイヤル連隊第3大隊）によって連続的な攻撃を計画した。また師団砲兵はいずれの旅団も支援し、縦深配備されたイラク軍と交戦するために全ての火砲と多連装ロケット・システム砲（MLRS）を使用し、イギリス旅団ができるだけイラク軍機甲部隊や歩兵との近接戦闘に陥らないようにすることを目指した。また第16／第5クイーンズ・ロイヤル槍騎兵連隊の1個中隊は、火砲の目標識別や航空支援要請に役立つこととなった[360]。早朝の北部合同軍の攻勢が不活発なことから、アメリカ第7軍団長は、北部合同軍前面のイラク軍が、後退して共和国防衛隊の支援に向かう可能性があるため、それを阻止するためにイギリス第1機甲師団が少しでも早く東進することが重要であると考えた[361]。

元来、計画では常にイギリス第4機甲旅団が、イギリス軍の前進を先導することとなっており、訓練でもそのように実施していた。イギリス第1機甲師団長のルパート・スミス少将は、防備が強い地域を戦いながら突破してイラク領内を前進するには、機械化歩兵戦力主体の第4機甲旅団が適していると考えた。すなわち第4機甲旅団がドアをこじ開け、継続する第7機甲旅団は砂漠を突進して、イラク軍を撃破するため、そのスピードを生かすこととなっていた。

---

[358] United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 268, 513-514.
[359] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 617.
[360] Secretary of State for Defence, *Statement on the Defence Estimates 1991*, Vol. 1, p. 24.
[361] クランシー、フランクスJr『トム・クランシー熱砂の進軍（下）』87頁。

しかし結果的に実戦では、この役割は入れ替わった。先導するのが第 7 機甲旅団となり、その先頭に立つのは、アーサー・デナロ（Arthur Denaro）中佐指揮のクイーンズ・ロイヤル・アイリッシュ軽騎兵連隊であった。デナロ中佐は攻撃劈頭に、無線で「今から前進」ではなく「敵を見つけろ」と指示したために、結果的に第 7 機甲旅団が先導することとなったのである。1400 までに、アメリカ第 1 歩兵師団（機械化）によって啓開された通路を第 7 機甲旅団の戦車がゆっくりと前進した。安全な通路はテープやボードなどで表示がなされた。ボードの中には「イラクにようこそ。アメリカ軍ビッグレッドワン（アメリカ第 1 歩兵師団）のおかげだよ」と書かれた物もあった。興奮したアメリカ兵たちは進軍するイギリス軍のチャレンジャー戦車に手を振った[362]。

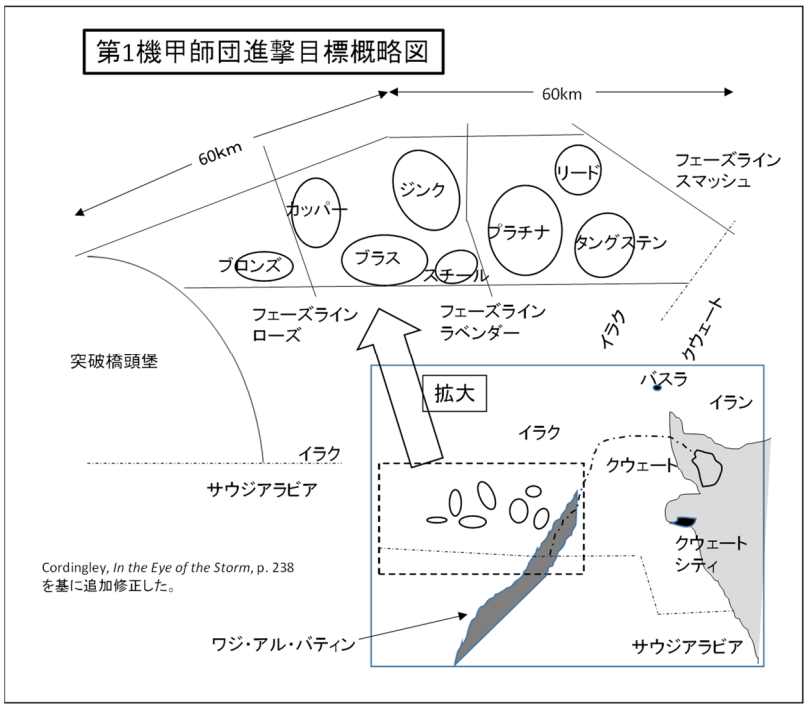
前進するイギリス機甲部隊の先頭戦車内には若い 17 才や 18 才の兵士もいたが、彼らにとっては人生の中で最も怯えた日でもあった。もしイラク軍が化学兵器を使用するなら、狭い地域に一団となる攻撃突破口に密集した戦闘部隊は、その目標として適していた。しかし先頭部隊を指揮するデナロ中佐は、あえて防護マスク不使用を指示した。リスクはあったが、マスクを装着しない方が、監視や戦闘が容易であることに加えていざとなれば、車両のフィルターシステムによって、ガスからの防護は可能と考えたからだった。

遠距離の敵への警戒のため、ヘリコプターを飛ばし、チャレンジャー戦車は北東へ 300 ヤードの間隔で、矢じり隊形で時速 40km で突進した。彼らの最初の攻撃目標、カッパー北（OBJ COPPER NORTH）には、イラク軍 1 個旅団が布陣していた。イギリス軍は戦線をできるだけ前方へ押し込むことを考えた。イラク軍の火砲や装甲車両は破壊することとしたが、歩兵陣地は迂回した。イギリス軍の目標は全て金属名であるブロンズ（BRONZE）、カッパー（COPPER）、ブラス（BRASS）、スチール（STEEL）、ジンク（ZINC）、プラチナ（PLATINUM）、リード（LEAD）、タングステン（TUNGSTEN）などと命名された。それらの目標は地図上では、敵の陣地の周りをリング状に書かれていた。スミス第 1 機甲師団長は、部下たちに繰り返し、この地図上のリングは地形ではなくイラク軍の集結地を示したものだと述べた。イギリス軍の狙いは敵機甲部隊の一掃と進撃を維持することにあった。当初、軽騎兵連隊は、前方に存在するのは敵として容易に識別できたが、スタフォードとスコット・ドラゴン・ガードの各部隊が争って先頭に出るにつれて、敵味方識別には非常な注意を要した[363]。

第 7 機甲旅団長パトリック・コーディングリー（Patrick Cordingley）准将は、迅速な戦闘を考えていたが、実際には会敵前に夜となり、大雨が降り出した。このような悪条件下でも GPS および熱画像照準器（Thermal Observation Gunsight: TOGS）があり、全く問題が無かった。後者の器材は、排熱探知で夜間でも戦車長たちが、2,500m の距離で、敵車両の探知が可能であった[364]。そのため夜間、イラク軍がイギリス軍戦車を発見するは

---

[362] de la Billiere, *Storm Command*, pp. 284-285.
[363] *Ibid.,* pp. 285-286; Patrick Cordingley, *In the Eye of the Storm: Commanding the Desert Rats in the Gulf War* (London: Hodder and Stoughton, 1996), p. 238.
[364] de la Billiere, *Storm Command*, p. 286.



るか前に、イギリス軍は射撃することが可能だった。

一方で夜間行動は、イギリス軍に問題も提示した。ウォーリア歩兵戦闘車両の画像増幅システムは、真の暗闇ではほとんど役に立たなかったからである。結果的にウォーリアの操縦手は、チャレンジャー戦車の赤ランプを目印に、戦車の後を手探りで追随しなければならなかった。戦車操縦手は熱画像装置を装備していたため、問題が無かった。このことは再び夜間戦闘での熱画像システムの重要性を示した[365]。

1830 頃航法衛星が地平線下にあって使用できなかったため、イギリスの軽騎兵連隊は 40 分休止した。その後、前進を再開し、最初のイラク軍主要防御陣地に、2100 に到達するまでゆっくりと前進した。スコット・ドラゴン・ガードおよびスタフォード連隊が軽騎兵連隊に近接する間、軽騎兵連隊は待機状態であったが、軽騎兵連隊のデナロ連隊長は、状況を知るために若い戦車指揮官たちを前方へ派遣した。彼らにとっては闇と雨の中で、不安が募る任務だった。彼らが多数の敵の発見を報告した時、デナロ連隊長は、前方へ派遣した戦車を下げ、イギリス第 1 機甲師団の作戦統制下におかれたアメリカ MRLS 連隊とイギリス軍の 155mm 砲による大規模砲撃を命じた[366]。この日は 1800 以降天気が急変し、暴風雨となったため、ヘリコプターも飛べず、通信状況も悪く、アメリカ第 7 軍団司令部は、アメリカ第 1 歩兵師団（機械化）とイギリス第 1 機甲師団に対して、無線連絡も取れない状況だった[367]。

無線連絡の不調や各級指揮官を結節とする状況報告は遅延をもたらし、たとえば翌日 26 日 0700 に、シュワルツコフが掌握していたアメリカ第 7 軍団各部隊（すなわちイギリス機甲部隊も含む）の情報は、12 時間近く前のものであった[368]。またこの日にアメリカ第 7 軍団は、146 ソーティの近接航空支援を受ける予定であり、第 7 軍団は、それらの配分に

365 Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 614.
366 de la Billiere, *Storm Command*, p. 287.
367 クランシー、フランクス Jr『トム・クランシー熱砂の進軍（下）』134 頁。
368 同上、164-165 頁。

ついては統制下にあるイギリス第 1 機甲師団とも調整し、航空支援数を決めた[369]。

（エ）　フランス軍

フランス第 6 軽機甲師団は、前進を 0600 に再開、部隊は GPS を使用して夜間に再編成していた。1100 にはサルマンの滑走路に到達、多国籍軍の航空支援が、フランス軍の予定する戦場を事前攻撃する間に、フランス軍は再展開した。その地域は起伏が多いので、天候が時に視程に問題を起こしたが、フランス軍は 1600 には、イラク軍防壁の 2,500m 以内に接近した。彼らは轟く味方の集中砲撃の下で前進し、フランス軍小部隊が小さい町を奪取し、近くのイラクへの十字路を確保している間に、飛行場を迅速に占領した。

フランス軍とアメリカ空挺部隊の組み合わせは、イラク領内の防塞の強固な急斜面の残りを占領、イラク第 45 歩兵師団の大部分を撃破した。日中、午後の中ごろまでに約 2,000 名の捕虜、約 3 個砲兵大隊がフランス第 6 軽機甲師団とアメリカ第 82 空挺師団によって捕捉された。攻撃開始線通過から 26 時間で、フランス・アメリカ軍は 100km 前進、アッサルマンの南端とその鍵となる飛行場（目標ホワイト）を占領した[370]。フランス第 6 軽機甲師団はその他に、前日攻撃した目標ロシャンボーの残敵掃討を実施、指揮官ジャンビエは、軍事拠点サルマンの完全占領は悪天候のため、翌朝の完全占領を決心した[371]。

エ　地上作戦 3 日目（2 月 26 日）

（ア）　北部合同軍

2 月 26 日の始まりまでに、エジプト第 2 軍団は、もはやイラク軍による反撃を受けるリスクはなかった。結果的に、エジプト軍は進撃ペースを早め、イラク軍の抵抗をほとんど受けず、迅速に前進した。エジプト軍は、アブラク近くのその本来の目的地に到達、60km 先にある次目標アリ・アズサリム飛行場へ向かって東に方向を転じた。ここで従来の戦闘計画では、エジプト軍は I MEF を超越して、クウェート市を解放することになっていた。

ハリド任務部隊もその目的を達成し、クウェート市に向かって東へ転じた。シリア第 9 機甲師団が、支援任務でその後方に続いた。シリア軍は東ではハリド任務部隊を守り、北部合同軍の補給線を確保する機能を果たしたが、これらの任務のいずれも実際に軍事成果に結びつくものではなかった。湾岸戦争間、シリア第 9 装甲師団は事実上、戦闘外にいた。そのため北部合同軍は、見かけより弱体であり、その緩慢な前進で、既述したように南部クウェート戦域のイラク軍の包囲に寄与することにも失敗した[372]。

---

[369] 同上、168 頁。
[370] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 611.
[371] 河津『湾岸戦争大戦車戦（上）』356 頁。
[372] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 629-630.

この日の朝までに、エジプト軍は初日の目標であるアブラクの兵舎を確保していなかった。アメリカ中央軍は、エジプト軍に対しアブラクへの前進を取りやめ、東へ転じジャフラへ前進するよう命令した。この時もエジプト軍指揮官は、政治指導者からの公式命令が無ければ、計画変更は受け入れられないと返答した。アメリカ中央軍の命令に対する認可が来た後、ようやくエジプト軍はジャフラへ前進を開始したが、前進が緩慢なため、アメリカ陸軍の 1 個旅団にエジプト軍の肩代わりをさせる必要があるとアメリカ中央軍は考えた。

一方でアラブ各国政府の高官たちは、北部および東部の合同軍が、アラブの連帯を示すためにクウェート市に入城することを決定した。この日までに、イラク軍はクウェート市から撤退し、東部合同軍はクウェート市南部に位置し、凱旋入城に備えていたが、北部合同軍は、クウェート市からはほど遠い所に位置していた。結局、北部合同軍の中から選抜された部隊が、東部合同軍と行動を共にするためにクウェート市に送られた。その他の北部合同軍は、相変わらずゆっくりと前進した。しかしまたもや北部合同軍のエジプト軍指揮官は、クウェート市への入城に関する明確な命令がないとの異議を唱えた。彼は、シュワルツコフがエジプトのムバラク大統領本人と連絡を取り、大統領からの命令が無ければ、クウェート市入城に伴う移動指示に従うことを拒否した。戦争終結までにエジプト軍は約 100 名の損害を受けたが、見るべき成果は少なかった[373]。

ゆっくりとした前進ではあったが、北部合同軍は夕暮れ前に、中間および最終目標を制圧した。結果的にエジプト軍は、アブラク付近の目標を確保した後、東に転じ 60km 移動してアリ・アズサレム飛行場を制圧した。ハリド任務部隊は東に向きを変え、クウェート市へ向かった。シリアの第 9 機甲師団はその 2 個旅団で、北部合同軍の補給ルートを確保し、もう 1 個旅団は、ハリド任務部隊に後続して、クウェート市へ向かった。イラク軍の抵抗は急速に崩壊しつつあったが、戦果拡張と追撃は、翌日も継続された[374]。

（イ）　東部合同軍

東部合同軍は順調に前進した。オマール任務部隊は、西部地区で攻撃を続行し、その目標に達した。カタール大隊もクウェート市南部の目標を占領、オスマン任務部隊も目標を占領した。また UAE 自動車化歩兵大隊は、サウジアラビア陸軍第 10 機械化旅団の左側面を掩護した。東部合同軍は作戦が進捗したために、その西側作戦境界線は 2 度変更され、4 個の追加目標も与えられた。この日の終わりまでに、翌 2 月 27 日のアラブ合同軍によるクウェート市入城の準備が整った[375]。

その地域のあるアメリカ軍上級指揮官は戦争終了後、エジプト人とサウジアラビア人双方に驚かされたとコメントしている。すなわちエジプト人は高い士気を保ち、訓練状況から

[373] Pollack, *Arabs at War*, p. 142.
[374] United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 282, 515.
[375] *Ibid.*, p. 283.

もっと迅速な前進ができるものと彼は予想していた。北部合同軍のエジプト軍はシリア軍からの直接支援がなかったが、エジプト人はアメリカ軍が、全く敵の反撃情報を持たないような場合でも敵の反撃を常に恐れていた。十分な突破用の器材、インテリジェンスも無かったが、彼らには前進する十分な時間はあった。

一方で東部合同軍のサウジアラビア軍は、状況が異なっていた。アメリカ軍は事前に彼らに完全に新しい種類の諸兵科連合作戦に関する訓練を実施することに対して支援した。彼らの行動、勇気、初動の意志について疑問は全くなかった。そして戦闘が開始されると、彼らはほとんど正確に計画通り行動した。

しかしサウジアラビア軍は重装備部隊ではなかったため、東部合同軍は火力や機甲部隊といった面では、他の軍よりもかなり小規模であった。また彼らの問題は、2 月 26 日の命令での全ての変更部分（目標の追加等）に、突然には対応できなかったことであった。このような臨機応変な対応が苦手というのは、地上戦でアラブ合同軍にはよく見られた現象だった。

しかし湾岸戦争での教訓の 1 つとして、戦争前のアメリカ人とアラブ人の良好な関係が作戦遂行上重要であったことが挙げられている。また「砂漠の盾」、「砂漠の嵐」両作戦中に各国軍との連絡官の努力は重要だったが、その中でもアラブ軍とのアメリカ軍の連絡チームが最も重要であった。連絡チームは本当に戦勝に寄与したとあるアメリカ軍上級指揮官は述懐した[376]。

（ウ）　イギリス軍およびフランス軍

アメリカ第 18 空挺軍団は、攻撃を北東に向け、ユーフラテス川流域に向けて進撃した。戦術統制下のフランス第 6 軽機甲師団は、アメリカの第 101、第 82 空挺師団と共に多国籍軍の西および北の側面を守った[377]。

一方でアメリカ第 7 軍団は、イラク領内深くに進撃し、右に向きを変え前進した。東進したアメリカ第 7 軍団の南部に、イギリス第 1 機甲師団は位置し、目標ワーテルロー（OBJ WATERLOO）に突入し、統制線スマッシュ（PL SMASH）と軍団境界線の交点へと進んだ[378]。前日の深夜になって、イギリス第 7 機甲旅団司令部からの命令で、デナロ中佐の軽騎兵連隊は、再び前進し、2 月 26 日の 0300 まで前進を継続した。暗闇でチャレンジャー戦車の乗員たちは TOGS のスクリーンで敵を捜索し始めた。最初は 1 ダースの敵を探知したが、結局約 50 もの目標を探知した。イラク軍は退却直後の反撃という策略を実施しようとしていたが、イギリス軍には TOGS による優位性があった。軽騎兵連隊は距離 2,500m になるまでイラク軍を近接させ、攻撃を開始した。90 分間続いた戦闘では、スタフォード連隊は識別を担当した。両連隊の若手指揮官たちは、極めて冷静でリーダーシ

[376] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War*, Vol. IV, pp. 631-632.
[377] United States Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 277.
[378] *Ibid.*, p. 279.

ップを発揮した。戦闘は一方的で、イラク兵がわずかにチャレンジャー戦車を見ることができるのは、瞬間的に自軍車両が爆発した際だけだった。イラク軍は潰走した[379]。

朝になって、イラク軍装甲車両 10 台の撃破は確認できたが、デナロ中佐の軽騎兵連隊が夜間に蹂躙した敵陣地は、補助的なものであることがわかった。イラク軍が強固な陣地を構える目標ジンク（OBJ ZINC）が東方近距離にあり、そこには多数の戦車と兵士が待ち構えていた。砂嵐のため視界が限定されていたが、この敵陣地に対して軽騎兵連隊は、わずかに視認可能となった 400m の距離で西から正面攻撃で射撃を実施した。一方でスタフォード連隊は、北方から接近し、イラク兵を追い立てた。この時、戦車砲手が困難と感じたのは、自軍戦車とイラク軍目標の間に降伏するイラク兵が存在したため、降伏するイラク兵を避けなければならないということだった。それでも午後遅くには軽騎兵連隊は、はるか東方に前進した。さらにイラク軍が陣地を構える目標プラチナ（OBJ PLATINUM）を攻撃、迅速に蹂躙し、多数の捕虜を得た[380]。

イギリス第 1 機甲師団長スミスの任務は、はるか北東の方向に所在するイラクの共和国防衛隊へ向かって前進することで、アメリカ第 7 軍団の右翼を掩護することでもあった。彼の計画では、配下にある 2 個旅団をあたかも 1 人のボクサーの両こぶしのように、1 個旅団がイラクにパンチを繰り出し、その間に別の旅団は補給しようとするものであった。さらに第 1 機甲師団は、既述したようにアメリカ軍の砲兵旅団によって増強されていた。彼はその砲兵旅団を状況に応じて適宜、2 個機甲旅団のいずれかの支援に振り向けることとした[381]。このアメリカ軍砲兵をイギリス軍機甲師団で使用することは、NATO 内でのアメリカ、イギリス両軍のドクトリンの類似性もあり、非常に容易であった[382]。

地上作戦実施時になっても、スミス師団長が得ることができた敵情は決して十分なものではなく、地上戦が開始されると、彼はイラク兵がわき上がる幻想に捉われた。しかし実際には地上作戦開始直後に、イラク軍の戦闘意欲は多国籍軍の事前の航空作戦によって激しく減退していることが明白となった。補給状況の不備や疲労も重なってイラク軍の士気は低下していた。そのため実際の地上戦での敵は、懸念していた活発なイラク軍ではなく、動く気力もないイラク軍であった。またイラク軍は固定防御が多く、陣内の戦車や火砲は掩体に入れられ、方向転換も自由にできなかったため、防備正面ではない予期せぬ方向からの攻撃には全く脆かった[383]。

イギリス機甲師団は十分な機動力の他、兵站支援に関しても十分な能力を持っていた。マーチン・ホワイト（Martin White）准将によって兵站は計画され、第 1 機甲師団の全ての要求を満たした。実際に戦争は迅速に終結したため、計画のいくつかは実施する必要がなくなった。たとえばホワイト准将は、イラク領内での弾薬臨時集積場設置を提案してい

---

379 de la Billiere, *Storm Command*, p. 287.
380 *Ibid.*, pp. 287-288.
381 *Ibid.,* pp. 288-289.
382 Secretary of State for Defence, *Statement on the Defence Estimates 1992* (London: HMSO, 1992), p. 73.
383 de la Billiere, *Storm Command*, p. 289.

たが、戦況が迅速に進んだため、設置は不必要となった。同様に野戦病院を 22 か所設営するための器材は準備したが、その必要性もなくなった[384]。

2 月 25 日から 26 日にかけての夜間、イギリス第 4 機甲旅団も激しい戦闘に巻き込まれた。カッパー南（COPPER SOUTH）の戦闘ではイラク軍の 20 両の戦車が活発に撃ち返してきた。クリス・ハマーベック（Chris Hammerbeck）第 4 旅団長は、自分が最も安全で快適と考えた戦車から部隊を指揮した。彼のチャレンジャー戦車は、ニックネームがノマッド（Nomad）と呼ばれ、砲手により下品な絵が指揮官の位置を示すものとして描かれていた。彼は 18 時間の戦闘中、イラク軍索敵のため TOGS 照準器からほとんど目を離すことはなかった[385]。

午後までイギリス軍にとって全てが順調であったが、状況は変わった。目標ブラス（OBJ BRASS）には、巨大な敵陣地があることが判明していた。さらにここには、ほぼ 1 個装甲旅団のイラク軍が存在するとされていた。1400 頃第 4 機甲旅団は、チャレンジャー戦車による 1 個戦闘グループによって北東から強襲した。イラク軍は北東からの攻撃を全く予想していなかった。短時間でイラク軍の約 30 両以上の戦車および約 50 両の装甲人員輸送車が破壊され、ロイヤルスコット連隊第 1 大隊とフュージリア連隊第 3 大隊の 2 つの歩兵部隊は、敵塹壕を掃討するためウォーリアから降車した。地形は平たんで、燃えるイラク軍車両が点在する以外は特色のないものだった。1500 過ぎにはフュージリア連隊は、目標ブラスと次目標のスティール（OBJ STEEL）を掃討した[386]。

（エ）　友軍相撃

フュージリア連隊は、目標スティールの東端で、工兵と共に多くの敵火砲を破壊する命令を受けた。C 中隊第 8 小隊のコールサイン 22 のウォーリア装甲戦闘車両が、突然攻撃され、火を噴いた。コールサイン 23 のウォーリアが、救助に駆けつけようとしたが、この車両も火の玉となった。これによりイギリス軍は、兵士 9 名が戦死し、11 名が負傷した。爆発が猛烈で、予期できないものであったため、当初は地雷によるものと考えられた。その後、イギリス第 1 機甲師団と第 4 機甲旅団の空軍連絡将校は、被害を受けたイギリス軍の位置とアメリカ軍の A-10 によって報告された攻撃位置が、一致することを確認した。そのため、これは友軍相撃のように思われた。このニュースは直ちにイギリス軍中東派遣軍司令官ドラビリエール中将の耳に入った。彼はショックを受けたが、現代戦では回避できない事象と理解していた。既に 20 名以上のアメリカ兵が友軍相撃で死亡していた。彼は特に迅速な機動を伴う機甲戦では、完全な友軍相撃防止は困難であり、また強大なアメリカ航空部隊の支援が無ければ、イギリス陸軍の損害が極めて高くなることも認識していた。イギリス軍は友軍相撃を防止するための 1 つの方法として、車体上面に蛍光性

[384] *Ibid.*, pp. 289-290.
[385] *Ibid.*, pp. 290-291.
[386] *Ibid.,* pp. 291-292.

の識別パネルを設置したり、車体や砲塔に黒の逆 V マークを描いて、パイロットが上空から識別しやすいようにしていた[387]。

このアメリカ軍によるイギリス軍に対する友軍相撃に対して、ドラビリエール中将は、努めて感情を抑制した。彼は感情的になることは何も生み出さず、多国籍軍の亀裂を生み、さらにアメリカがイギリス地上軍に対する航空支援をやめれば、イギリス軍の損害は悲劇的に高まるであろうと考えた。そしてイギリス軍が、アメリカ軍と共に作戦を実施するという信頼関係を壊すべきでないということが重要だとした[388]。

ドラビリエール中将は、当面 2 つの行動を取る必要があると感じた。1 つは全てのデータを集めることであり、彼は調査を指示した。2 つ目はこの友軍相撃の原因については、オープンにすることだった。中将は情報の隠ぺいは無益で不利となることを知っていた。そのため彼は自身の報道官であるニック・サウスウッド（Nick Southwood）中佐に、適切な声明に関する準備を指示した[389]。

夕刻には新たな情報により、状況がさらに明確となった。友軍相撃の少し前に、アメリカの A-10 と F-16 の編隊が、地上目標タングステン（OBJ TUNGSTEN）のイラク装甲部隊に対して、2 回の航空攻撃を実施した。イギリス第 1 機甲師団に配置された航空連絡官は、その時同じイラク装甲部隊を再攻撃するため、マヴェリックミサイル[390]で武装した 2 機の A-10 に対して更なる攻撃任務を付与した。友軍相撃が発生したのはこの攻撃であったと推定された[391]。

一方でフュージリア連隊は、伝統を発揮し、元気を振り絞って次の目標タングステンを攻撃、蹂躙するため第 4 機甲旅団の他部隊と共に戦闘を継続した。この日の午後までに、イラクは北方へ退却を開始した。イギリス軍は追撃段階に移行する準備を実施した。最初に目標タングステンから敵を叩き出さなければならなかった。そこへの進撃路へは激しい砲撃が実施され、この地域で障害となっていた高さ 3m のパイプラインを第 4 旅団が突破する間、イラク軍は釘付けとなっていた。この時ハンマーベック第 4 旅団長は、その攻撃時の MLRS の強烈な砲撃に驚嘆した。後の調査から、第 4 旅団が攻撃開始時には、相手のイラク軍は 76 門の火砲があったが、砲撃終了時には火砲は 17 門が残ったにすぎず、イラク軍火砲操作人員の 90%が死傷したことが判明した。イギリス軍は深夜にパイプラインを突破し、タングステンでの戦いは闇の中で実施された[392]。

この日のイギリス軍の進撃はめざましく、アメリカ第 7 軍団の右翼を援護しつつもイラク第 52 機甲師団を撃破し、前線を防衛していた数個のイラク歩兵師団のほとんどの司令

---

387 *Ibid.*, pp. 292-293. また河津『湾岸戦争大戦車戦（上）』373 頁によれば、友軍相撃が発生して以降、その防止のため、さらに装甲車両には大きなユニオンジャック旗が取り付けられた。
388 de la Billiere, *Storm Command*, pp. 293-294.
389 *Ibid.*, p. 294.
390 ニューディック『ヴィジュアル大全航空機搭載兵器』98 頁によれば、この空対地ミサイルは湾岸戦争で発射されたアメリカ軍の空対地ミサイル 5,471 発のうち 5,296 発を占め、さらに発射されたマーベリックのうち 90%以上が A-10 を母機とするものだった。
391 de la Billiere, *Storm Command*, pp. 294-295.
392 *Ibid.*, pp. 296-297.

部も粉砕していた[393]。イギリス軍部隊は、2 月 26 日夜から 27 日の未明にかけて、目標ワーテルローを攻略後、次の目標デンヴァー（OBJ DENVER）の攻略準備を実施した[394]。

オ　地上作戦 4 日目（2 月 27 日）

（ア）　アラブ合同軍

サウジアラビア第 4 機甲旅団とクウェートのアッシュ・シャヒド（Ash-Shahid）旅団は、彼らの目標を占領した。クウェート軍が、クウェート市解放を実施すべきとのクウェート首長の突然かつ一方的な決断によって時間的遅延が発生したが、1 個旅団サイズの軍がクウェート市に突入し、その西側地域を確保した。シリア師団は支援の位置づけのままで、北部合同軍の後方連絡線を守った。

いくらかの調整およびムバラク大統領によるエジプト軍前進の許可の後、クウェート軍は 0900 公式にクウェート解放の前進を開始した。エジプト軍がクウェート軍に後続し、様々な国のアラブ軍が、クウェートの都市を確保するために、個々の役割を与えられた。彼らは水と電力も不十分な略奪された都市に突入した。動物園、商店、博物館をはじめ何もかも略奪されていた。1,000 人以上のクウェート人が行方不明で、空は炎上する油井から立ち上る煙で一杯であった。残留していた 20 万人のクウェート人は、何日も続く解放祝賀会を開いた。

クウェートは、クウェート軍によってクウェート市が解放されたことを喧伝した。それはクウェート軍が解放を成し遂げることを自国や世界の世論に納得させる一方で、後方に置かれた他のアラブ諸国を疎外することとなった。このクウェート人の決断は、クウェートが他のアラブ諸国軍を兄弟ではなく友人として扱ったため、エジプト、サウジ、カタール、UAE、他のアラブ諸国の気分を害させることになった。東部合同軍は、クウェート市の南方のその最終目標を確保し、前衛部隊は市内に入り、北部合同軍と合流した。東部合同軍部隊は市の東側の占領を開始、クウェート解放を完遂させようとしていた[395]。

（イ）　イギリス軍

2 月 27 日早朝、イギリス軍に対する目標タングステンでのイラク軍の残存陣地は、1 か所だけであり、ラウンドスピーカーで降伏を勧める心理戦を実施しつつ、ロイヤル・スコット連隊が掃討した。イラク軍は北東へ潰走した。イギリス第 1 機甲師団長は 10 日間、第 7 機甲旅団長が 4 日間かかると予想していた統制線スマッシュ（PL SMASH）[396]に到

---

[393] クランシー、フランクス Jr『トム・クランシー熱砂の進軍（下）』232 頁。
[394] 同上、259 頁。
[395] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 641-642.
[396] クランシー、フランクス Jr『トム・クランシー熱砂の進軍（下）』60 頁によれば、統制線スマッシュ

達した。0930 までにイギリス軍は、北東から南西に長く続くイラク・クウェート国境にある枯れ川のワジ・アル・バティンの端にとりついた。この段階で最も問題であったのは極度の疲労だった。イギリス軍兵士は、3 日間昼夜をほぼ睡眠なしで行軍していた。兵士たちは表面上は変わりがないようだったが、彼らの能力は低下していた[397]。統制線スマッシュは、当面の進出線とされていた。そのためこれより先に進撃するにはアメリカのフランクス第 7 軍団長に許可を得る必要があった。

2 月 27 日にドラビリエール中将は、シュワルツコフと会い、友軍相撃についても話し合った。彼らは自分たちは戦争に注力すべきであり、イギリスとアメリカの親密な関係を壊すことは不適切だということを認識していた。また被害が出たフュージリア連隊が駐屯するドイツの基地からは、友軍相撃の事実は悲しいながらも、このような出来事は、作戦での回避できない事例であり、有力な航空支援がなければさらに多くの損害が、イギリス軍に生まれるであろうことが注目されるべきであることを、関係するアメリカのクルーに知らせることを要望してきた。ただ多国籍軍の統合部隊航空部隊司令官であったアメリカ空軍のホーナー中将は、これらの状況を素直に十分に受け入れることは、この時点ではできなかったようである。当初、彼はこの事案は地雷によるものと主張し、自身の空軍を守ろうとした。しかしドラビリエール中将は、事を荒立てることは選ばなかった。この時点でアメリカ空軍は、今回の友軍相撃に関して解釈が一致していない状況ではあったが、ドラビリエール中将は正確な調査を実施する必要は認識していた[398]。

アメリカ第 7 軍団長フランクスは、イギリス第 1 機甲師団長スミスに 2 つの任務の可能性があるとして、準備するよう伝えていた。1 つは南方のワジ・アル・バティンを掃討し、タップライン道に分岐し、その南方にある舗装道路に進出することにより後方連絡線短縮を目的とするものだった。もう 1 つの選択肢とされた任務は、高速度で東方へ進出、イラク軍の離脱を防止するため、クウェート市から北のバスラへ向かう幹線道路を切断することだった[399]。この最初のオプションであるワジ・アル・バティンの掃討に関しては、前日にアメリカ中央陸軍司令官のヨソック中将から第 7 軍団長に対して要望が出されていたが、フランクスは、本来地雷等の障害のあるワジ・アル・バティンを回避するため、西方から回り込む機動を取ってきたことを理由として、ヨソックからの要望に反対し、議論は平行線となったが、夜まで保留という形となっていた[400]。しかし前日の夜、フランクスとシュワルツコフは直接の電話連絡によりイギリス第 1 機甲師団をヨソックが希望する南部ではなく、東進あるいは北進させることで合意していた[401]。フランクスは 2 月 26 日の

は攻撃開始線から約 150km に位置し、アメリカ第 7 軍団がイラクの共和国防衛隊と本格的戦闘を実施するための出撃線となるものと計画されていた。

397 de la Billiere, *Storm Command*, pp. 297-298.

398 *Ibid.*, pp. 295-296.

399 *Ibid.*, pp. 298-299.

400 クランシー、フランクス Jr『トム・クランシー熱砂の進軍（下）』176 頁。ヨソックのこの要望は、イギリス軍の南進によりその北方へアメリカ第 1 騎兵師団が突進し、バスラ周辺での継続する戦争に備え北方の兵站を容易にすることを理由としていた。

401 同上、214-215 頁。ここでのイギリス軍の今後の攻撃方向に関してはシュワルツコフフ、ヨソック、

段階で、24 時間もしくは 48 時間後の自己の軍団の作戦について考えていた。これは共和国防衛隊を大きく両翼から包囲しようとするもので、北翼はアメリカ軍第 1 騎兵師団を、そして南翼ではイギリス第 1 機甲師団を使用しようとするものであった[402]。

第 7 軍団は元来、イギリス第 1 機甲師団に対しては、共和国防衛隊へ向かってワジ・アル・バティンに沿って北へ前進することを期待していたが、イギリス軍が遅れずにこのような戦闘に関与できるかどうか次第に不透明となった。イギリス中東軍指揮官ドラビリエール中将も以前の友軍相撃問題によって、アメリカ・イギリスの指揮官にとっては、既に勝っている戦争で、この時点において新たな即興での作戦を実施し、共和国防衛隊へ向け前進することは、リスクが大きすぎると確信していた。結果的にイギリス軍への命令は、夜の間に何度も変更され。イギリス軍の前進を遅らせ、停戦のタイミングの不確かさが作戦をさらに妨げることとなった[403]。

イギリス軍は 0800 に、クウェートへの前進を命令され、0930 にはワジ・アル・バティンに到達、クウェート領内 30km 先に向けて前進した。イギリス第 1 機甲師団の第 7 機甲旅団は、ワジ・アル・バティンを横断して真東へ攻撃、IPSA（イラク・パイプライン・サウジアラビア）を攻撃、3 個イラク歩兵師団を蹂躙した。

イギリス軍兵士は、既に空爆によって破壊され散乱した兵器、わずかなイラク軍の防御陣地があるだけで、イラク軍の抵抗は軽微なものと述べた。イギリス軍はその日のうちに、クウェート内の主目標、ヴァーシティ（OBJ Varisty）に到達した。2 月 27 日の夕刻までに、イギリス軍は 3 方向への前進を可能とする場所に位置していた。すなわち①共和国防衛隊へ向かって北進、②海岸への前進、あるいは③ワジ・アル・バティンを越えて南方へ向かいタップライン道と連結し新たな補給幹線を確立する、といった 3 つのオプションだった。停戦のタイミングの不確かさが、作戦の決断をますます時間に敏感なものとしたが、イラク軍は今や急速に崩壊していたので、イギリス軍前進の適切なラインを決定するのは困難だった[404]。

1930 にスミス師団長は、ワジ・アル・バティンを掃討するという明確な命令を受けた。イギリス第 4 機甲旅団は、その任務の準備を開始したが、1 時間後その命令は撤回された。今や東方への突進が優先的オプションとされた。アメリカ第 7 軍団から細部命令が出され、その夜 2230、夜明けに第 7 機甲旅団を突進させるという命令をスミス師団長は発出した。しかしすぐに攻勢作戦中止（停戦は翌日）のニュースが来た。リヤドのイギリス軍司令官ドラビリエール中将は、この夜、シュワルツコフに感謝の言葉を直接伝えた。シ

フランクスの間でのやりとりに矛盾が見られる。本件は河津『湾岸戦争大戦車戦（下）』135-136 頁も参照。ただし後述するようにイギリス軍ドラビリエール中将により、この日（2 月 27 日）1930 に一旦ワジを掃討するという命令が出たという部分は、前日夜の記憶違いの可能性がある。

[402] クランシー、フランクス Jr『トム・クランシー熱砂の進軍（下）』226-229 頁。ここでも 2 月 26 日遅くにフランクスはイギリス第 1 機甲師団長にワジ・アル・バティン南方への攻撃はなくなったことを伝えたと述べている。

[403] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 640.

[404] *Ibid.*, pp. 640-641.

ュワルツコフは短く「サンキュー」と返答しただけだった[405]。日が変わる前後には、イギリス軍は国道 8 号線を越え、クウェート市北方に位置していた[406]。

カ　地上作戦 5 日目（2 月 28 日）

（ア）　アラブ合同軍

北部合同軍は攻勢作戦を停止した。エジプトのレンジャー部隊は、クウェート市のエジプト大使館を確保、エジプト第 3 機械化師団は、アブラクの北方に駐留した。エジプト第 4 機甲師団はクウェート市西部を掃討し始めた[407]。

東部合同軍も攻勢作戦を停止した。東部合同軍は、クウェート市の第 7 環状道路南方で守備を固め、サウジアラビア特殊部隊は、サウジアラビア大使館を確保した。1 個大隊規模の任務部隊が、クウェート市に入り、第 6 環状道路に進出した。またサウジアラビア海兵隊は、港を占拠した。他の東部合同軍部隊は、イラクの残敵掃討を実施した[408]。

（イ）　イギリス軍およびフランス軍

0530 イギリス第 7 機甲旅団司令部は、指揮官たちに 0630 に前進準備を完了させる命令を発出した。クイーンズ・ロイヤル・アイリッシュ軽騎兵連隊長デナロ中佐は、コーディングリー第 7 旅団長に、0600 には出発可能と報告した。旅団長はすぐに準備でき次第、前進するよう命令した。イギリス軍は、第 7 機甲旅団を先頭に時速 40km 以上で前進した。機甲師団の残余が後に続いた。イラク陣地が点在し、地雷もあったがバスラ道を見下ろすことができる目標コバルト（OBJ COBALT）へ 0800 に、攻勢作戦停止が声明される 30 分前に到達した。

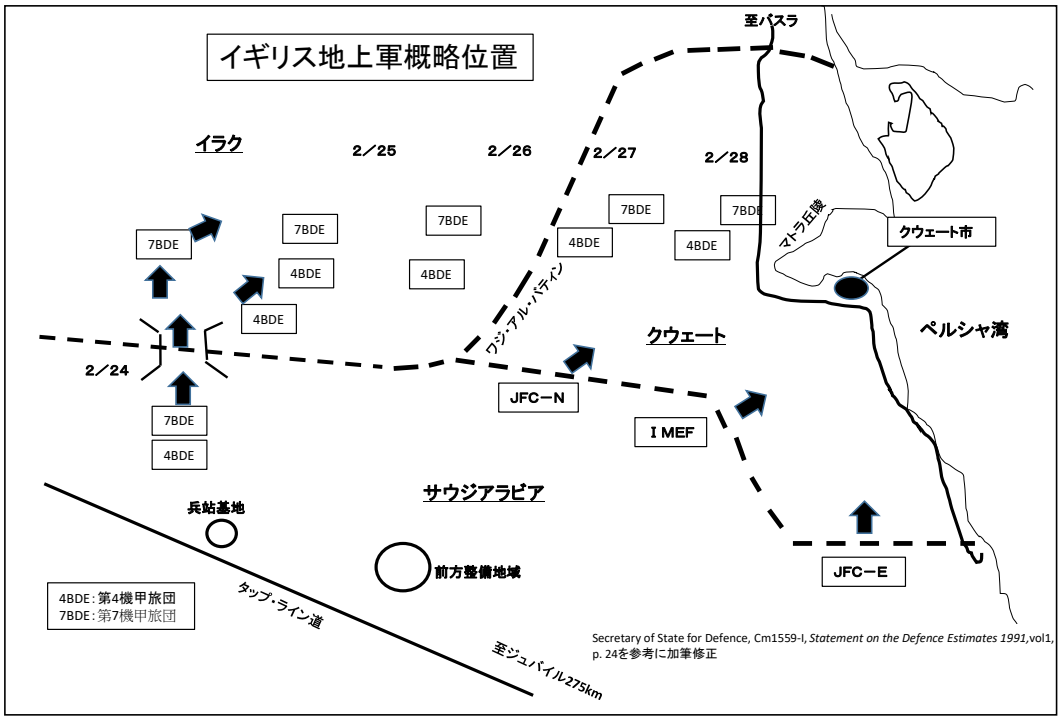
作戦開始以来イギリス第 1 機甲師団は、何人もの上級指揮官を含む 7,000 人以上のイラク軍捕虜を獲得、イラクの 3 個機甲師団の大部分を撃破、300km 以上を進軍した。多くの場合は第 7 機甲旅団が先導したが、第 4 機甲旅団も活躍した。第 4 機甲旅団は 350km を前進、97 時間の作戦のうち、44 時間は交戦、60 両以上の主力戦車、90 両の装甲人員輸送車、37 門の火砲を撃破、約 5,000 名の捕虜を得た。ハマーベック旅団長が恐れた 100 名の戦死者とはほど遠い損害で、作戦を遂行した。第 4 機甲旅団は、敵からの砲火では戦死者はなく、友軍相撃による 9 名の戦死者が、戦闘間の唯一の損害となった。また第 7 機甲旅団長コーディングリーもムトラ丘陵から幹線道路を俯瞰できる状況で、自分の旅団が戦闘を終えられたことを喜んだ。そこからは逃走しようとした大量のイラク軍車両が、多国

---

405 de la Billiere, *Storm Command*, pp. 298-299.
406 クランシー、フランクス Jr『トム・クランシー熱砂の進軍（下）』344 頁。
407 Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 646.
408 *Ibid.*, p. 647.

籍軍の空爆により破壊された残骸で一杯の道路を見ることができた[409]。

この時点ではイギリス軍は、まだ誰も戦争終結を確信していなかった。スミス第 1 機甲師団長は、もし命令を受ければバスラへ北進するための準備にこの日を費やした。彼にはバスラやその先への更なる前進も可能であった。チャレンジャー戦車 74 両のパワーパック交換が必要だったが、兵站支援が素晴らしく、作戦終了までに故障したのは 1 両のみであった[410]。しかしそれ以上の進撃命令はなかった。結果的に地上作戦で、イギリス兵は 16 名の戦死者、負傷者 61 名を出したが、それは A-10 の友軍相撃による戦死者 9 名を含むものだった。2 日後にはスミス師団長をフランクス第 7 軍団長が訪問し、部隊の労をねぎらった。ここでは指揮官同士が話す中で、スミス師団長は 2 月 26 日に今後のイギリス軍部隊の攻撃に関して、北進か東進か南進か不明であった時の不満をフランクスに述べている。その一方でフランクスは第二次世界大戦時のようにアメリカとイギリスの部隊が共に砂漠で戦ったことに満足していた[411]。



一方最西端のフランス軍は前述したように目標のサルマン飛行場を占領した後、アメリカ軍と共にイラク領奥深くに突進、最終的にバグダッドと南部イラクをつなぐ主要高速道路を含む南部イラクの中央部分を占領した[412]。

---

409 de la Billiere, *Storm Command*, pp. 299-301.
410 *Ibid.*, p. 300.
411 クランシー、フランクス Jr『トム・クランシー熱砂の進軍（下）』258、358、382-383 頁。
412 Spencer C. Tuckered., *Persian Gulf War Encyclopedia: A Political, Social, and Military History* (Santa Barbara: ABC-CLIO, 2014), p. 153.

キ　その他の軍事行動

（ア）　海上戦闘

地上作戦間、散発的ながら、ペルシャ湾でも戦闘が発生した。2 月 25 日未明、イギリス駆逐艦グロスター（*Gloucester*）は、2 発のシルクワーム対艦ミサイルが海岸から発射されたことを探知した。グロスターはミサイル攻撃への反撃の許可を受けた。ミサイル 1 発は沿岸近くで飛散した。さらに接近するもう一発に対して、全ての武器を使用、シーダート対空ミサイルにより破壊した。その破片は、イギリス艦隊旗艦ロンドン（*London*）の艦尾付近に飛び散った。ファランクス対空機関砲は、アメリカ戦艦ミズーリへの 2 発のミサイルを射撃、幸運にも多国籍軍艦艇に被害は発生しなかった。

活動中の多国籍軍掃海部隊は、更なる対艦ミサイル攻撃があるかどうかを見極めるため、戦術的後退を実施した。しかし何も問題がなかったため、イギリス軍艦艇等は再び現場に戻り、終戦まで危険な掃海任務を実施した。この時までにイギリス海軍は、アメリカ戦艦が 16 インチ砲を 20km 彼方の海岸陣地へ砲撃できるよう、戦艦 1 隻が必要とする十分な海域の掃海を完了していた[413]。

（イ）　イギリス軍およびフランス軍ヘリコプターの活動

イギリス地上軍は、6 発の TOW 対戦車ミサイルを搭載するリンクス攻撃ヘリコプターを 24 機、ガゼル偵察ヘリコプター24 機に増強された 1 個ヘリ大隊を戦域に展開した。イギリス空軍は 16 機のピューマ、11 機の CH-47 チヌーク中型輸送ヘリコプターを提供した。TOW で武装したイギリスのリンクス・ヘリコプターとガゼル偵察ヘリコプターはイギリス第 1 機甲師団を支援し、リンクスは確実に多くのイラク装甲車両を破壊した。しかしイギリス軍ヘリコプターは大規模なイラク機甲部隊には会敵せず、大部分は支援と偵察で使用された。

一方フランス第 6 軽機甲師団は、HOT を装備した 30 機の SA-342、10 機の 20mm 砲搭載ガンシップの SA-341 を保有する第 5 戦闘ヘリコプター連隊と SA-330 ピューマ 62 機保有の第 1 輸送ヘリコプター連隊を持っていた。フランス軍は総計 139 機のヘリコプターを保有し、そのうち約 60 機は武装されていた。フランス・アメリカ両軍はアメリカ第 18 空挺軍団の区域で大規模なヘリコプター作戦を実施した。フランス軍のガゼル・ヘリコプターは、敵の防御を偵察するため、多国籍軍地上軍の前方で頻繁に行動した。

フランス軍は、ガゼルを補給線の警戒や前進するフランス軍の翼側掩護でも使用した。ピューマ輸送ヘリコプターは、いくつかの軍団の輸送機能を果たしたが、支援任務に大規模に使用された。ピューマは、傷病兵輸送、戦場捜索、救難任務を割り当てられたが、実際には

[413] de la Billiere, *Storm Command*, p. 290.

このような役割ではめったに使用されなかった。

だがこれらの多国籍軍ヘリコプターには、C4I/BM とエアランド・バトルとの統合（インテグレート）に関して多くの問題が発生した。ヘリコプター作戦は、その有効性を制約させる ATO システムの硬直性と共にヘリコプターの航法システムや暗視システムの問題によって制限されたのである[414]。

（３）　地上戦終了後

湾岸戦争に大勝したシュワルツコフは、6 月にアメリカに帰還し、第二次世界大戦の戦勝時並みの歓迎を受けた。しかしアラブ世界ではその喜び方が、度を越していると考えた者が多かった。イラクのクウェート侵攻にはアラブ人も批判的であったが、イラク兵やイラク市民の死傷者数が伝えられると、多国籍軍のイラクへの懲罰は重過ぎるとアラブ人の多くが感じたからだった[415]。

戦争終結後、西側とアラブ各国は、フセイン大統領は失脚すると考えた。イラク北部ではクルド人による、南部ではシーア派による反乱が発生していた。3 月中旬にはイラクの 18 ある行政区のうち、フセイン大統領が実質的に支配していたのは 3 つにすぎなかった。しかし 3 月下旬にはフセイン大統領が優勢になっていった。この状況急変の原因としては、反乱が十分に組織化されなかったことがあるが、その他にも多くの原因があった。1 つ目はイラクが多国籍軍のバグダッド侵攻に備えて、イラク中央部に思った以上に多い 18～25 師団を配置していたこと、2 つ目に地上戦前に撤退を命ぜられた部隊の中には、軽微な損害で残存したものもあったこと、3 つ目はイラクで内乱が発生すればイラク軍は大量の脱走者が出ると予想されていたが、内乱発生時にそのようにならなかったこと、4 つ目にアメリカがイラクの反政府運動に大きな支援を与えなかったことである。停戦交渉においてアメリカはヘリコプターの使用をイラクに認めたが、これらが反乱鎮圧に用いられるのは明らかであった。このアメリカのヘリコプター使用許可の背景には、サウジアラビアからの圧力があった。イラクでのシーア派の反乱を放置することは、自国の東部のシーア派に影響を及ぼす恐れがあるからだった。

実際にはイラク国民によってフセイン政権が転覆された場合に備えて、アメリカとサウジアラビアは対処計画をまとめていた。その計画においては適切なイラク人を選び、フセイン大統領亡き後に、暫定政府で安定化を図ることとなっていた。サウジアラビアが選んでいた指導者候補は、スンニ派の元バース党員で、新政府はバース党と軍人の混合となる予定であった。しかし、この計画は実現しなかった[416]。クルド人は湾岸戦争終結直後、イラク北部で自分たちの暫定政府ができるかもしれないという期待を抱いたが、頼みとした

---

414 Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 720-721.
415 ヘイカル『アラブから見た湾岸戦争』366 頁。
416 同上、367-369 頁。

アメリカやイギリスの更なる軍事介入は無かった。ただし、イラク軍から逃れようとするクルド人難民の状態監視のため、アメリカの他にイギリスは 1,000 名弱の兵をトルコ・イラク国境地帯に派遣した。しかし、それも 8 月には撤退してしまった[417]。

また戦争終結後、多国籍軍に参加したアラブ各国間にも隙間風が吹いた。サウジアラビアは、多国籍軍に参加したアラブ各国への感謝よりもイギリスやフランスとの関係に興味を持っているようであり、アラブ諸国のなかには自分たちを西側諸国より下の存在と思われていると捉える向きもあったようである。そのためかエジプトは、予想より早く 5 月 8 日にはクウェートから軍を撤退させ、7 月の終わりには、派遣されたエジプト軍は全て撤退した。シリア軍も 6 月 2 日には、撤退を開始し、7 月 28 日に完了した。エジプトはサウジアラビアに対し 5 億ドルの支援金を要求したが、サウジアラビアは当初 2 億ドルを提供し、後日全額を支払った。エジプト人の間には、自分たちは裕福な湾岸諸国に利用されただけという感情が残り、シリアでも自分たちは傭兵のような扱いを受けたと考える者が多かった[418]。

多国籍軍の陸上作戦は、予想以上に少ない人的損耗で作戦を終了した。資料源により数字は多少の違いが見られるが、「砂漠の嵐」作戦期間中の陸上・海上・航空作戦全ての最終的な戦死者は、アメリカ軍 147 名に対して、その他の国の多国籍軍は 99 名であった。なおアメリカ軍の死者の中にはフランス第 9 軽機甲師団に配属されたアメリカ空挺部隊員 8 名の地雷処理作業中の事故による死亡も含まれている[419]。

（4） 地上作戦の評価

航空作戦と同様、地上作戦もアメリカ軍が中心となり作戦が実施された。2 月中旬アメリカ地上軍は、陸軍と海兵隊を合わせて兵員約 38 万 5 千名であった。その他に地上戦闘に参加した軍としては、イギリス軍が兵員約 3 万 5 千名、フランス軍が約 1 万 2 千名、エジプト軍が約 3 万 5 千名、シリアは約 1 万 6 千名、サウジアラビアが約 7 万 5 千名、クウェートが 5 千名以上、その他の湾岸諸国が約 5 万 5 千名だった[420]。兵員数的には、アメリカ軍以外の地上軍は、アメリカ軍地上兵力の約半分の規模であった。その割合は航空作戦に参加した各国の航空機数比率と比較すれば、アメリカ軍以外の多国籍軍の割合は多かったが、アメリカ軍が航空作戦同様に攻撃の中核を担い、また効果的に戦果を収めた。並列的な命令系統の問題もあり、アラブ合同軍は特に状況変化に対応する柔軟な作戦行動を採ることができず、行動は消極的な場合が多く、戦闘での役割は総じて象徴的な参加に近いものに留まった。

---

417 同上、370-371 頁。
418 同上、386 頁。
419 Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 339; フリードマン『湾岸戦争』269-270 頁。
420 鳥井『軍事分析・湾岸戦争』406-422 頁。

一方でイギリス軍は、アメリカ第 7 軍団の右翼を担い、比較的アメリカ軍と円滑に連携して効果的戦闘を実施し、戦果も収めた。また多国籍軍の最左翼を担ったフランス軍も大規模戦闘にはそれほど参加しなかったが、アメリカ第 18 空挺軍団の左翼を担い、一部のアメリカ軍と連携し、予定通りの作戦成果を獲得した。

4　まとめ

本章では、アメリカ以外の参戦国の状況について記述してきた。湾岸戦争は第二次世界大戦以降で最大の連合作戦であった。特にアメリカを中心とした西側諸国とサウジアラビアを中心としたアラブ諸国との連合作戦は、キリスト教徒とイスラム教徒が大規模に肩を並べて実施するもので、歴史的にも前例のない、極めて特殊な形態であった。そのため宗教的・文化的摩擦によって連合作戦態勢の円滑さが損なわれる可能性が予見できた。さらに結果的に湾岸戦争に参戦しなかったが、イスラエルという不安定要因が存在した。イスラエルが参戦した場合、アラブ合同軍の結束が破綻、あるいはアメリカ軍を中心とした多国籍軍の大部分が展開地としたサウジアラビアでの駐留に支障が発生することも予想された。

一方でアメリカ軍が戦力の中心となるのは間違いなかったが、多数の国の軍が関与することで、各種装備の相互運用性に関して問題が発生することも容易に予想された。湾岸戦争での連合作戦のその円滑な遂行に焦点を当て、その留意点等について以下に述べる。

（1）　各国指揮官の人間関係

文化も慣習も異なる複数の国々によって構成される多国籍軍の円滑な連携を保つには、戦域における各高級指揮官同士の連携が不可欠であった。これは突き詰めれば、親密な人間関係の構築によるところが多かったように思われる。シュワルツコフは年少時、イランに赴任した父親の元で暮らした経験もあり、中東の地と無縁ではなかった。イランにしばらく居住し、その後スイスへ留学する途上でサウジアラビアを訪れた経験もあった[421]。彼はサウジアラビアへ展開したアメリカ軍の文化的摩擦による悪影響を最小限に食い止めるため、アラブ合同軍の総司令官ハリド中将の所へ毎夜顔を出し、アメリカでは短時間で話が付くことでもサウジアラビア流に何時間もわたって忍耐強く話し合った[422]。このようにしてハリド中将とシュワルツコフとの人間関係が構築された。サウジアラビア側は当初、様々な面（特に風紀面）での苦情を持ち出したが、献身的なシュワルツコフの対応により西側諸国の湾岸地域での多国籍軍駐留に大きな支障が発生することは防がれた。

また多国籍軍のうち西側諸国の中ではアメリカ軍に次いで大規模であったイギリス軍は、湾岸戦争以前からアメリカ軍と常に密接な関係を保っていたが、中東イギリス軍指揮官ド

---

[421] シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』292-293 頁。
[422] 同上、348-350 頁。

ラビリエール中将は、意識的に 1 日 2 回はシュワルツコフと会うようにすることで親密さを保ち、円滑な連合作戦に寄与した[423]。

また多国籍軍の軍種レベルでも、円滑な人間関係が作戦に好影響を与えた。たとえば統合航空構成部隊司令官ホーナー中将は、数年にわたってペルシャ湾岸諸国の要人との交際経験があった。特にサウジアラビア空軍司令官ベヘリー（Ahmed Ibrahim Behery）中将と友好関係にあった。さらにベヘリー中将だけでなく、アラブ合同軍総司令官ハリド中将も共にアメリカのアラバマ州マクスウェル空軍基地に所在する空軍大学に通った経験があった[424]。そのためアメリカ軍とアラブ合同軍の空軍関連での意思疎通は、その共通土壌が有効に作用すると考えられた。

大規模な連合作戦は、古くは第一次世界大戦や第二次世界大戦にも見られ、そこでも各国の高級指揮官たちの関係は重要であった。しかし湾岸戦争時の多国籍軍高級指揮官たちの関係は、過去と比較して飛躍的に増大していた国際交流、共同訓練、共同演習の実施などで交流関係のある各国の指揮官世代が育成されたことを意味していた。そのため湾岸戦争の多国籍軍の統一性という点では、先に挙げた世界大戦などと比較すると、卓越したものだった[425]。

（２）　常続的な共同訓練（連合訓練）の有効性

アメリカ、イギリスなど西側諸国（NATO 諸国）は、従前から共同訓練を実施する経験が多かったため、連合作戦に比較的スムーズに臨めそうに思えたが、実際には湾岸地域では、訓練や戦術で多くの調整が成されなければならなかった[426]。それでもイギリスの国防報告では、多国籍軍内での NATO 諸国間内の連携は非 NATO 諸国と比較し、容易であったと評価し、その理由として 40 年にもわたる様々な共通基盤での訓練等の実施、手順等の共通化をあげている[427]。

しかし、NATO で予想された戦域とは全く異なる場所へ展開しての作戦であったために多くの問題が発生した。各国の各種装備が多種類によるため、相互運用性の問題は当初から予想されるものであったが、各国の部隊の連携、装備品の改修等も実際に現地での訓練等で明らかになった。幸いなことは比較的対処時間が確保されたことだった。

特に中東各国の軍に関しては、アメリカとその他のアラブ諸国との間での再訓練、アラブ各国軍の再編成、再装備が不可欠だった。エジプト軍は従前、アメリカ軍と訓練を実施した経験があったにもかかわらず、多くの修正が不可欠だった。また「砂漠の盾」作戦間、サウジアラビア地上軍の訓練ではアメリカ陸軍が演習方法や実践に即した内容にする

---

423 Weitsman, *Waging War*, p. 53.
424 Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey Summary Report*, pp. 157-158.
425 Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 233-234.
426 *Ibid.*, p. 69.
427 Secretary of State for Defence, *Statement on the Defence Estimates 1992*, p. 71.

ために協力を惜しまなかった。これらは後の連合作戦で決定的な価値を示すこととなった。またアメリカ軍もサウジアラビア軍やエジプト軍との長期間の演習等で砂漠戦でのやり方を多く学んだ[428]。

イギリス軍指揮官のドラビリエールは、平時における常続的な訓練、アメリカの「レッド・フラッグ」演習（空軍）やカナダで「ベイタス（BATUS)」演習（陸軍）のような海外での演習は自軍だけでなく同盟国との連携をとるのに不可欠であり、さらに大規模な実弾演習の必要性を湾岸戦争で感得している。しかしこのような大規模な実弾演習や同盟国との海外での共同訓練は、統合や連合作戦の観点では効果があるが、平時においては経費がかかりすぎるために、削減されることも多いのが問題であった[429]。実際に同盟国との平時の共同訓練は小規模で象徴的な事象になりやすいため、実際の連合作戦を実施した場合の問題点が十分に把握できないことが考えられた。一方で共同訓練を常続的に実施することで、各国の戦闘能力の把握が容易となり、連合作戦での各国軍の任務付与に関して適切な配分を実施することに寄与するメリットも考えられる。

（３）　友軍相撃の必然性

連合作戦では多数の国が参加すればするほど、友軍相撃の可能性は増大する。参加国軍毎のアプローチや保有する軍事技術の相違、言語および通信手順の違いのため、正確な敵味方識別には大きな障害があった。もちろん軍事技術が高度化するにつれて、参加国間の装備の相互運用性が向上すれば、そのリスクは減少するはずだった。

たとえば多国籍軍は航空警戒管制機 E-3 を運用していたため、空対空戦闘では視程外のはるか遠方で確実に敵機を補足し、友軍相撃が発生するような乱戦を回避し、味方戦闘機は視程外からの攻撃で勝利を収めた。一方で現代兵器の高性能化は、友軍相撃事態が発生する局面では、その殺傷能力の高さおよび正確性から死傷者の発生確率が高くなることを意味した。それでも過去の大規模戦争と比較すれば、湾岸戦争での友軍相撃は極めて少なかったが、湾岸戦争は多国籍軍の圧勝であったが故に、友軍相撃がかえって目立つこととなった。アメリカ空軍によるイギリス地上軍に対する誤爆はショッキングなものであったが、アメリカ軍自身も損害の約 4 分の 1 が友軍相撃だった。この問題は感情的に極めて機微な問題だった。イギリス軍司令官ドラビリエールは、自軍が受けた友軍相撃による損失に対して既述したように努めて冷静に対処した。彼は連合作戦において友軍相撃は必ず発生する事象であると考えた。最も恐れるべきことは、多国籍軍内の団結にひびが入ることだった。もちろん完全な敵味方識別が可能とするための装備を各種部隊の末端まで配備することができ

---

[428] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 69-71, 113 , 679. アメリカ主催の「ブライト・スター（Bright Star)」演習が 1983 年、85 年、87 年、90 年にエジプト、オマーンと中東で実施されたという実績はあったが、後の湾岸戦争を考慮すれば、全く不十分なものだった。

[429] House of Commons, *Defense Committee Tenth Report, Plelimnary Lessons of Operation Granby* (London: HMSO, July 17, 1991), pp. xv-xvi.

れば技術的にリスクを回避させることとなるが、それには法外なコストがかかり、現実的ではなかった。そのリスクを許容しなければならないのが現実的な選択肢だった[430]。このことを連合作戦においては各国が事前に十分に認識し、友軍相撃発生時にその団結にひびが入らないように留意する必要がある。

（4） 軍事能力格差があった故に円滑だった連合作戦

特にアラブ合同軍に対しては面子さえ立てば、アメリカ側の要求で作戦に関して統制することは比較的容易だった。なかでもアラブ合同軍は戦略、作戦計画策定等の軍事能力は高くなかったため、大義名分さえあれば、実質的に、アメリカの統制下に従うことに大きな抵抗はなかったからである。

湾岸戦争で多国籍軍は、軍事的圧勝を収めたものの、連合作戦の問題点が十分に検討され、最善の対処が十分になされたかについては、疑念が残る。湾岸戦争ではイラク軍と多国籍軍の戦力差が隔絶していたため、連合作戦の様々な面において潜在的な問題点、たとえば複雑な指揮、統制系統に関する問題が表面化し、軍事作戦に大きな影響が出ることはなかったからである。

たとえば伝統的に独自性を追求する傾向にあるフランス軍では、その空軍は当初は自軍の支援のためだけに使用することを主張し、ホーナー中将に認められていたが、フランスは最終的にはフランス地上軍が展開する西部戦域だけではなく、その他の地域でフランス空軍が支援することも許可した[431]。実際に展開されたフランス空軍の能力は、アメリカの航空部隊と比較すると微々たるものであり、フランス空軍の使用方法の差異が、多国籍軍航空作戦全般に及ぼす影響はほとんど無いに等しいため、特にホーナー中将もフランスの当初の要望を問題視しなかったと思われる。逆に反対した場合のフランス軍との様々な軋轢が発生することを予想すれば、ホーナー中将の判断は極めて適切なものであった。このようにアメリカに対しては多国籍軍参加国から様々な要望が出ることがあったが、大局的に大きな影響が出なければ、多国籍軍の不協和音を発生させないためにも、可能な限り認める傾向にあった。これは特に多国籍軍の戦力面で、アメリカ軍が他国を圧倒していたことが前提条件として存在したためと考えられる。特に航空部隊に関しては、多国籍軍はイラク軍を一方的に圧倒しているのは明らかなうえに、アメリカ軍以外の航空部隊は、その攻撃能力は非常に微々たるものであったため、そのような傾向が強かった。

また航空部隊は陸上部隊と異なり、多数の国が、遠距離であっても展開を短期で実施できるという特徴があった。そのため、短期間で早期に多国籍の航空部隊が作戦を実施する上での様々な手順等の取り決めを実施する必要があった。JFACC は作戦規定を定め、早くも 8 月中旬には、いくつかの未決定な部分はあったが、多国籍軍内で調整が成された。これは初

[430] Weitsman, *Waging War*, pp. 55-56.
[431] Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey Summary Report*, pp. 158-159.

動においてアメリカ軍とサウジアラビア空軍司令官等の高官たちが密接な関係を築けたことが一因で、サウジアラビア空軍とアメリカ軍との調整が早期に進展したことによって、後に展開した他国の空軍についても同様な協力関係を広めることが容易となった[432]。

一方で陸上作戦に関しても練度や兵器の質は当然ながら、アメリカ軍が他国を上回っていたが、アメリカ軍以外の多国籍軍に対して航空部隊ほど圧倒的に勝っていたわけではなく、量的にはイラク軍との戦域をカバーするには他国、特にアラブ合同軍（東部、北部）の展開が不可欠であった。当然、彼らは攻勢の主力を担うわけではなかったが、兵力として戦域を埋める必要があった。またクウェート解放という大義を成就させるには、アラブ地上軍が建前上、その任を担わなければならなかった。特に地上作戦ではアラブ合同軍の能力の低さは認識しつつも、彼らの面子を立てなければならないという軍事的合理性とは異なる部分でアメリカ軍は気を遣った。このことは 1 月のカフジの戦いにも如実に表れている。既述したように本来であればカフジの戦いをアメリカ海兵隊が対処すれば、より短期に圧倒的勝利を収めたと思われるが、実際にはアラブ軍に任せた。また 2 月の多国籍軍の地上攻勢時にもアラブ合同軍の面子を立てた作戦を実施させた。当然、緊急時（アラブ合同軍が対処できなくなる事態）のバックアップをアメリカ軍は考慮し、多国籍軍の連合作戦の円滑な運用に努めた。一方で西方の主戦域でアメリカ陸軍と共に戦った西側諸国のイギリス陸軍とフランス陸軍は、実際にアメリカ軍との連合作戦で軍事的に必要な部隊として運用された。特にイギリス第 1 機甲師団は、多国籍軍の主攻勢戦域担当であったアメリカ第 7 軍団の機甲部隊の 3 本の矢の 1 本を担う主戦力であり、真の意味で連合作戦を実施した。

アメリカ軍はアラブ軍の面子を立てることに気を遣い、特に陸上作戦では、彼らが能力的に実施可能な任務を付与することによって、多国籍軍の指揮統制の円滑な運用に留意した[433]。いずれにせよ面子等の留意点はあったものの、アメリカが他国より軍事能力がずば抜けて高かったために、軍事作戦に関して全軍を実質的に統制できたといえる。

（5） 調整組織の重要性

多数の国家が参戦する複雑な指揮系統となった多国籍軍の作戦実施を円滑にするために、様々な調整等を実施する組織として多国籍軍調整連絡統合センター（Coalition Coordination, Communication, and Integration Center: C3IC）の設立が重要となった。これによって複雑な指揮関係によって発生する摩擦を最小限にすることができた。

その象徴的な事例として、C3IC では毎日の状況ブリーフィングがアメリカとサウジアラビアの士官によって実施されていた。C3IC はアメリカ中央陸軍の副指揮官とサウジアラビア統合軍指揮官によって共同で管理された。C3IC では様々な機能別セクションが、配員さ

---

[432] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, p. 237.
[433] *Ibid.,* pp. 234-235.

れたサウジアラビアとアメリカの将校たちによって運営された[434]。

また各国の政治的リーダーたちは、軍事的事項に関しては軍人のリーダーに任せたため（サウジアラビアは必ずしもそうではなかったが）、政治的リーダーによる軍事面の干渉が少なかったことが多国籍軍内の協力の円滑さをより促進することとなったことは幸いだった[435]。

（６）　特異な国際環境および経費の負担

第二次世界大戦以降の大規模戦争と比較すると、湾岸戦争を取り巻く国際環境は極めて特殊であり、多国籍軍には極めて有利に働き、逆にイラク軍に対しては逆風となった。第二次世界大戦以降の過去の大規模戦争では冷戦が背景として存在したため、国際連合は十分に機能せず、強大なアメリカと戦火を交わす国家もソ連、中国等が介在することにより、戦争継続を可能とした。しかし湾岸戦争時には冷戦が終結し、イラクのクウェート侵攻のような露骨な侵略行為には、心情的に同情する一部のアラブ諸国は例外として、ほぼ一致して世界各国は、その行為を非難し、国際連合の場でもイラクに対する様々な決議がスムーズに可決され、いわゆる錦の御旗の下、大義名分をかざして多国籍軍は行動することとなり、それに加わる各参加国も参戦が容易となった。イラクはほぼ孤立無援であった[436]。

冷戦が終結したことで、当面の湾岸戦争に対して、様々な面で後顧の憂いがない環境であった。湾岸戦争後の軍事力への各国の注力は、冷戦終了を考えれば、減少できることが予想された。その意味で各国共に思い切った軍の派遣、あるいは経費の負担に対応できる素地があったと考えられる。ただしこのような 1990 年前後の国際環境は、現在から考えれば、第二次世界大戦後の冷戦という嵐が過ぎ去った一瞬の一時的な僥倖に過ぎなかった。

一方、日本は湾岸戦争では戦後の掃海艇派遣を除いて、軍事活動に参加することはなかった。その代わりに資金供出を実施し、総額は 130 億ドルにも達したが、国内では資金供出に対する国際的評判は芳しくなかったと伝えられることが多い。しかしシュワルツコフの自伝では、「砂漠の盾」作戦の早期から作戦準備が円滑に推進された要因の１つとして日本の貢献が大きく評価されている。また日本以外にもドイツの他に戦域となったアラブ諸国からの潤沢な資金は多国籍軍の作戦準備と遂行において成功の大きな要因となったことは間違いないと思われる[437]。

---

[434] *Ibid.,* pp. 229-230. C3IC にはイギリス、カナダ、フランス地上軍、サウジアラビア国家警備隊、アメリカ第 7 軍団の連絡官たちも詰めた。

[435] *Ibid.*, p. 233.

[436] それでも既述したようにアラブ諸国の足並みを完全にそろえるのは困難だった。たとえば消極的なシリア軍は予備とすることなどで連合作戦の円滑な遂行に苦慮した。

[437] しかし、2018 年 5 月 31 日の西日本新聞電子版記事（<https://www.nishinippon.co.jp/item/o/420943> 2018 年 6 月 1 日アクセス）によれば、日本政府が拠出した多国籍軍への追加財政支援 90 億ドル（当時のレートで約 1 兆 2 千億円）のうちイギリス分の額について、イギリス政府が自国の派兵規模に比べて「少な過ぎる」と不満を示していたことが、5 月 31 日までに機密解除されたイギリス外交文書で明らかになった。イギリス政府は公式には謝意を表明していた

（7）　連合作戦に必要な通信機材等の供給

多国籍軍による連合作戦を円滑に進めるためには、状況の変化に対応可能な迅速な情報共有が不可欠であった。そのため、装備に関して保全に十分配慮された通信器材を共有する必要があった。結果的に、実際に最も装備が整っていたアメリカ軍に多国籍軍は依存しなければならなかった。特にこの装備面で不足が目立つアラブ合同軍へは多数の指揮通信システム、秘匿無線装置、暗号装置が供与された。また地上作戦で重要な役割を果たすイギリス第 1 機甲師団もアメリカ地上軍と連携を密にするため、地上移動用衛星通信システムが与えられた。一方でフランス陸軍も、アメリカ陸軍の移動通信システムとの相互運用性を高めるために、自軍の通信システム（RITA システム）を改修しなければならなかった。全ての軍がアメリカの通信システムなしでは連携がとれないのが実情であり、連合作戦の中で必須である通信システムの構築には、部隊の戦力投射ほど目立たないが、11 月半ばまでという期間も必要であった[438]。

このように現代の連合作戦を円滑にするためには、通信機材等は不可欠であるが、湾岸戦争のような作戦形態の場合、アメリカ軍以外はジレンマに直面することとなる。自軍がアメリカ軍と連合作戦を実施する場合が多いと考えるならば、アメリカ軍との通信機材との共通化を図ることが、アメリカ軍との連携には有利である。一方でそのことは、主としてアメリカ製通信機材を調達し、国産機材の調達には否定的になることを意味した。現代戦においては通信機能、特にデータリンク機能が充実する中で、このような傾向は増大すると思われる。すなわち自軍の作戦形態をアメリカとの連合作戦と予期する場合は、装備面での独自性だけでなく、軍事面での自主性に影響を及ぼす可能性があることに留意する必要がある。

（8）　連合作戦の形態

湾岸戦争参戦国における軍事的能力でのアメリカ軍の一極化は、既述したように様々な面で連合作戦におけるアメリカ軍への依存を増大させた。当面大規模な連合作戦にアメリカ軍が参加する場合は、この傾向に変化はないと考えられる。第二次世界大戦末期のヨーロッパ戦線では、アメリカとイギリスが、大規模な連合作戦を実施した。当時アメリカ軍とイギリス軍では湾岸戦争ほどの戦力格差は生じていなかったため、アメリカ軍のアイゼンハワーが総司令官になりつつもイギリス軍の意向を無視するわけにはいかなかった。たとえばノルマンディー上陸作戦当初のアメリカ軍とイギリス軍の上陸兵員比は拮抗しており、

が、当時の本音が浮き彫りになった。湾岸危機・戦争で、日本は憲法上の制約から人的貢献をせず、多国籍軍参加国に総額 130 億ドル超の財政支援を実施。だが国際的な評価を得られなかったことがトラウマとなっている。日本政府によるとイギリスに 390 億円を割り当てた。

[438] Cordesman and Wagner, *The Lessons of Modern War,* Vol. IV, pp. 257-264. 通信機材の他にアメリカ軍からは他国が不足するものとして多数のパソコンも供与された。

湾岸戦争時とは様相が相当に異なっていた[439]。その結果ノルマンディー作戦以降もドイツ本土への進撃進路はアメリカ軍とイギリス軍で主張が相違し、アイゼンハワーはその調整に苦慮することになった[440]。第二次世界大戦以降も朝鮮戦争、ベトナム戦争と連合作戦の形態をとる戦争は発生したが、実際には湾岸戦争と同様、アメリカ軍が戦力の中核で作戦遂行の主導権を握っていた。しかし時代が下るにつれて、様々な軍事技術の発展は、よりテンポの早い戦況への迅速な対応や過去よりもよりシビアに感じられる友軍相撃を回避するために　アメリカ軍とのより強い連携が連合作戦においてアメリカ以外の軍には要求されることとなった。このことは湾岸戦争にとりわけ顕著に表れた。しかしそのためには単なる共同訓練の実施だけではなく、アメリカ軍との装備の共通化（湾岸戦争ではアメリカ軍からの器材供与が主であったが）が重要な因子となった。そして連合作戦を念頭に置くならば、主たる同盟国の選択は中長期的に固定する必要があることを示している。

一方でイギリス製航空機が中東へ輸出されていたことで、結果的にイギリス空軍機が湾岸地域へ進出した際に後方面で有利な面が見られたことは既述したとおりである。このことは武器輸出が連合作戦に間接的ながら寄与する可能性があることも示している。あるいは長期的に主たる同盟国との各種装備の共同開発を継続することも連合作戦実施のうえでは有効となることにも留意する必要がある。

湾岸戦争は特異な戦争であった。印象は強烈なものがあり、いわゆるハイテク兵器が注目されたが、この戦争を普遍的な教訓抽出の場とするかは議論がある[441]。幾度も既述したように作戦準備期間を十分にとれたこと、一方的な国際環境等、極めて有利に多国籍軍に作用したからである。

逆に、準備期間がない状況で早い時期に戦端が開かれた場合、イスラエルが参戦した場合、化学兵器等が大量に使用された場合、連合作戦という観点から多国籍軍が実際の湾岸戦争のようにうまく連携をとれたかどうかは議論の余地があるように思われる。

また連合作戦に付随する友軍相撃の問題に関しては、その回避に関しては相変わらず、古典的だが厳密な国ごとのエリア分離や任務付与が効果的手段であろうことが推察された。湾岸戦争の連合作戦という観点からは何度も既述したように作戦開始までの準備時間が十分に確保できたことが重要で、特に「砂漠の盾」作戦期間を結果的に多国籍軍が、自己の意図通り十分に確保できたことは（結果的に航空作戦も地上作戦も多国籍軍の計画通

---

439 文献等により差異はあるが、たとえばピータ・ドイル『ビジュアル版 データで見る第二次世界大戦――軍事力・経済力・兵器・戦闘・犠牲者』竹村厚士監訳（柊風舎、2014 年）81-85 頁によれば、ノルマンディー上陸作戦当初の上陸部隊はイギリス兵 6 万余り、アメリカ兵 7 万名余り、カナダ兵 2 万名余りという状況だった。ただし物量面では、アメリカがイギリスに対して優越していた。

440 第二次世界大戦の西部戦線でのアメリカ軍とイギリス軍との連合作戦での軋轢は、石津朋之『総力戦としての第二次世界大戦――勝敗を決めた西方戦線の激闘を分析』（中央公論新社、2020 年）第 7 章を参照。

441 Secretary of State for Defence, *Statement on the Defence Estimates*, Vol. I, p. 26. たとえばイギリスはこの報告書では湾岸戦争に特有の要因から普遍的結論を導かないよう注意すべきと述べている。

りに開始された)、各国の軍の展開期間の確保[442]、調整、順応、共同訓練、装備改修等で際だって有利に作用した。多国籍軍は非常に幸運だった。

[442] それでも de la Billiere, *Storm Command*, pp. 143-144 によれば、イギリス第 1 機甲師団の最後の部隊はようやく 12 月 10 日に到着し、地上戦開始までの師団としての準備にはそれほど余裕があるわけではなかった。